

スポーツ庁 委託事業

アスリートの効果的なキャリア形成支援の 在り方に関する基礎的調査研究に関する 事業報告書

EYストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社

2023年2月28日

報告書目次

1 本事業の背景・目的	P.03
1.1 本事業の概要	P.04-09
2 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析	P.10
2.1 大学調査を実施した手法	P.11-13
2.2 大学調査における調査結果	P.14-25
2.3 各大学で実施されている取組事例	P.26-28
2.4 国内学生アスリートの調査結果	P.29-52
3 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析	P.53
3.1 アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報	P.54-56
3.2 NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート	P.57-59
3.3 NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート	P.60-63
3.4 Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート	P.64-67
3.5 INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート	P.68-70
3.6 AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート	P.71-76
4 有識者検討会議の開催・決定事項	P.77
4.1 有識者メンバーについて	P.78-79
4.2 有識者検討会議の決定事項	P.80-85
5 調査結果の纏め提言	P.86
5.1 調査結果の纏め	P.87-90
5.2 具体例	P.91-94
6 競技を引退したアスリートの活動状況について	P.95
6.1 事例集の目的	P.95-96
6.2 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添	P.98-100
6.3 引退したアスリートによるワークショップ実施内容・結果	P.101-107

1. 本事業の 背景・目的等



1.1 本事業の背景・目的等

トップアスリートのキャリア形成に対する課題を分析し、中・長期的かつ効果的な施策を有識者検討会議における議論を反映し、調査・分析を実施

事業の背景・目的

アスリートが競技外のキャリアにおいてスポーツで培った能力を発揮し活躍することは、アスリート自身の人生の充実という点のみならず、アスリートが有する価値を社会に還元するという点においても重要である。また、アスリートの競技外での活躍は、スポーツの価値を高め、スポーツ参画人口の拡大、ひいては競技力の向上にも寄与する。このような認識の下、オリンピック・パラリンピック東京大会を終え、多くのアスリートがキャリア移行期を迎える中で、アスリートのキャリア形成支援のより一層の充実を図るため、基礎的調査研究を実施し、具体的な取組を検討する必要がある。

本事業は、アスリートのキャリア形成支援に関する課題解決に向けて、国や中央競技団体等が実施すべき政策や取組を検討するため、諸外国におけるスポーツ政策やスポーツ団体等の取組事例等を調査するものである。また、国内学生アスリートの学業成績と競技成績、就職先状況等の実態や、競技を引退したアスリートの就職先等の活動状況を調査するとともに、スポーツ界にとどまらない新たな産業領域等におけるアスリートの活躍事例を収集し、調査分析を行う。

本報告書の構成

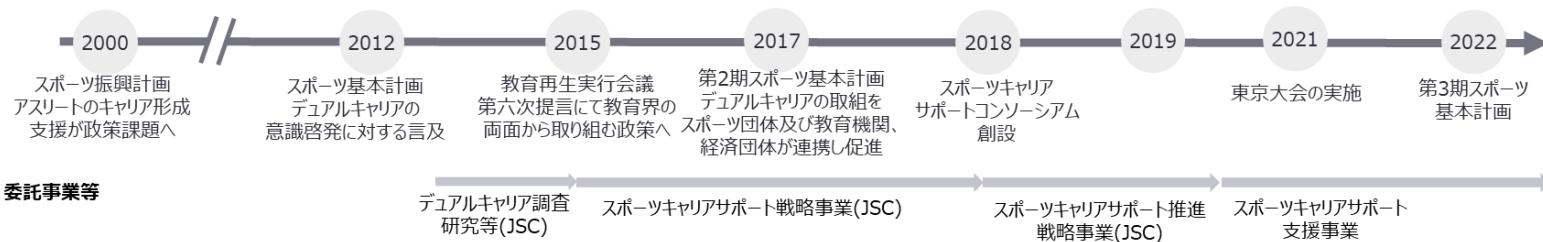
上記目的を鑑みて、本報告書では、以下の構成にて、事業での調査結果をまとめます。

章	内容
第2章 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析	日本の大学に通う学生アスリートの学業成績、競技活動、就職状況の相関関係を調査し、分析結果を報告します。 1. 大学調査を実施した手法 2. 大学調査における調査結果 3. 各大学で実施されている取組事例 4. 国内学生アスリートの調査結果
第3章 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析	海外にて実施されているキャリア形成に係る支援について、調査し、分析結果を報告します。 1. アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報 2. NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート 3. NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート 4. Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート 5. INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート 6. AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート
第4章 有識者検討会議の開催・決定事項	今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方を有識者検討会議で議論し、方針を決定。その決定内容を報告します。 1. 有識者委員について 2. 有識者検討会議の決定事項
第5章 調査結果のまとめと提言	第2章から第4章までの調査結果をまとめて、今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方に関する取組につき提言します。 1. 調査結果のまとめ 2. 具体例
第6章 競技を引退したアスリートの活動状況について	競技を引退しスポーツ界内外で活躍しているアスリートの取組を紹介します。 1. 事例集の目的 2. 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添 3. 引退したアスリートによるワークショップ実施内容・結果 4. 考察

1.1 本事業の背景・目的等

これまでスポーツ庁が実施してきたスポーツキャリアサポートに関する事業内容を活かしつつ、トップアスリートおよび学生アスリートの課題を調査

当事業におけるこれまでの流れとキャリアサポートの課題



○スポーツ庁 第3期スポーツ基本計画

- 政策目標：国民がスポーツに親しむ上で不可欠となる「ハード(場づくり)」「ソフト(環境の構築)」「人材」といった基盤を確保・強化するため、場づくりや環境の構築、スポーツに関わる人材の育成等を進める。
- 施策目標：現役時のアスリートへ効果的にキャリア形成支援を行う支援者の不足等の課題を踏まえ、新たな取組を含め、アスリートのキャリア形成支援を着実に促進する。

事業の目的①

アスリートの競技外での活躍は、スポーツの価値を高め、スポーツ参画人口の拡大、ひいては競技力の向上にも寄与することから、国や中央競技団体等が実施すべき政策や取組を検討するため、諸外国におけるスポーツ政策やスポーツ団体等の取組事例等を調査する。

スポーツキャリアサポート支援事業

スポーツキャリアサポート支援事業の課題

- アスリートのデュアルキャリア形成支援に積極的に取組むNFは全体の2割以下にとどまり、現役時のアスリートへキャリア形成支援が不十分である。
- 各スポーツ団体、企業、チーム等によるアスリートのキャリア形成支援についての取組の好事例がスポーツ界全体に幅広く浸透していない。
- スポーツキャリアコンソーシアムやアスリートキャリアコーディネータの活用が浸透できていない(参加企業40社)
- 部活動と学業におけるセカンドキャリアとの因果関係が不明確であり、対策の仕方ができていない。

事業の目的②

東京2020大会を終え、多くのアスリートがキャリア移期を迎える中で、アスリートのキャリア形成支援のより一層の充実を図る。
また、国内学生アスリートの学業成績と競技成績、就職先状況等の実態を調査し、教育的観点から提言を実施する。

当事業の全体像

アスリートのキャリア形成支援に関する課題解決に向けて、国や中央競技団体等が実施すべき政策や取組を検討するため、諸外国におけるスポーツ政策やスポーツ団体等の取組事例等を調査します。また、国内学生アスリートの学業成績と競技成績、就職先状況等の実態や、競技を引退したアスリートの就職先等の活動状況を調査するとともに、スポーツ界にとどまらない新たな産業領域等におけるアスリートの活躍事例を収集し、調査分析を行います。

当事業の業務範囲

(2) 諸外国におけるアスリートのキャリア形成支援の取組に関する調査・分析

NCAAを中心とした諸外国の取組実態を調査しNF等の課題・施策をマッチング

4カ国のセカンドキャリア支援を調査

諸外国の団体等へのヒアリング

事例のとりまとめと日本への示唆

方針の決定



相談・検討

(1) 有識者検討会議の設置

調査・研究の方向性や結果等について、助言等を得る

調査方針の確認・決定

中間報告の内容確認

調査結果と提案骨子の検討

相談・検討



方針の決定

(3) 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析

国内学生アスリートを中心とした調査とともに学業との関係性を分析

学業と競技活動との両立の実態調査

学生アスリートの就職活動状況・課題

アスリートの引退後の活躍事例収集

(4) 追加提案

EY独自のセカンドキャリア支援サービスとの連携

アスリートによるワークショップ (Making an ERA)

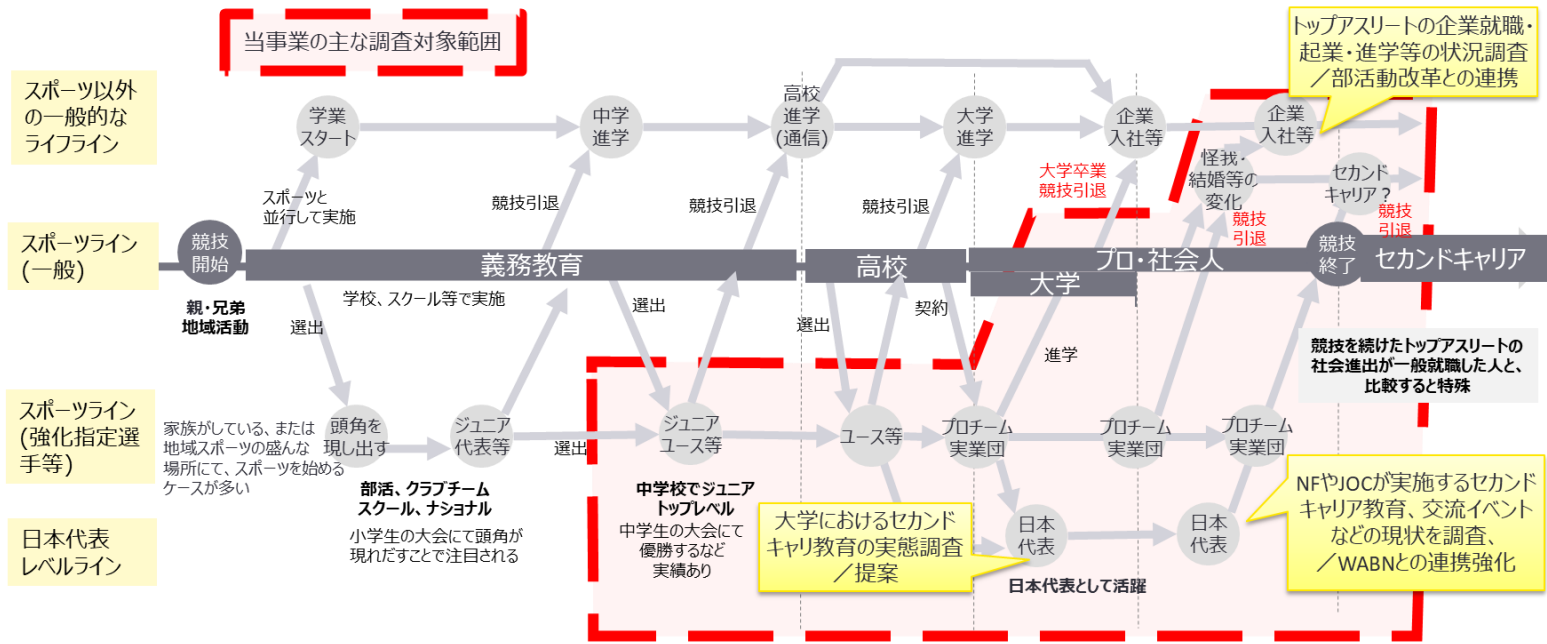
WABNアカデミー、グローバルメンタリングプログラム連携
※ WABN: Women Athletes Business Network

人材・データの連携

EYコミュニティやアドバイザー研修の結果反映

1.1 本事業の背景・目的等

当事業における調査範囲の中心は、トップアスリートを輩出する大学生アスリートおよびプロ・社会人。また、海外比較をするための情報を収集

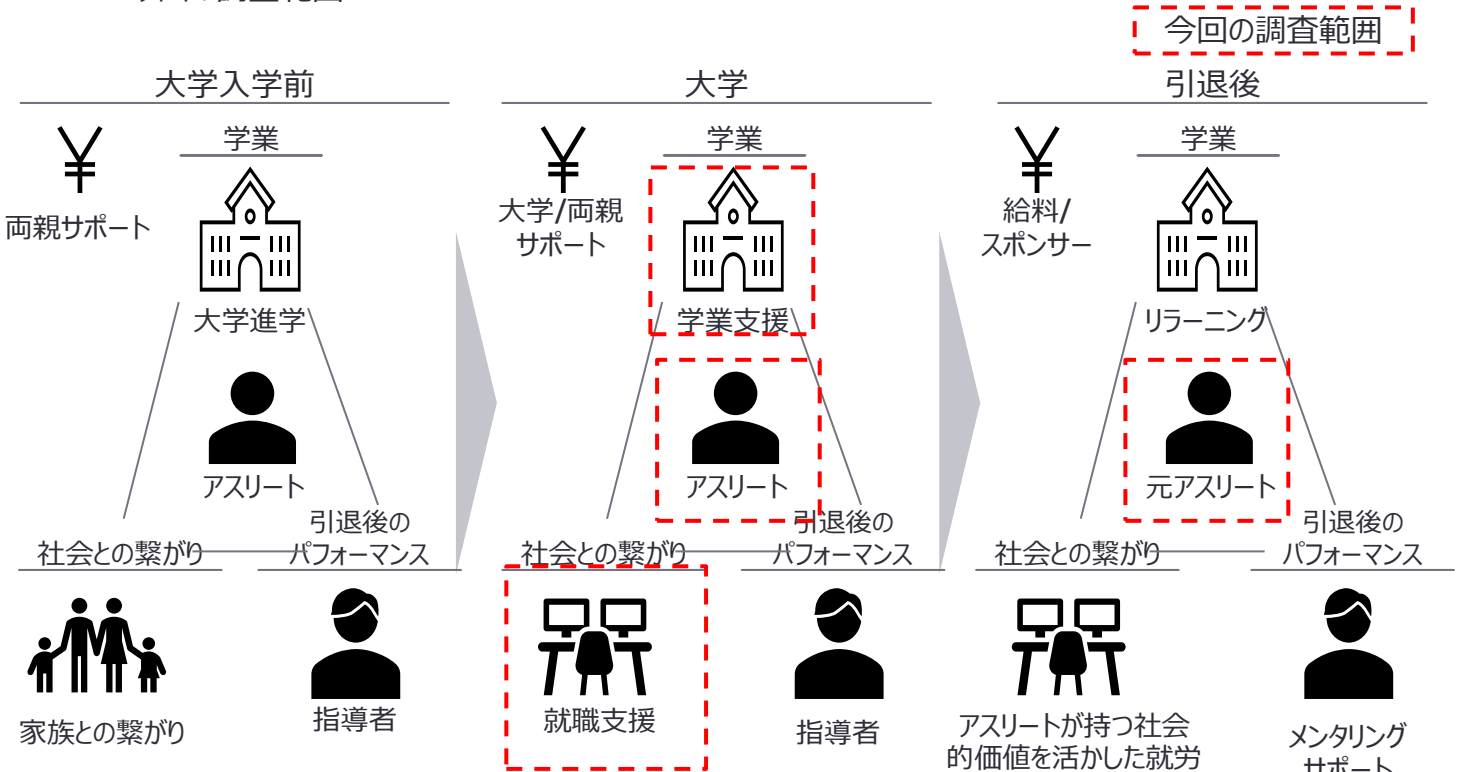


学生アスリートとは？

⇒ 大学がオフィシャルに運営し、主に学生競技連盟（学連）主催の大会に出場する部・クラブに所属する学生のことを指している。「アスリート」としているが、選手であるか、トレーナーやマネージャーといった学生スタッフであるかは問わない。ただし、一時的に結成されたチームやサークルは含まない。（体育会系神話の歴史と現在—コロナ禍にみる変化の兆し 2022年京都先端科学大学健康医療学部准教授 より）



<今回の調査範囲>



現役アスリートや元オリンピック選手などのトップアスリートからヒアリングを実施。調査開始前に日本スポーツ界のキャリア形成に関する課題を確認

トップアスリートのキャリア形成に関する主な課題と調査観点

(トップアスリートへのヒアリング及び当社独自取組による考察)

1

トップアスリート自身の社会との断絶

トップレベルの選手になればなるほど、スポーツ界以外との関係が薄くなっていく傾向にある。競技成績の向上を主眼と置くこととなるため、競技から離れたところでのコミュニティや他競技との繋がりが少なく、引退後のキャリア形成に対する意識が低い。特に女性アスリートは、ネットワークを開拓、拡大する機会が不足しているという声が多数。



- トップアスリートの社会進出機会の頻度や所属チーム、所属企業との関係
- 主に国内におけるアスリートが引退後に直面する課題

2

トップアスリートに向けたキャリア教育環境の不足

元トップアスリートや直近の引退選手に対してヒアリングした結果、男性・女性でのセカンドキャリアに対する意識の違いはあるものの、共通して、引退を検討する前からの教育を要望している。しかしながら、JOCや中央競技団体（NF）等において積極的なキャリア教育(例：ファイナンシャルリテラシー)がなされていないのが現状。



- NCAAなど、海外の大学で実施されているアスリート向け制度や政府支援策
- 国内トップアスリートの学業とキャリアにする関係性
- 各リーグやJOC、NFにおけるキャリア意識向上活動の有無、そのプログラムへの評価

3

キャリア形成に関するモデル事例・情報の不足

スポーツ界内外におけるキャリア形成に成功している人の情報がまとまっていて、且つ、キャリア教育として示されているものが少ない。JOCや一部民間企業でインタビュー等の情報を提供しているサイトがあるものの、専門的な分野に関する内容がない。NCAAのようにOB・OGからの情報が豊富に集まっているものが必要。



- 国内アスリートと社会との関係性構築事例やキャリア形成の好事例モデルケース
- アスリートに対してキャリア形成に関する情報の提供

本プロジェクトにおけるAS-IS/TO-BE



2. 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析

章	内容
第2章 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析	日本の大学に通う学生アスリートの学業成績、競技活動、就職状況の相関関係を調査し、分析結果を報告します。 1. 大学調査を実施した手法 2. 大学調査における調査結果 3. 各大学で実施されている取組事例 4. 国内学生アスリートの調査結果
第3章 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析	海外にて実施されているキャリア形成に係る支援について、調査し、分析結果を報告します。 1. アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報 2. NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート 3. NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート 4. Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート 5. INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート 6. AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート
第4章 有識者検討会議の開催・決定事項	今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方を有識者検討会議にて討議し方針を決定。その決定内容を報告します。 1. 有識者委員について 2. 有識者検討会議の決定事項
第5章 調査結果のまとめと提言	第2章から第4章までの調査結果をまとめて、今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方に関する取組につき提言します。 1. 調査結果のまとめ 2. 具体例
第6章 競技を引退したアスリートの活動状況について	競技を引退しスポーツ界内外で活躍しているアスリートの取組を紹介します。 1. 事例集の目的 2. 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添 3. 引退したアスリートによりワークショップ実施内容・結果 4. 考察

2.1

大学調査を実施した手法

国内における大学および学生アスリートの活動状況を調査・分析するため、以下の調査手法にて、計11大学に調査を実施

◆調査目的

- 東京2020大会を終え、多くのアスリートがキャリア移期を迎える中で、アスリートのキャリア形成支援のより一層の充実を図ることが必要とされている。
- オリンピックにも数多くの学生アスリートが出場しているなか、学業と競技の両立、そして就職活動と限られた時間の中でどのように学生生活を送っているのか、実態を調査し、教育的観点から提言を実施する。
- 実際に、大学が大学スポーツをどのようにとらえ、学生アスリートへの学業支援、就職支援等、キャリア形成支援を実施しているのか、取組事例を調査する。

◆調査・検討手法

- 学生アスリートの学業と競技活動との両立の実態、それぞれの活動時間や成績、就職状況等との相関関係及び大学の各取組事例について明らかにするために、今回は以下の調査を行った。

<①大学が実施している大学スポーツの全体像調査>

- － 過去のオリンピック選手及びプロスポーツ選手輩出数、大学の地域性から11校を選定（11大学については13ページ参照）
- － 各大学に大学スポーツの在り方、大学スポーツの組織の在り方、学生アスリートに対する学業、キャリア支援等の取組、大学スポーツの課題等について調査票を送付

<②全体調査回答に対する個別ヒアリング調査>

- － 上記①の調査の回答を元にヒアリング調査を実施。各項目についての深堀を行う
- － 計5大学に実施

※①大学が実施している大学スポーツの全体像調査の調査項目については、有識者検討会議の各委員より、助言を頂きながら、調査の方向性及び、調査項目の内容について決定した。

調査を実施した大学一覧

【①大学が実施している大学スポーツの全体像調査】にて調査に協力頂いた大学

今回の調査対象となるアスリートの競技レベルが、JOC、JPC の強化指定選手、プロスポーツ選手、日本トップリーグ連携機構に加盟する団体に所属するチームの選手のうち、日本代表に選出された経験がある選手であることから、調査する大学を選定する上で以下項目に注力し選定した。

- ▶ 過去のプロスポーツ選手輩出数
- ▶ 過去のオリンピック選手輩出数
- ▶ 地域 (関東に所在する大学だけではなく、地方に所在する大学)

#	大学名	体育会所属 学生割合
1	A大学	3.2%
2	B大学	6.4%
3	C大学	4.7%
4	D大学	7.1%
5	E大学	7.2%
6	F大学	7.1%
7	G大学	5.9%
8	H大学	10.5%
9	I大学	9.4%
10	J大学	68.9%
11	K大学	35.2%

2.2

大学調査における調査結果

調査概要

1. 大学が実施している大学スポーツの全体像調査

◆調査手法

- 2022年9月23日から2022年11月17日の期間に、計11大学に調査票を郵送し回答頂き、各大学における大学スポーツの位置づけや、取組内容についての実態を調査、今後の大学スポーツの目指す方向性や課題について考察した。

◆調査事項

- 各大学への調査項目については、今後の大学スポーツの方向性を検討する上で認識しておくべき重要なものとして想定される下記5項目を中心に設定した。

大学スポーツの意義	<ul style="list-style-type: none">▶ どのような意図でスポーツ活動を実施しているか▶ 大学スポーツの目指す方向性
運動部の組織体制・ 管理方法	<ul style="list-style-type: none">▶ 運動部数、所属学生数▶ 運動部を管理する組織体制、強化費の分配
最高責任者及び指導者 との契約	<ul style="list-style-type: none">▶ 最高責任者の役割・権限▶ 指導者との雇用契約、指導者の研修制度
運動部に所属している学生 への支援	<ul style="list-style-type: none">▶ 学業支援（成績の管理、学業要件の設定）▶ 就職支援
スポーツ推薦制度	<ul style="list-style-type: none">▶ スポーツ推薦制度、入学者数▶ スポーツ推薦入学者に対する財政支援

◆調査結果

- 全ての大学では、大学スポーツの意義として、「学業」と「スポーツ」を通じて、人材育成を目的として掲げている。一方で、部に対する支援は、全ての学校で実施されているものの、運動部学生に特化した学業及びキャリアの支援については、実施している大学と実施しない大学に大きな差があることが判明。
- 調査結果については次の通りである。

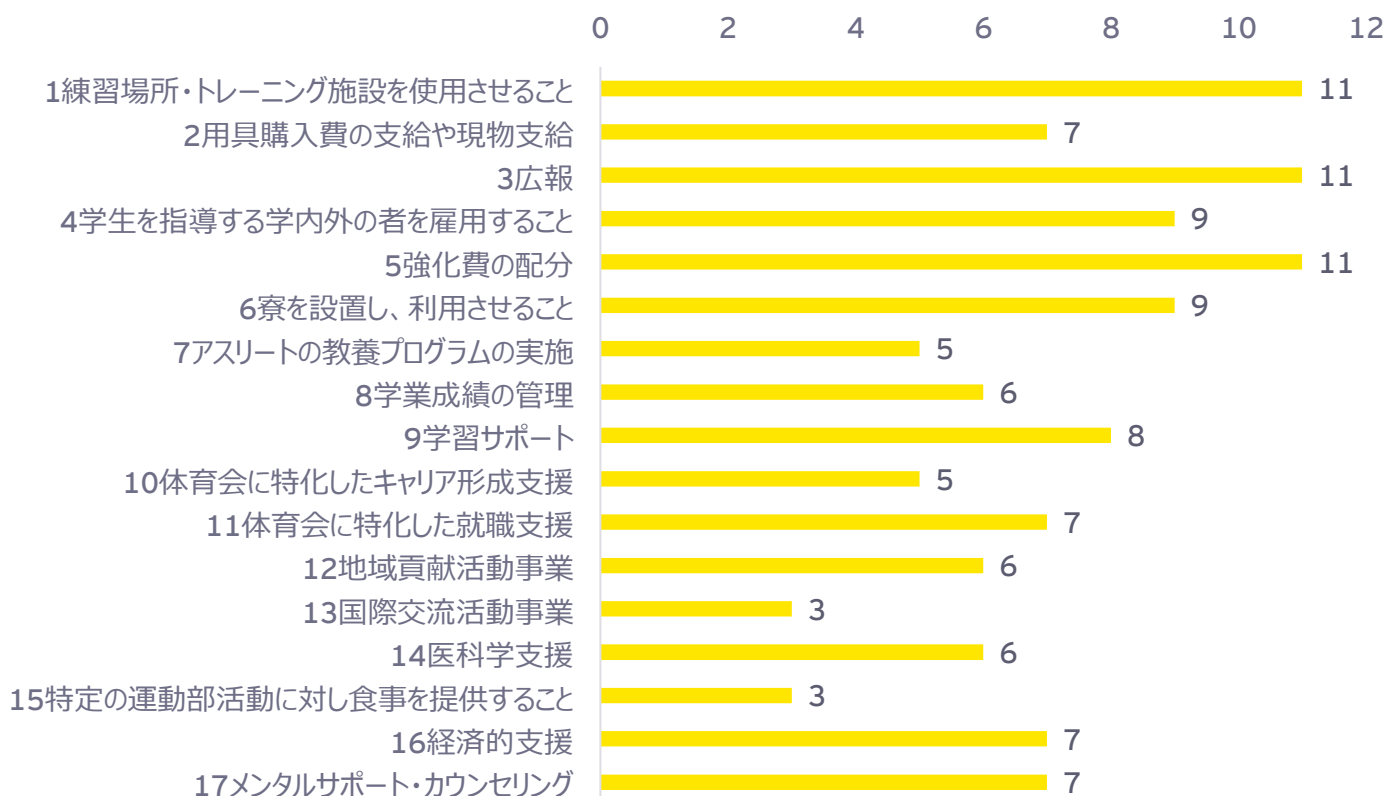
大学調査の結果①

項目	回答詳細
運動部(競技部、体育会)の数	平均 : 42.8団体 最大値 : 79団体 最小値 : 21団体
運動部(競技部、体育会)に所属している学生数	平均 : 2,223.3人 最大値 : 5,154人 最小値 : 1,200人
各運動部に所属する学生の人数・学生の氏名・学部・学籍番号一覧を管理しているか。	管理している : 11大学 管理していない : 0
上記学生情報の管理方法 時期 : 形式 :	<p>【時期】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2010年より前 : 2校 • 2010年～2015年 : 1校 • 2015年以降 : 3校 • 不明 : 5校 <p>【形式】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 大学のシステム : 4校 • エクセル管理 : 5校 • 教務システムとエクセル : 1校 • 非公開 : 1校
複数の運動部活動を取りまとめる組織として、右記に挙げる項目のうち3つ以上の業務を行っている同一組織の有無	<ul style="list-style-type: none"> ① 大学内のスポーツに関する政策について経営層と調整すること ② 大学内のスポーツに関する計画の策定 ③ 各運動部活動の監督・コーチ、その他運動部活動において学生を指導する学内外の者の選解任 ④ 財務 ⑤ 法務 ⑥ 教育・学習支援 ⑦ 広報・渉外 ⑧ 施設管理 ⑨ スポーツを通じた国際交流 <p>複数の運動部活動を取りまとめる組織がある : 11大学</p>

大学調査の結果②

項目	回答詳細
複数の運動部活動を取りまとめる組織の職員数	10校の職員の平均数 : 12.4人(兼任の職員、派遣職員等を含む) 10校の専任職員の平均数 : 7.4人 ※11校中1校においては、全て兼任の職員
各運動部活動の財務状況の把握	把握している : 6校 把握していない : 4校 未回答 : 1校
各体育会の強化費(活動費)の配分方法	大学が分配している : 7校 体育会統括団体が振り分けをしている : 2校 その他 学生による財務会議で振り分けが決定される : 1校 大学が分配し、体育会統括団体が分配する : 1校

運動部所属の学生に対して行っている支援



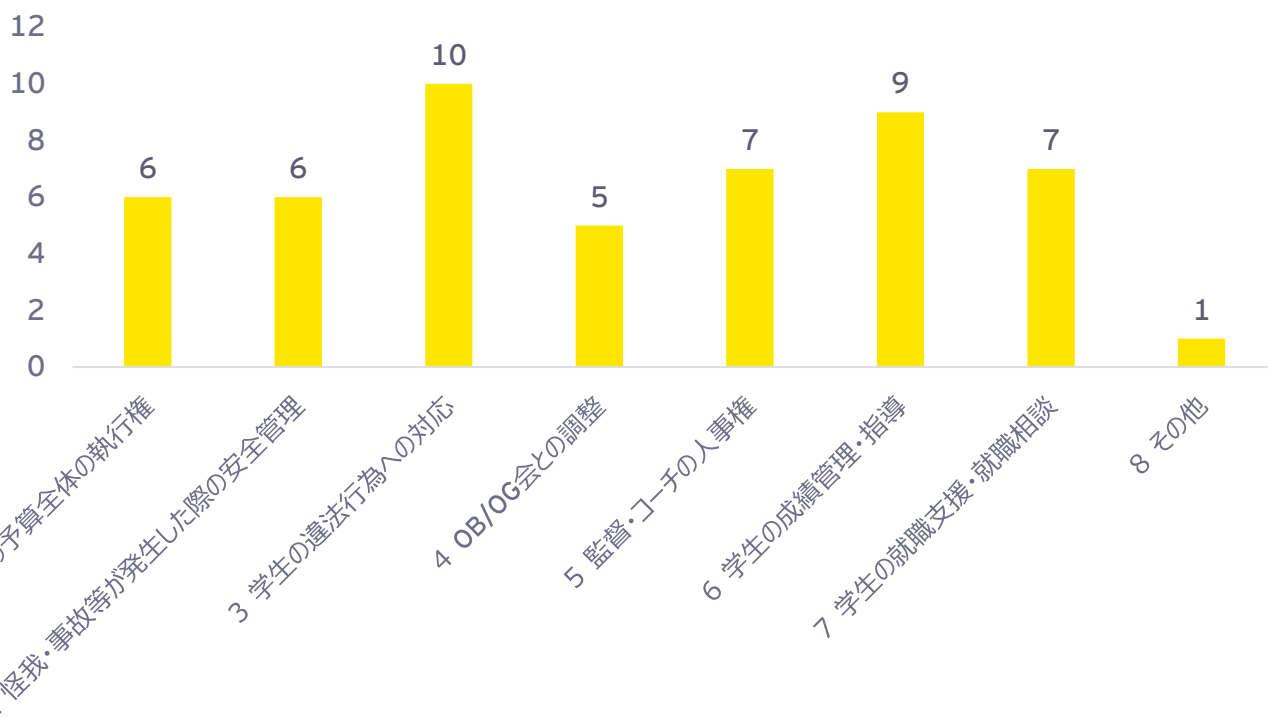
大学調査の結果③

項目	回答詳細
強化部を設けているか	設けている : 10校 設けていない : 1校(その時により強化プロジェクトが設けられることがある)
強化部を設けている目的	<p>(主な回答を抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 社会的関心度、歴史的蓄積・実績、競技特性(種目の多様性)、個人・団体スポーツ、高校での普及度等の要素を考慮し決定。特に、大学のスポーツ・ブランドのイメージ形成に決定的な影響力を持つ競技を選定 ✓ 学内外への影響等を鑑みて設定している。 ✓ 強化指定クラブの活動に対して大学として集中した支援を行う事により、大学の知名度向上、学生並びに卒業生・保護者など関係者の愛校心・帰属意識を高め、学園生活をより豊かにすることを目的とするため。 ✓ 大学における強化指定クラブは大学コミュニティの不可欠な一部と考えている。また大学の全体的な組織的使命に沿い、教育、研究、およびサービスにおける卓越性を追求する学術部門と同様に、卓越性を追求していく、すなわち文武両道を学生自身が4年間の大学生活で体現できるから。学生が最高レベルの競技を行い、教育および学業上の目標を達成できるように、模範的なリーダーシップを学び、実社会へ羽ばたく準備をする人間性を築くため。 ✓ 大学名の宣伝効果。今後、上位の成績が期待できる種目及び本学志願者の注目度の高い種目 ✓ 帰属意識の醸成(在学生、卒業生)、競技能力・実績の向上 ✓ 歴史が長く、競技成績が優秀な本学のスポーツ活動をアピールできるため ✓ 本学では、全国のトップ水準となる活動をおこない、学園全体を励まし、アイデンティティの醸成に資する活動をおこなうクラブを重点強化クラブと位置付けた上で、スポーツや文化芸術活動を通じて、学生の学びと成長に寄与し、大学が目指す人材育成像を具現化することを目的としている。
強化指定部について、他の部よりも多く活動資金を援助しているか	多く活動資金を援助している : 11校

大学調査の結果④

項目	回答詳細
運動部の部長（最高責任者）について、学内規定で権限が明確化されているか	明確化されている : 6校 明確化されていない : 4校 未回答 : 1校

運動部の部長（最高責任者の役割）



部長（最高責任者）の役割を実施していく上で、困っている点、苦労している点

（主な回答を抜粋）

- ✓ 部長の責任が重く、候補者を探すのが難しい。
- ✓ 引き受け手（教員）の不足
- ✓ 適任者の確保
- ✓ 学生と指導者とのコミュニケーション（連携）不足に苦労している。
- ✓ 日曜・祝日の学生活動・引率等への対応
- ✓ 新型コロナウイルス感染症防止対策を行いながらの練習方法や、練習場所の確保。
- ✓ 監督に比べると現場に出向くことが少ないため、実際のチームマネジメントまでには目が届かない場合が多い。
- ✓ 部長の役割、負担が大きく、授業や研究、または各中央競技団体での業務との両立に困っている
- ✓ 実態としてはボランティアに近いなかで、役割の肥大化、責任の重さにより、なり手が不足していること、クラブにより部長・副部長のサポート・コミット状況に差があること等が課題である。
- ✓ 課外活動に対して、教授が責任を負うと負担が多い。

大学調査の結果⑤

項目	回答詳細
運動部活動の指導者と雇用契約を締結しているか（監督・コーチ等）	すべての指導者と契約している：1校 一部の指導者と契約している：7校 有給の場合は準委任契約を締結している：1校 その他（都度謝金を払う）：2校
各運動部活動が独自で雇用している指導者の情報を把握しているか	全て把握している：5校 一部把握している：1校 把握していない：3校 わからない：1校 未回答：1校
運動部活動の指導者に指導者資格を課しているか	課している：2校 一部の指導者に課している：2校 課していない：7校
どのような指導者資格を課しているか	（主な回答） ✓ 日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格 ✓ 各競技の指導者資格
大学職員以外の外部指導者（監督、コーチ等）に対する定期的な「指導者研修」を実施しているか	実施している：9校 実施していない：2校
「指導者研修」の実施頻度	1年に1回：2校 半年に1回：3校 四半期に1回：1校 1か月に1回：1校 不定期に実施：2校
運動部活動指導者（監督、コーチ）のガバナンスについて大学としてどのような対策・体制を整えているか	✓ 監督、コーチの人事は、部長の推薦により、管理委員会で議決することを定めている。また、懲戒処分についても管理委員会で決定する。 ✓ 年に数回、部長・監督に対する研修を開催。年に数回、強化指定クラブの指導者を対象とした研修会を行い、クラブ活動を行う上での問題や注意事項などについて専門家による講演会開催や意見交換を行い、常に組織のあり方を見直す、不正防止を徹底するなどの意識向上を目的として開催している。 ✓ UNIVAS研修会や本学カレッジスポーツセンターによる指導者研修会に参加を必須としている。

大学調査の結果⑥

項目	回答詳細					
一般学生の平均GPAと スポーツ推薦の平均GPA	<p>非公表 : 6校 単位数で管理 : 1校 回答 : 4校</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="483 663 999 1189"> <p>(F大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :1.35/1.76 B学部 :2.96/3.23 C学部 :2.49/2.67 D学部 :2.85/3.17 E学部 :3.22/3.27 F学部 :2.89/3.28 G学部 :2.54/3.11 H学部 :2.61/3.14 I学部 :2.54/3.14 K学部 :2.92/3.27</p> </td> <td data-bbox="999 663 1513 1189"> <p>(G大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :2.02/2.14 B学部 :2.02/2.17 C学部 :2.01/2.26 D学部 :2.03/2.50 E学部 :2.02/2.23</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1189 999 1552"> <p>(J大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :2.50/2.72 B学部 :2.53/2.59 C学部 :2.43/2.73 D学部 :2.73/2.90 E学部 :2.52/2.26</p> </td> <td data-bbox="999 1189 1513 1552"> <p>(I大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :3.12/3.36 ※1年生に限る</p> </td> </tr> </table>		<p>(F大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :1.35/1.76 B学部 :2.96/3.23 C学部 :2.49/2.67 D学部 :2.85/3.17 E学部 :3.22/3.27 F学部 :2.89/3.28 G学部 :2.54/3.11 H学部 :2.61/3.14 I学部 :2.54/3.14 K学部 :2.92/3.27</p>	<p>(G大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :2.02/2.14 B学部 :2.02/2.17 C学部 :2.01/2.26 D学部 :2.03/2.50 E学部 :2.02/2.23</p>	<p>(J大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :2.50/2.72 B学部 :2.53/2.59 C学部 :2.43/2.73 D学部 :2.73/2.90 E学部 :2.52/2.26</p>	<p>(I大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :3.12/3.36 ※1年生に限る</p>
<p>(F大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :1.35/1.76 B学部 :2.96/3.23 C学部 :2.49/2.67 D学部 :2.85/3.17 E学部 :3.22/3.27 F学部 :2.89/3.28 G学部 :2.54/3.11 H学部 :2.61/3.14 I学部 :2.54/3.14 K学部 :2.92/3.27</p>	<p>(G大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :2.02/2.14 B学部 :2.02/2.17 C学部 :2.01/2.26 D学部 :2.03/2.50 E学部 :2.02/2.23</p>					
<p>(J大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :2.50/2.72 B学部 :2.53/2.59 C学部 :2.43/2.73 D学部 :2.73/2.90 E学部 :2.52/2.26</p>	<p>(I大学) スポーツ推薦左/一般学生右</p> <p>A学部 :3.12/3.36 ※1年生に限る</p>					
運動部活動を続けることや 競技大会に参加する上で 学業成績要件を 課しているか	<p>課している : 6校 課していない : 3校 各部の運営に任せている : 2校</p>					
(学業成績要件を課している と回答した大学以外への設問) 運動部活動を続けることや 競技大会に参加する上で 学業成績要件を課することが 適切と考えますか。	<p>はい : 3校 ✓すでに学生連盟のいくつかは学業成績要件を課しており今後さらに文武両道を目指す ✓学業あつての競技であることから適切であると考えするため いいえ : 2校 ✓学業成績要件を課するのではなく、学業と課外活動を両立させる方法を教えることが重要と考える。 ✓文武両道が基本であるため ✓各学部で管理されている。</p>					

大学調査の結果⑦

項目	回答詳細																								
<p>運動部活動を続けることや競技大会に参加する上で学業成績要件を課しているか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 各学期の最低基準単位数を定めており、連続する2学期以上にわたって下回った部員については、練習の制限、対外試合の出場停止等の措置を取ることを部長に依頼する。 ✓ 規定で定めた2年次、3年次、4年次初めの取得単位数により、活動停止や定期面談等のルールを設定している。 ✓ 強化運動部には、各学年の半期ごとの取得単位数に応じて、公式戦や交流戦などすべての対外試合に対する「出場資格あり」「条件付き出場」「出場資格なし」を決定する学業成績要件を課している。 ✓ 各学年セメスター終了時に学業基準を下回る体育会所属学生には、勧告、三者面談、試合出場停止を行う。そのための必要最低取得単位数及びGPAを設定している。体育会学生に学業成績要件を課している理由は、学生の本分である学業との両立させることにある。 ✓ 本学では、学生が正課と課外自主活動を両立した学生生活を送ることができるよう、学業ガイドライン制度を設けている。この制度では、学生が課外自主活動を行いながら卒業を目指す上で、学業面での躓きを早期に発見し改善していくことができるよう、学期毎に累計修得単位数の基準を定めている。 ✓ 修得単位数等により要件を課しているが、各クラブによりその要件は異なる。学業成績要件がある理由は、学生の本分は勉学であるため。 																								
<p>過去5年間でスポーツ推薦の入学者数</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">年</th> <th style="width: 25%;">平均</th> <th style="width: 25%;">最大</th> <th style="width: 35%;">最小</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2022</td> <td>212人</td> <td>500人</td> <td>60人</td> </tr> <tr> <td>2021</td> <td>214人</td> <td>500人</td> <td>80人</td> </tr> <tr> <td>2020</td> <td>215人</td> <td>500人</td> <td>60人</td> </tr> <tr> <td>2019</td> <td>216人</td> <td>500人</td> <td>60人</td> </tr> <tr> <td>2018</td> <td>206人</td> <td>500人</td> <td>60人</td> </tr> </tbody> </table> <p>※J大学の最大値を抜いた平均は、192人(2022年)</p>	年	平均	最大	最小	2022	212人	500人	60人	2021	214人	500人	80人	2020	215人	500人	60人	2019	216人	500人	60人	2018	206人	500人	60人
年	平均	最大	最小																						
2022	212人	500人	60人																						
2021	214人	500人	80人																						
2020	215人	500人	60人																						
2019	216人	500人	60人																						
2018	206人	500人	60人																						

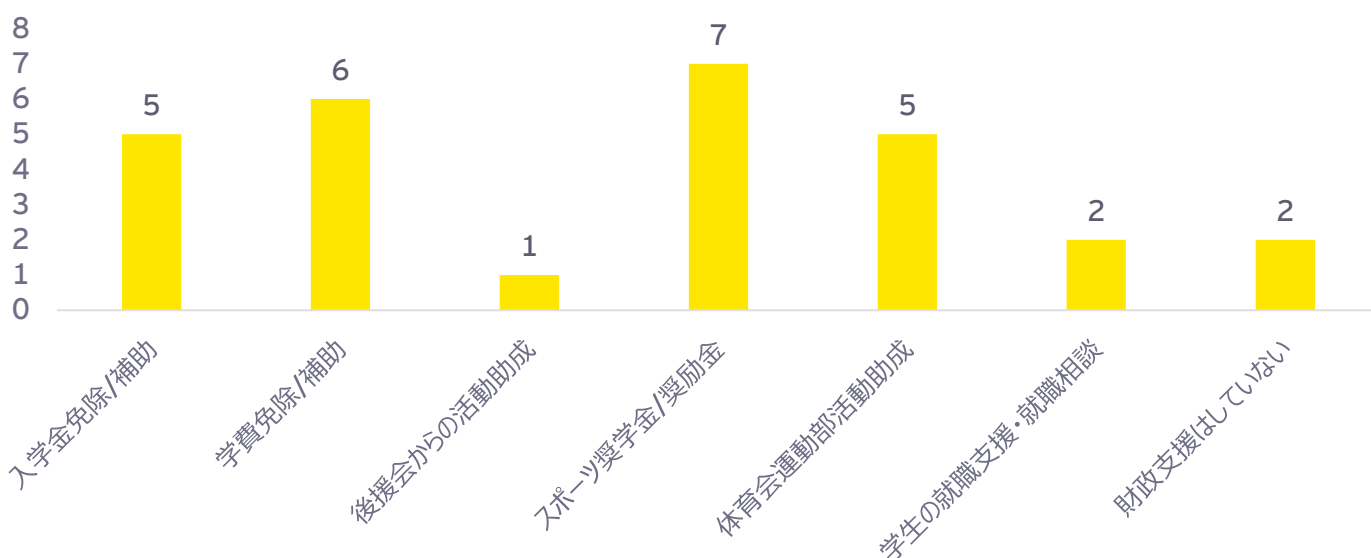
大学調査の結果⑧

項目	回答詳細
スポーツ推薦入試制度の内容	<p>【競技成績要件】 有：10校 非公表：1</p> <p>【学業成績要件】 有：7校 無：3校 非公表：1校</p> <p>試験方法は、学校や学部やスポーツ推薦の種類によって異なる。 11校のうち10校が、書類選考、面接を実施。 上記2つの選考に加えて、小論文、課題発表、集団面接、実技試験、能力検定を実施している。</p>
スポーツ推薦の学生が入学出来る学部について	<p>全学部でスポーツ推薦を実施 : 1校 複数の学部から選択可能 : 7校 1つの特定の学部のみ入学できる : 2校 未回答 : 1校</p>
上記で「複数の学部から選択可能」と回答した大学のみ複数の学部の選択肢がある場合、どのように学部が決まるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各部に枠が設けられており、各部に配分は任せている : 4校 ・ 学生の希望を優先とし、学部の枠が埋まり次第、その学部以外の第2希望を進める : 1校 ・ 受験者が希望する学部（学科）に出願できる : 1校 ・ その他（大学本部競技スポーツ部が各部に配分） : 1校
スポーツ推薦入学者が受けることの出来る奨学金制度の条件	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 奨学金の中には、部員であることを要件にしているものもあり、退部した場合は奨学金の受給資格を失うものもある。 ✓ 競技歴が優秀で、学業成績については原則、高等学校の全体の評点平均値が3.0以上であること。 ✓ 高等学校3年時における個人の戦績が、全国大会ベスト2位以内であること。または、それと同等以上の力量があるもの。 ✓ 入学後、関東大会地区大会（個人戦）でベスト2位以内、全国大会（個人戦）でベスト4位以内であること。または、それと同等以上の成果を納めた者。団体戦においては、チームが上位進出しチーム内での活躍、貢献度で判断する。 ✓ 個人競技種目の場合、全国高等学校総合体育大会、国民体育大会及びこれらに準ずる規模の全国大会で、第8位以内の入賞者及び全国高等学校ランキング第8位以内の実績を持つ者、又は各NF(中央競技団体)の強化指定選手である者。 団体競技種目の場合、全国高等学校総合体育大会、国民体育大会及びこれらに準ずる規模の全国大会で、第8位以内に入賞したチームでレギュラー選手として出場し、特に個人技に優れ将来性のある者、又は各NF(中央競技団体)の強化指定選手である者。

大学調査の結果⑨

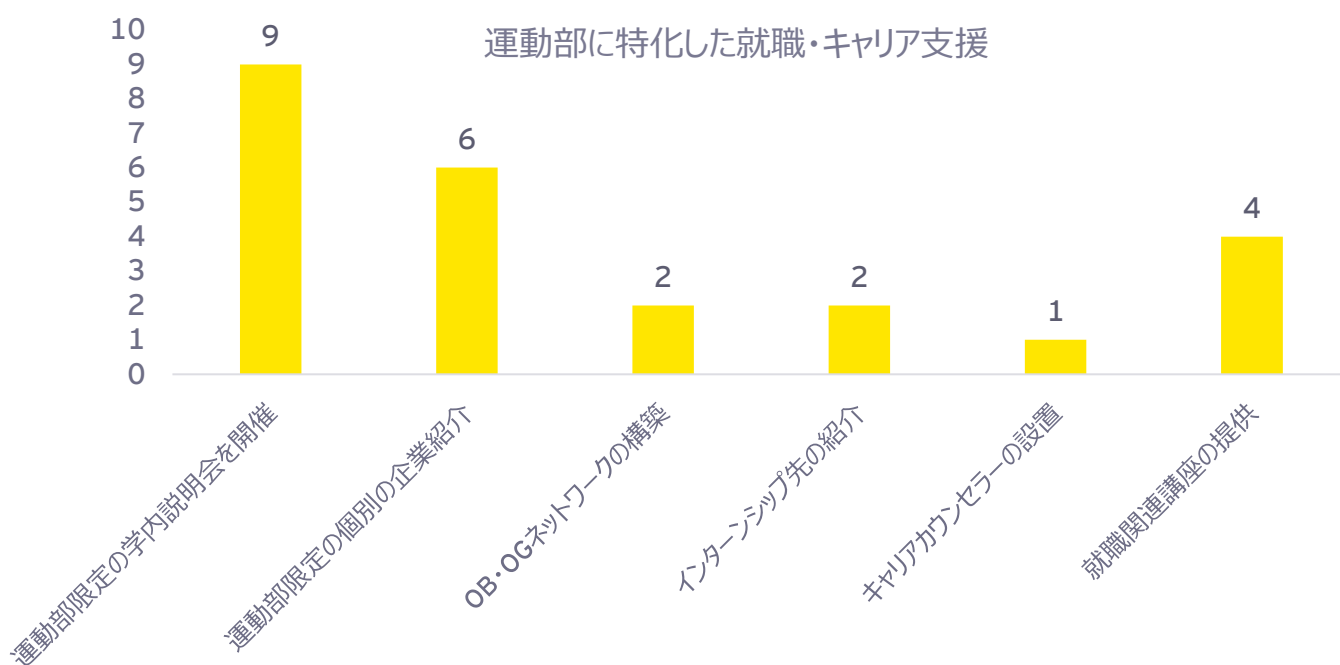
項目	回答詳細
スポーツ推薦の学生に対し実施している財政支援	財政支援がある：9校 財政支援がない：2校 ※スポーツ奨学金/奨励金, 体育各部員を対象にした奨学金は多数あるが、スポーツ推薦入学者に限定しているわけではない。

財政支援の内容



運動部に特化した就職・キャリア支援を行っているか	行っている：11校
--------------------------	-----------

運動部に特化した就職・キャリア支援



大学調査の結果⑩

項目	回答詳細
卒業生の就職先・進路について把握しているか	把握している : 6校 一部把握している : 3校 各運動部で把握している : 2校

大学スポーツの課題



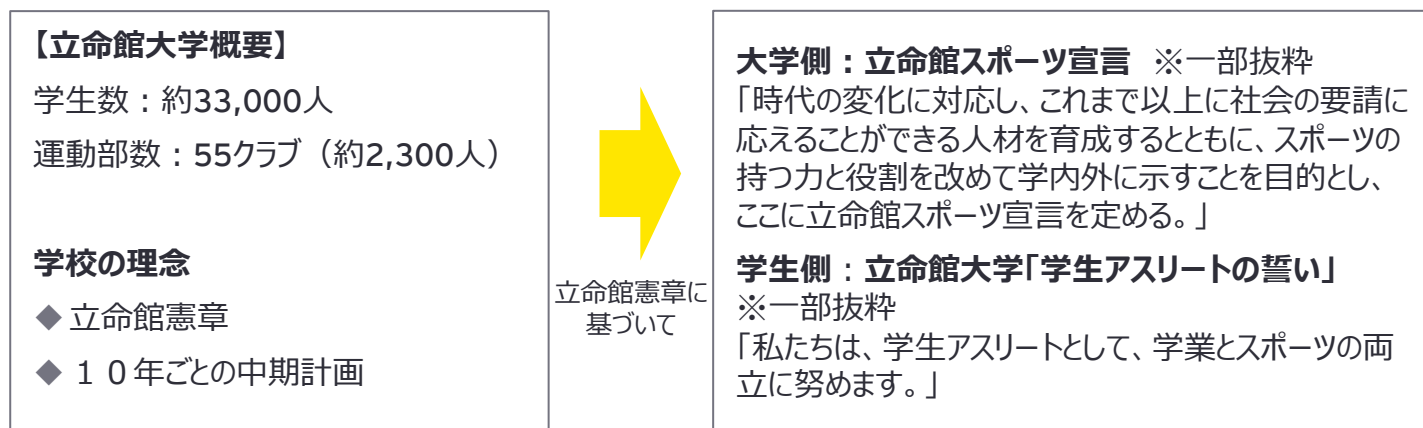
国(スポーツ庁)へ求める学生アスリートに対するキャリア支援について

- ✓ 日本は海外と比べると大学卒業後に競技を継続する環境が整っていない。
- ✓ 多くのアスリートは、大学卒業と同時に競技を終えなければいけないため、働きながら競技を続けることのできる環境を整えて欲しい。
- ✓ モデルとなる事例集の作成。
- ✓ スポーツの力で未来社会を豊かにできる人材を育成することを目的として、学生アスリートの大学院進学を促進する支援制度を設けてほしい。
- ✓ 中高スポーツの在り方を変えるべき。中学、高校で頑張りすぎて、大学進学前にやめてしまう学生が多いと思う。勝利至上主義ではなく、アスリートに考えさせる指導方法にするべき。
- ✓ 出口(就職)の支援ではなく、入口を考えるべき。まだ昭和のフォーマット使っている。大学の数は増えているけど、人口は減っている。学生の取り合いになっている。大学同士が共存していくために協力していくべき。UNIVASがその役割を担う予定だった。大学スポーツや大学が本来担うことは何か、を考えなければいけない。

2.3

各大学で実施されている取組事例

立命館大学の運動部活動に所属する学生への支援



◆ 運動部活動に所属する学生への支援

- 学業ガイドラインに基づく学習支援を実施（部長、副部長に学業成績を報告、面談を実施）
- 学業成績要件を設けている
（例：【両立困難】2学期以上連続してガイドラインの基準に抵触したものは、大会出場等、課外自主活動を部分的に制限し、試合等参加証明書についても発行しない）
- スポーツ推薦者に対し、入学前教育として課題やプレテストを実施。ノートの取り方等サポートツールが充実している。
- (立命館大学として)ピアサポーター制度があり、上級生が下級生に対し、授業の選び方や学校内のシステムの使用方法等、サポート
- 練習場及び、キャンパス間を運動部学生用にシャトルバスの運行をしている。

◆ 大学による運動部活動の管理・把握状況

- 各運動部活動に所属する学生の情報をデータベース上で管理
- 複数の運動部活動を統括部署があり、(スポーツ強化オフィス)専任の職員が6名、その他職員が3名在籍
- 指導者に対し、強制ではないものの半年に1度指導者講習を実施している
- 2023年度より、「指導者評価制度」の運用を開始予定

◆ その他

- (立命館大学として)学内にメンタルケアの専門の方が在籍
- 奨学金獲得について、学業成績も必ず必要な制度になっている。奨学金合計25億円

早稲田大学の運動部活動に所属する学生への支援

【早稲田大学概要】

学生数：約39,000人

運動部数：44クラブ（約2,500人）

◆ 大学スポーツをする意味

「文武両道の理念の下、スポーツ界のみならず、グローバル社会を支える幅広い人材を育成する。」

- ・ 「早稲田アスリート宣言」の理念のもとに運動部活動を行う

早稲田アスリートプログラム（WAP）として下記の取組を実施

【学生に対する取組】

1. 「体育各部部員に期待すること」についての認識の共有

- ・ 全 신입部員を対象に、早稲田スポーツ、体育各部部員に期待すること、早稲田アスリートプログラム（WAP）」について説明し、『WAPテキスト』の配布
- ・ 『早稲田アスリート宣言』の唱和

2. 人格陶冶のための教育プログラム

- ・ アスリートとしての教養プログラム/キャリア形成支援プログラム/ボランティア・地域貢献活動プログラム/国際交流プログラム

3. 修学支援

- ・ 競技スポーツセンターが全部員の学業情報を把握し、所属学部・体育各部部長と連携して、学業成績不良となることを未然に防ぎ、標準修業年限（4年間）で卒業できるようサポートする。
- ・ GPAが高い部員および体育各部に褒賞を与える。

4. 学期ごとの振り返りレポートの提出

- ・ 全部員は、毎学期、①学業、②競技、③人間形成の3点について、自ら設定した目標と結果を振り返るとともに、部長・監督に報告する。

【指導者に対する取組】

1. 部員指導のための、「早稲田アスリートプログラムテキスト」

- ・ 早稲田スポーツのあり方、大学と体育各部、OB会との関係、大学を代表する立場としてのコンプライアンス遵守、ダイバーシティ、ハラスメント防止と暴力根絶、アンチ・ドーピング、迷惑行為、飲酒への注意、事故時の対応と報告、保険手続き、早稲田アスリート宣言、WAP参加促進
- ・ 部員指導のため、『早稲田アスリートプログラムテキスト』の配布。

2. 指導者研修の実施

- ・ 年2回、全ての指導者を対象に開催。
- ・ W A P 活動の事例紹介と参加促進、過去のトラブル事例の紹介、学生指導上の諸注意、外部講師によるコーチング研修、スポーツインテグリティ等セミナー、他部のケーススタディ、指導者同士のグループディスカッション。

3. 委任契約と指導者手当

- ・ 嘱任が決定した監督、コーチは、センター所長と委任契約を結び、所定の指導者手当を支給。

2.4

国内学生アスリートの調査結果・考察

国内学生アスリートの調査概要

◆調査目的

- 東京2020大会を終え、多くのアスリートがキャリア移期を迎える中で、アスリートのキャリア形成支援のより一層の充実を図ることが必要とされている。
- オリンピックにも数多くの学生アスリートが出場しているなか、学業と競技の両立、そして就職活動と限られた時間の中でどのように学生生活を送っているのか、実態を調査し、教育的観点から提言を実施する。
- 実際に、大学が大学スポーツをどのようにとらえ、学生アスリートへの学業支援、就職支援等、キャリア形成支援を実施しているのか、取組事例を調査する。

◆調査・検討手法

- 学生アスリートの学業と競技活動との両立の実態、それぞれの活動時間や成績、就職状況等との相関関係を明らかにするために、今回は以下の調査を行った。

<①学生アスリートにおける学業・競技活動・就職活動の実態調査>

- －過去のオリンピック選手及びプロスポーツ選手輩出数、大学の地域性から11校を選定（11大学については13ページ参照）
- －選定した11大学の運動部に所属している学生アスリートに対し、学業、競技、就職活動における考え方や取組方についてWEBアンケート調査を実施。

<②学生アスリートに対する個別ヒアリング調査>

- －実際にどのように学生生活を送っているのか、大学での取組が学生に浸透しているのかを深堀する。
- －計10名の学生にヒアリングを実施。

※①学生アスリートにおける学業・競技活動・就職活動の実態調査の調査項目については、有識者検討会議の各委員より、助言を頂きながら、調査の方向性及び、調査項目の内容について決定した。

国内学生アスリートの調査内容

1. 学生アスリートにおける学業・競技活動・就職活動の実態調査

◆調査手法

- 2022年11月2日から2023年2月3日の期間に、計841人の学生に回答を頂き、学生の学業、競技活動及び就職活動の実態を調査、今後の大学スポーツの目指す方向性や学生が抱えている課題について考察した。

◆調査事項

- 各大学への調査項目については、今後の大学スポーツの方向性や学生への支援を検討する上で認識しておくべき重要なものとして想定される下記5項目を中心に設定した。

競技の取組	<ul style="list-style-type: none">▶ 1日の練習時間、休暇の日数▶ 最高成績
学業の取り組む	<ul style="list-style-type: none">▶ 1日の学習時間▶ 平均GPAおよびGPAの意識
大学および学部の選択理由	<ul style="list-style-type: none">▶ 大学を選択した理由、相談した人▶ 学部を選択した理由
大学卒業後のキャリア	<ul style="list-style-type: none">▶ 卒業後の競技との関わり方▶ キャリア支援の活用やインターンシップ
大学生活で抱える問題	<ul style="list-style-type: none">▶ 現在抱えている悩みの有無、相談相手▶ 大学に実施して欲しい支援

◆調査結果

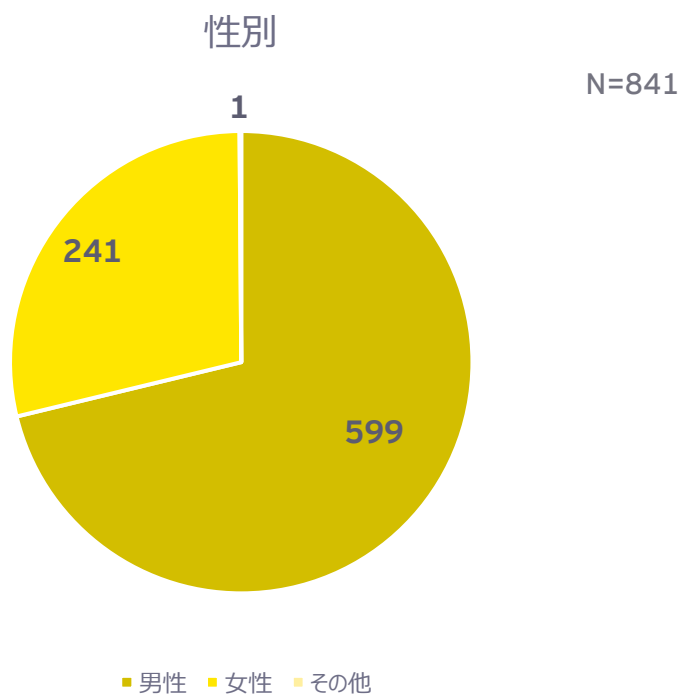
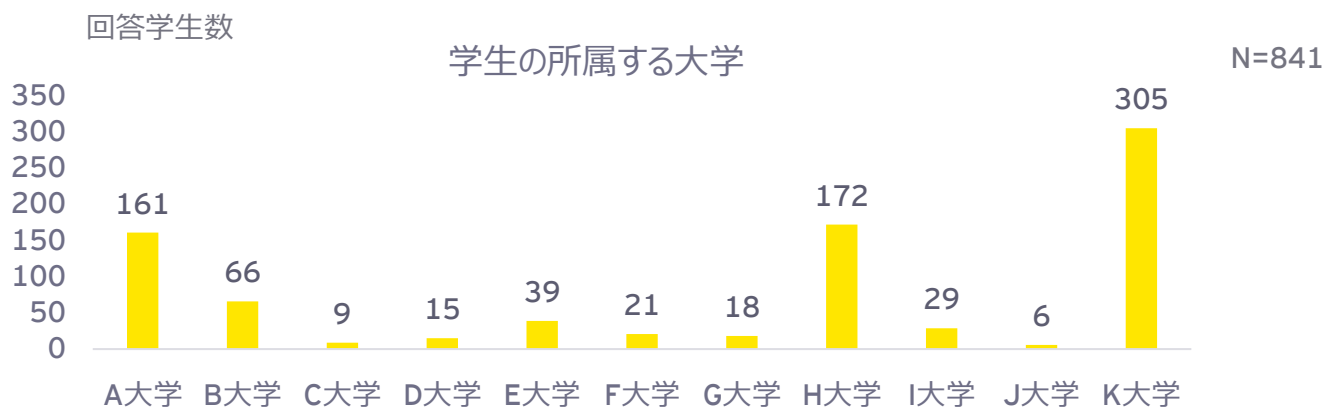
- 調査結果について、1日の平均練習時間と活動時間の比較をすると両立が難しい状況にあると考えられる。また、大学側に実施して欲しい支援として、「キャリア支援」と回答した学生が最も多く、大学卒業後の進路について不安な学生が多いことがわかった。

学生アスリートの調査結果①

◆実施概要

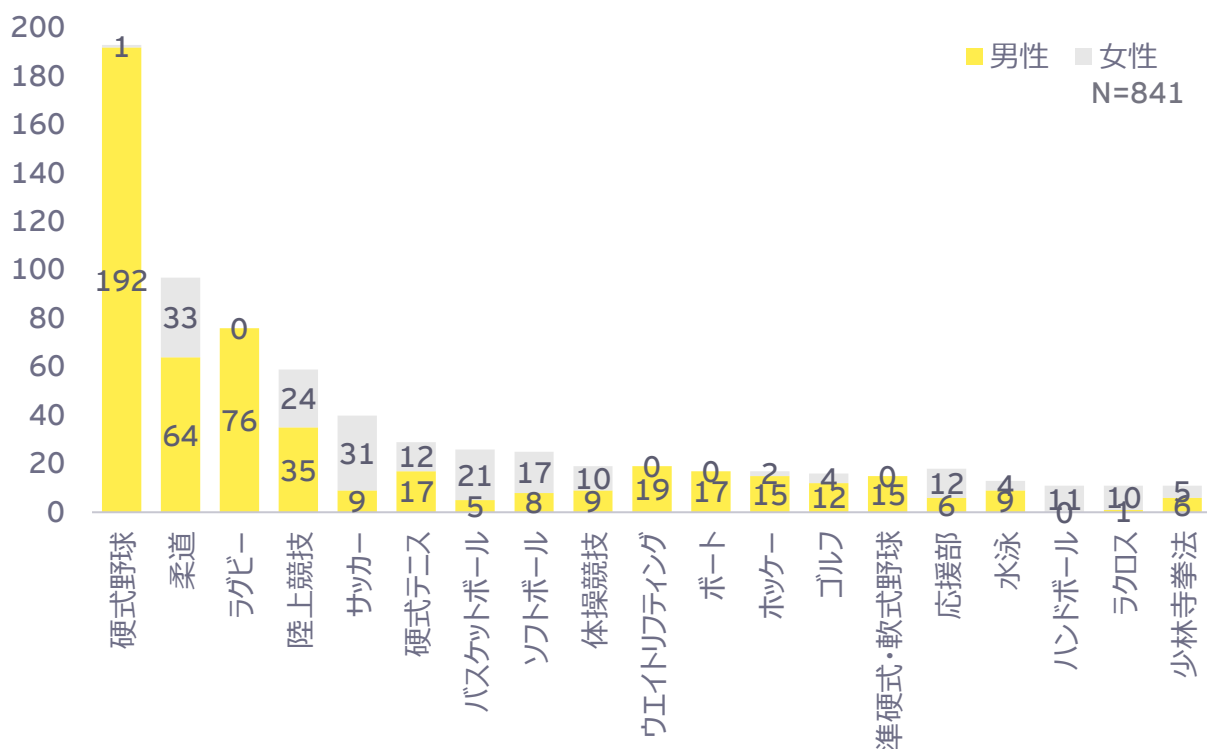
- ・ 実施期間：2022年11月2日～2023年2月3日
- ・ 回答対象：大学調査にて選定した11大学の運動部に所属している学生
- ・ 有効回答数：841

◆回答者属性



学生アスリートの調査結果②

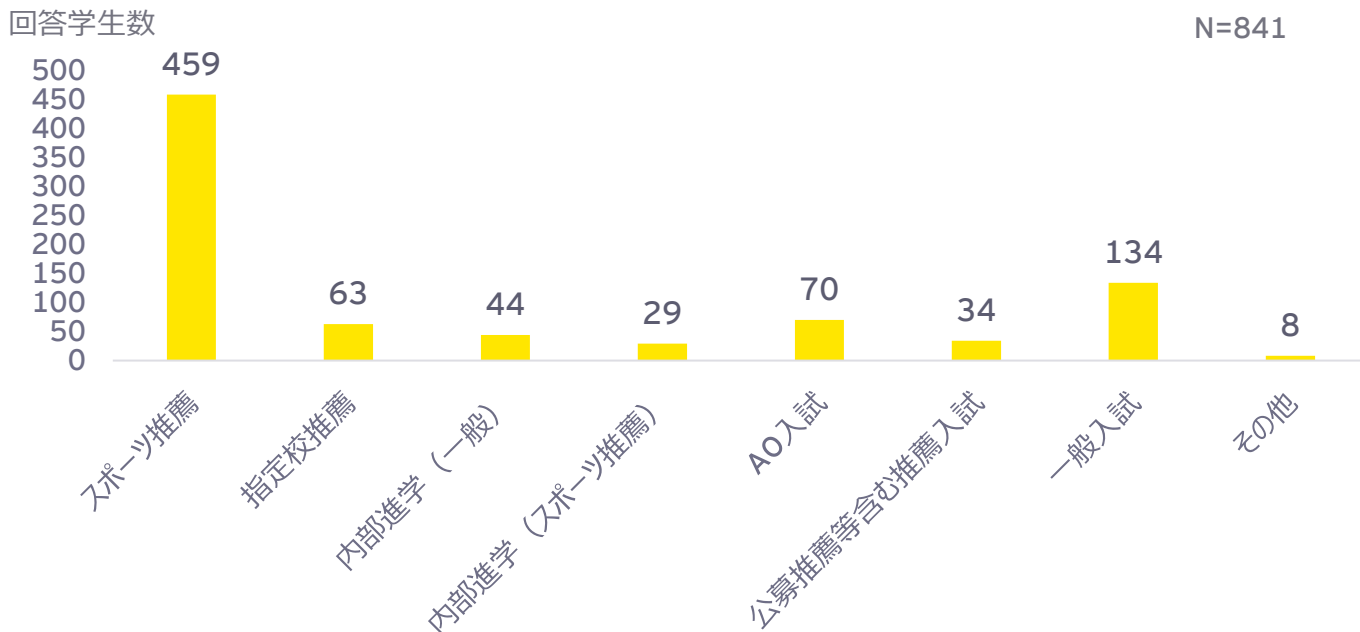
◆回答者属性（所属している部）



#	所属している部	男性	女性	総計	#	所属している部	男性	女性	総計
1	硬式野球	192	1	193	26	合気道	4	3	7
2	柔道	64	33	97	27	軟式庭球	3	4	7
3	ラグビー	76	0	76	28	スキー	4	2	6
4	陸上競技	35	24	59	29	トライアスロン	3	3	6
5	サッカー	9	31	40	30	バドミントン	3	3	6
6	硬式テニス	17	12	29	31	アイスホッケー	4	1	5
7	バスケットボール	5	21	26	32	チアリーディング	0	5	5
8	ソフトボール	8	17	25	33	バレーボール	2	3	5
9	体操競技	9	10	19	34	ボクシング・キックボクシング	4	1	5
10	ウエイトリフティング	19	0	19	35	モーターボート・水上スキー	3	2	5
11	ボート	17	0	17	36	なぎなた	1	3	4
12	ホッケー	15	2	17	37	ヨット	2	2	4
13	ゴルフ	12	4	16	38	自動車	4	0	4
14	準硬式・軟式野球	15	0	15	39	スカッシュ	2	1	3
15	応援部	6	7	13	40	居合道	1	2	3
16	水泳	9	4	13	41	山岳	3	0	3
17	ハンドボール	0	11	11	42	空手道	1	1	2
18	ラクロス	1	10	11	43	その他	0	1	1
19	少林寺拳法	6	5	11	44	ボウリング	1	0	1
20	弓道	5	4	9	45	ワンダーフォーゲル	0	1	1
21	卓球	8	1	9	46	航空	1	0	1
22	レスリング	7	1	8	47	相撲	1	0	1
23	アーチェリー	5	2	7	48	馬術	0	1	1
24	アメリカンフットボール	7	0	7	49	非有効回答	1	0	1
25	剣道	5	2	7					
							600	241	841

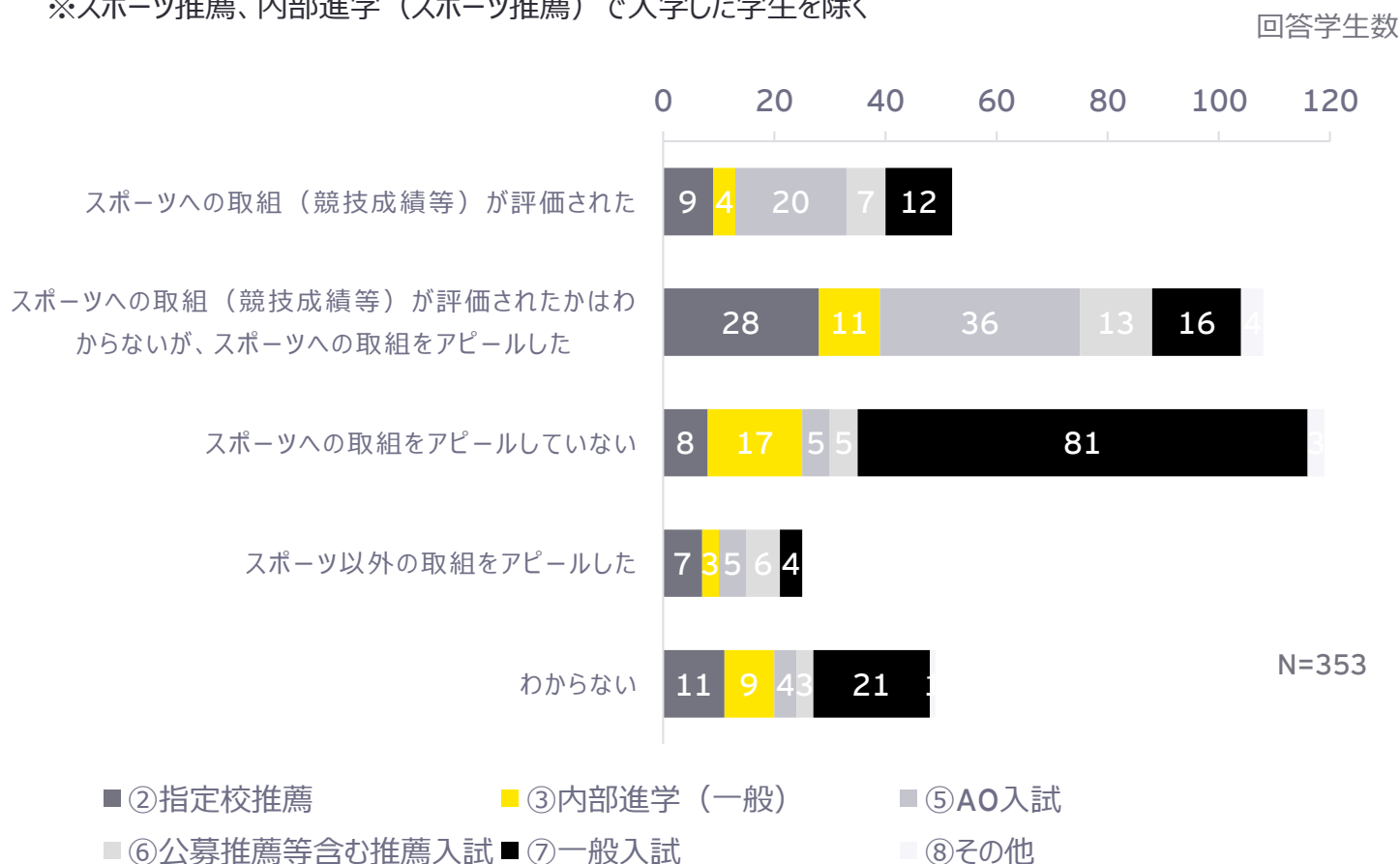
学生アスリートの調査結果③

◆大学入学時の入試形態



◆入試の際に、自身の競技成績及び競技の取組は評価されたか。または自身の競技成績及び競技の取組をアピールしたか。

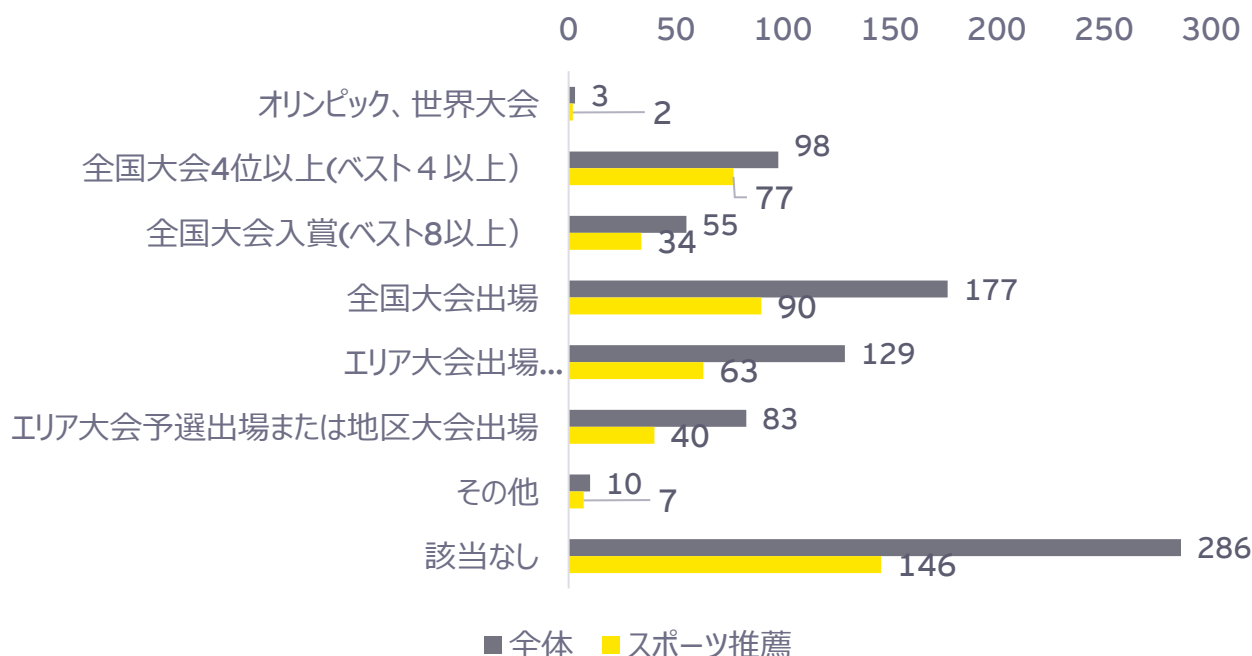
※スポーツ推薦、内部進学 (スポーツ推薦) で入学した学生を除く



学生アスリートの調査結果④

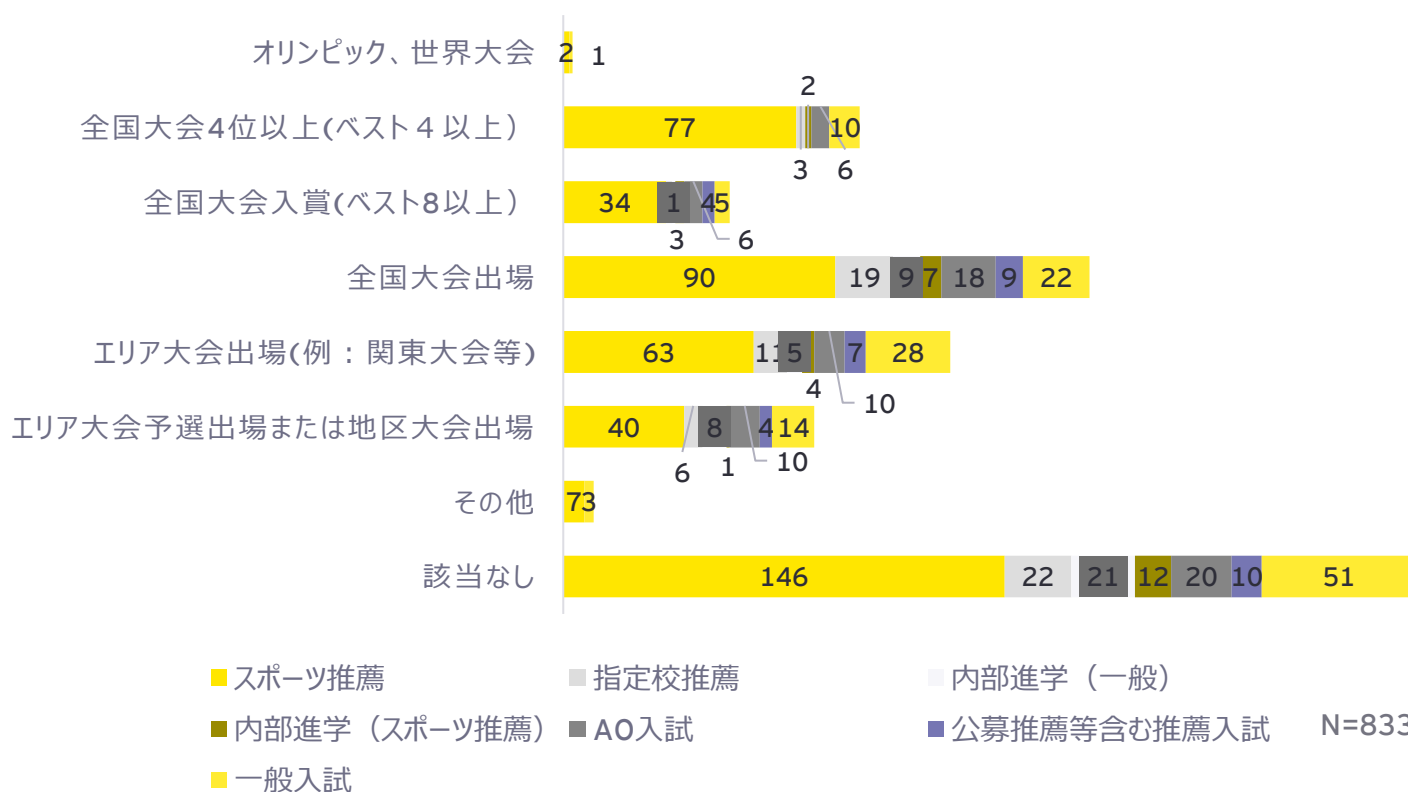
◆大学在学中の最も良い競技成績(全体とスポーツ推薦の比較)

回答学生数



N=841

◆大学在学中の最も良い競技成績(大学の入学方法)

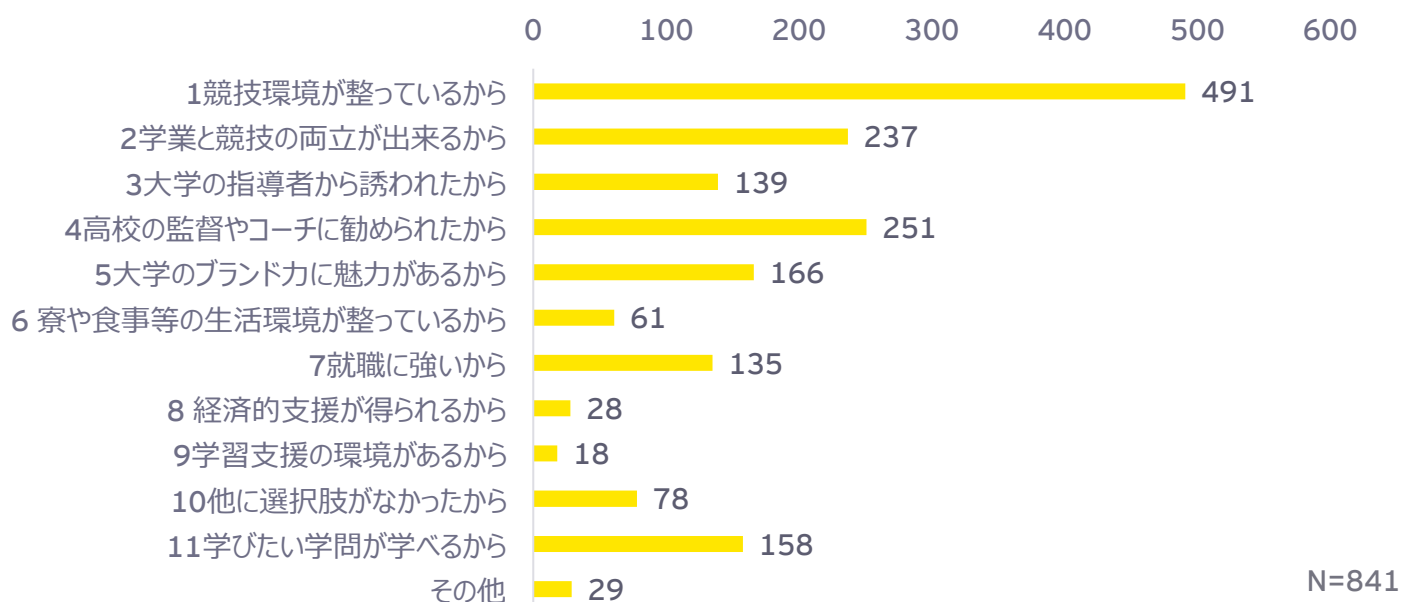


N=833

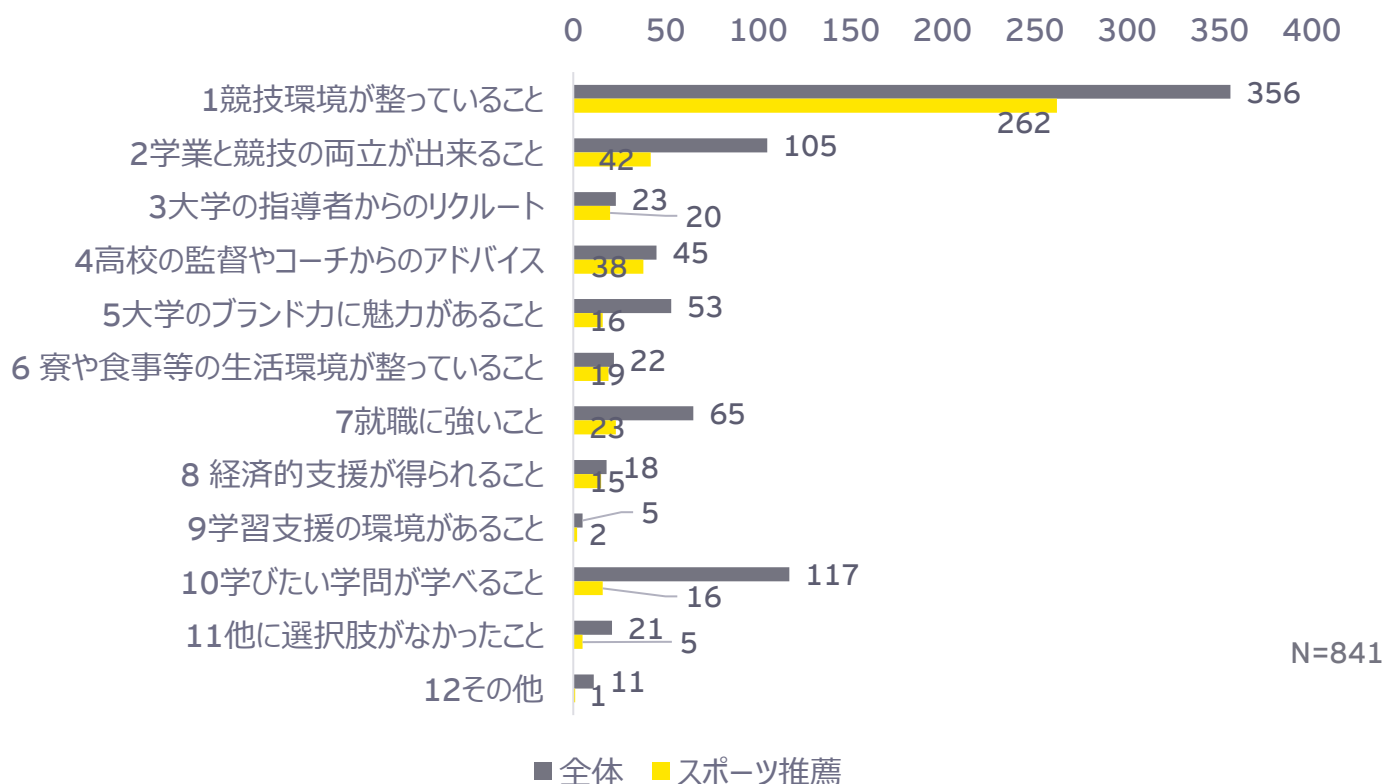
学生アスリートの調査結果⑤

◆現在の大学を選んだ理由（回答は3つまで）

回答学生数



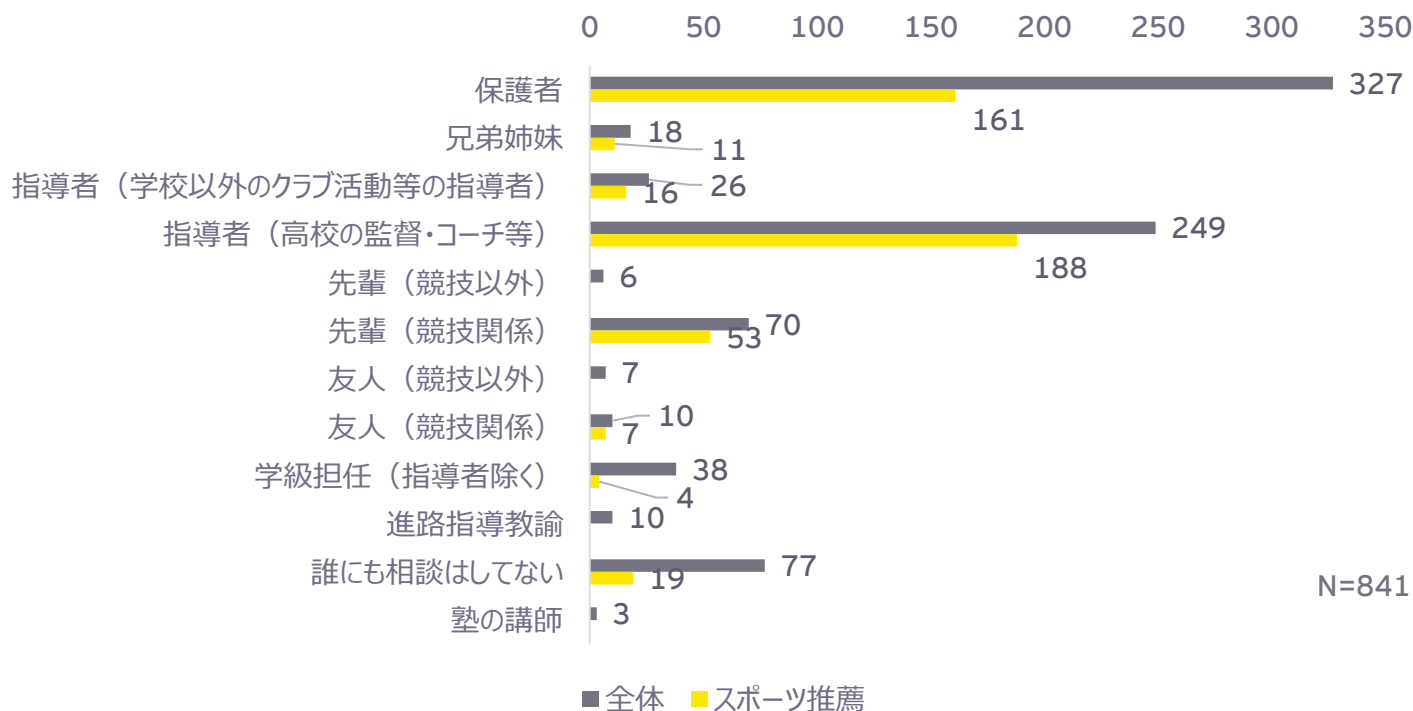
◆大学を選択するうえで一番重要だった項目



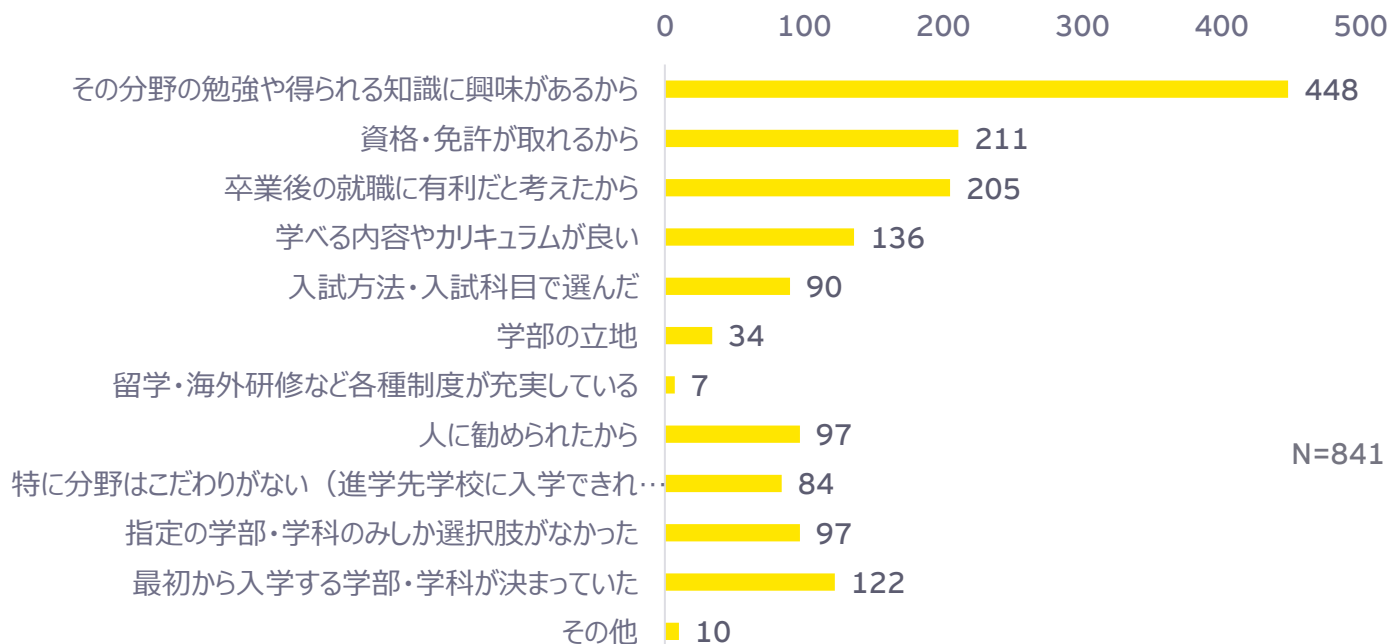
学生アスリートの調査結果⑥

◆大学を決める際に、最も意見を重視した人/参考とした人

回答学生数

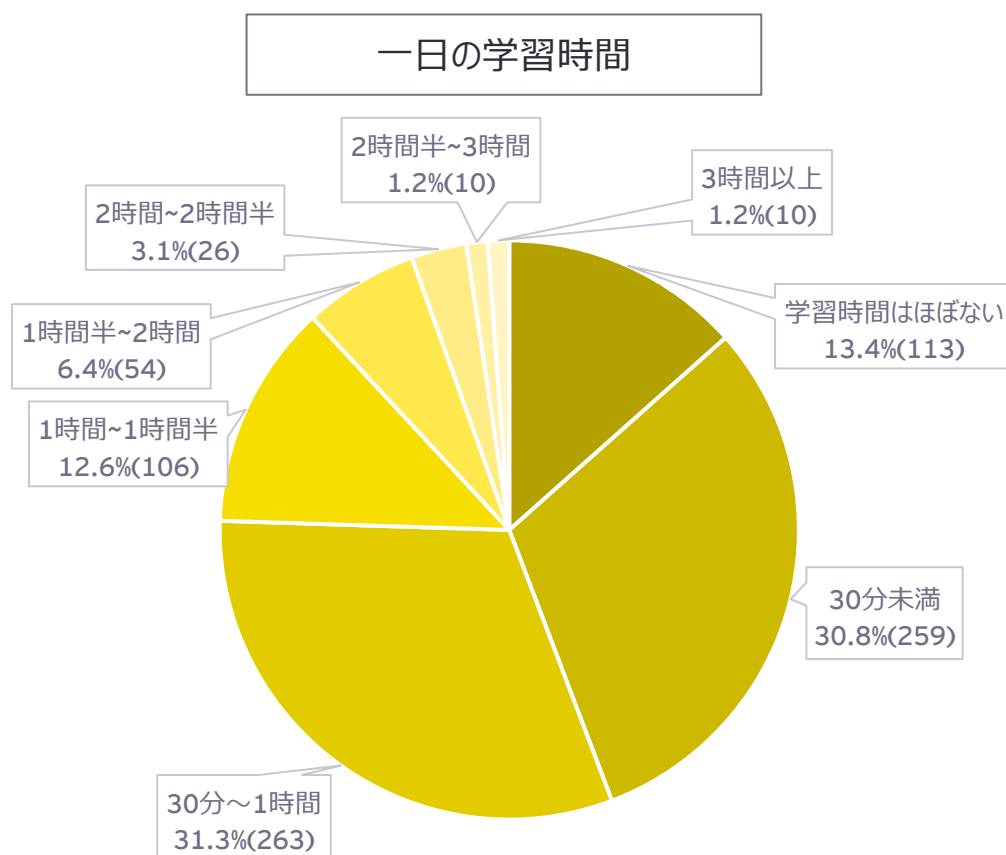
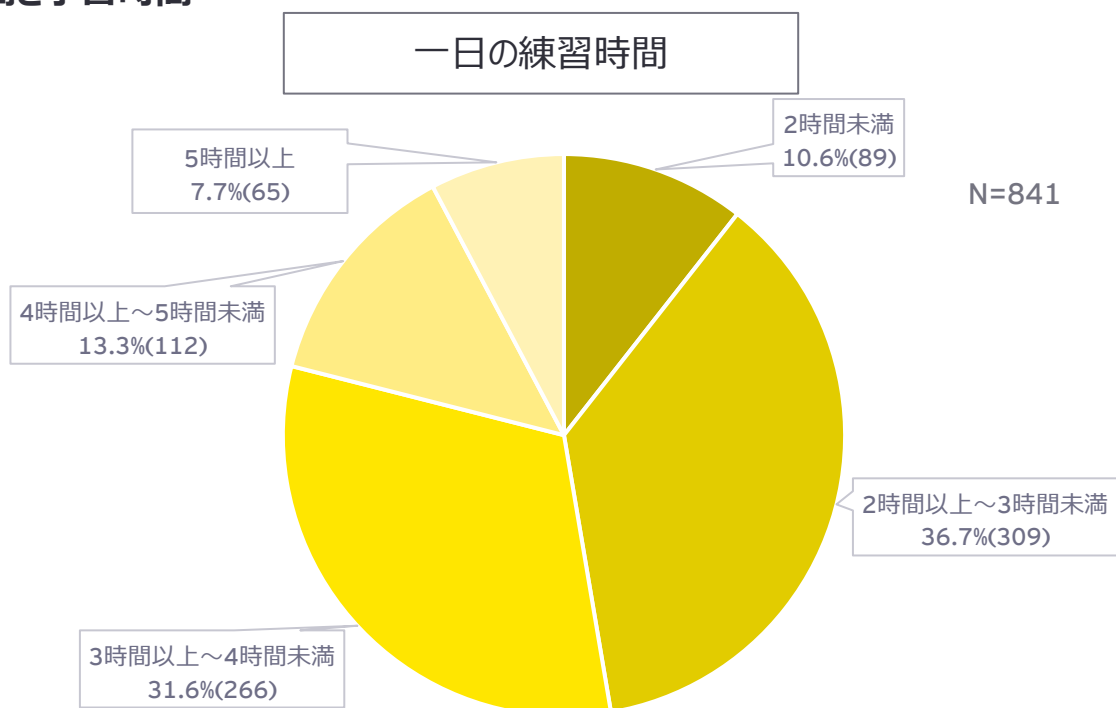


◆学部を選択した理由



学生アスリートの調査結果⑦

◆練習時間と学習時間

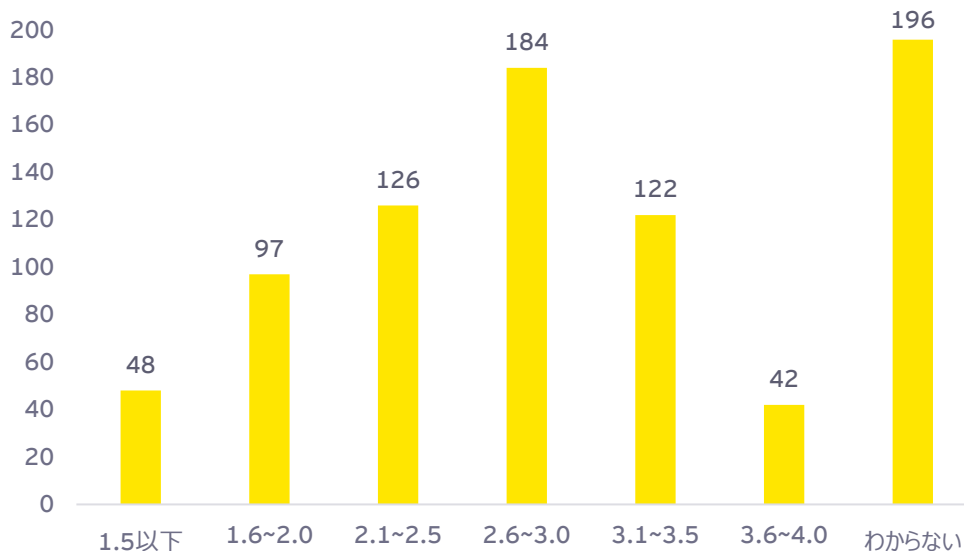


学生アスリートの調査結果⑧

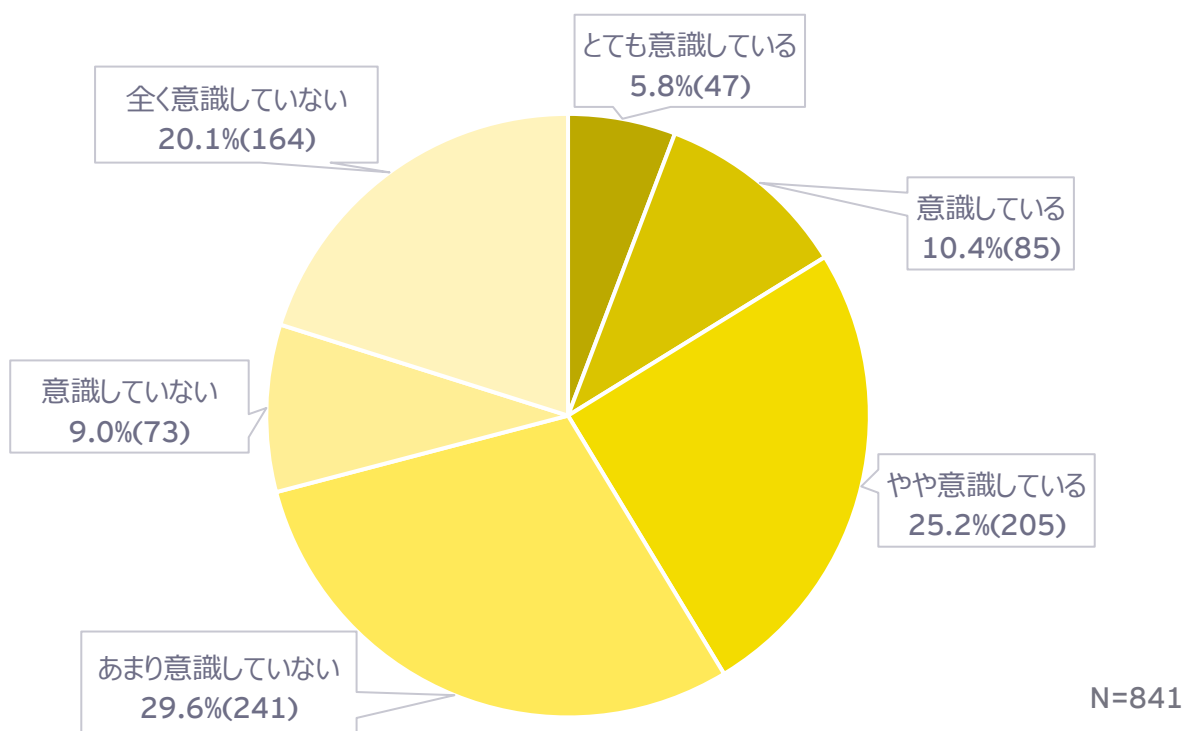
◆学生のGPA

回答学生数

N=841

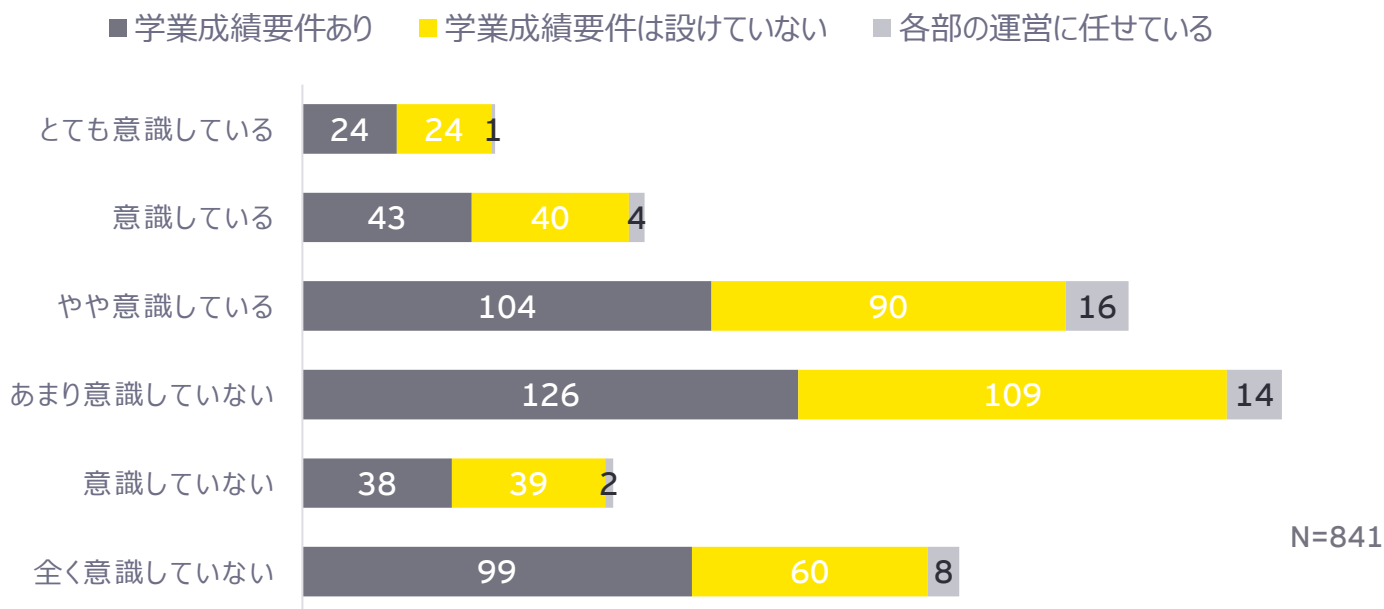


◆GPAの意識（全体）

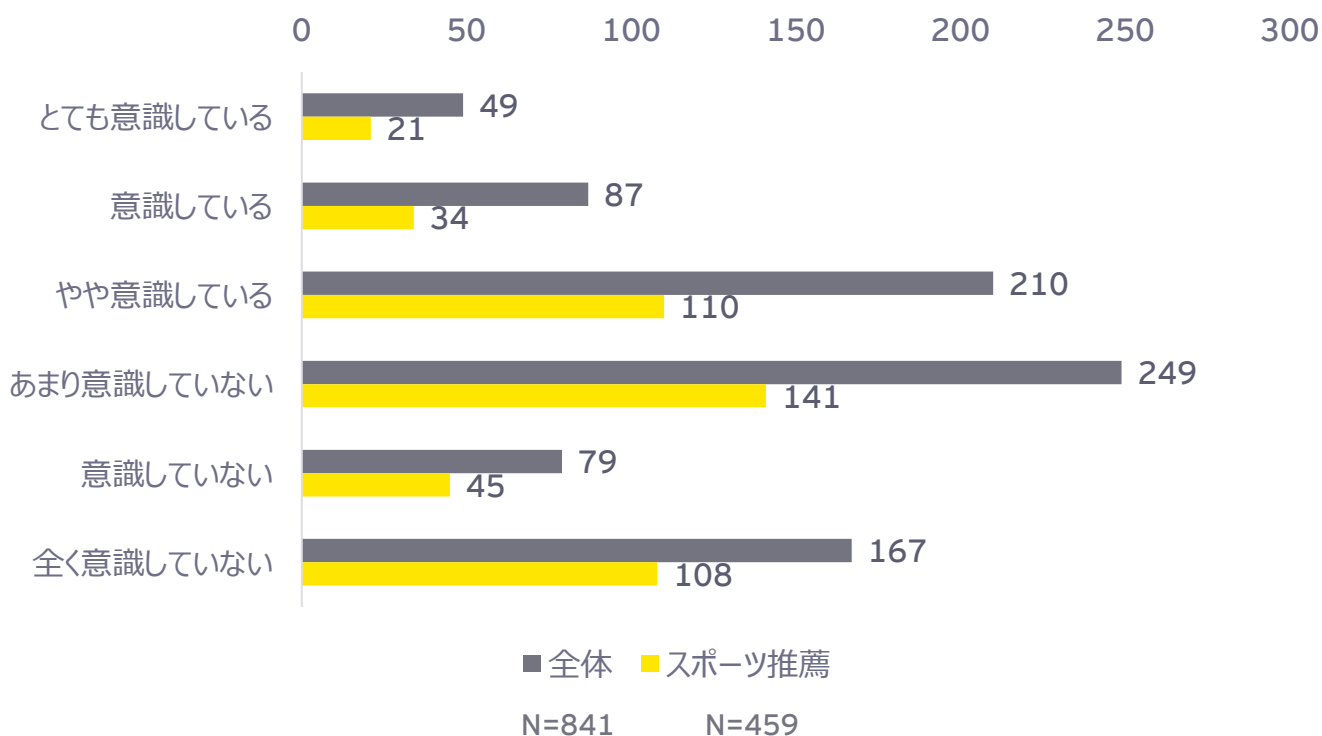


学生アスリートの調査結果⑨

◆GPAの意識（学業成績要件の有無）

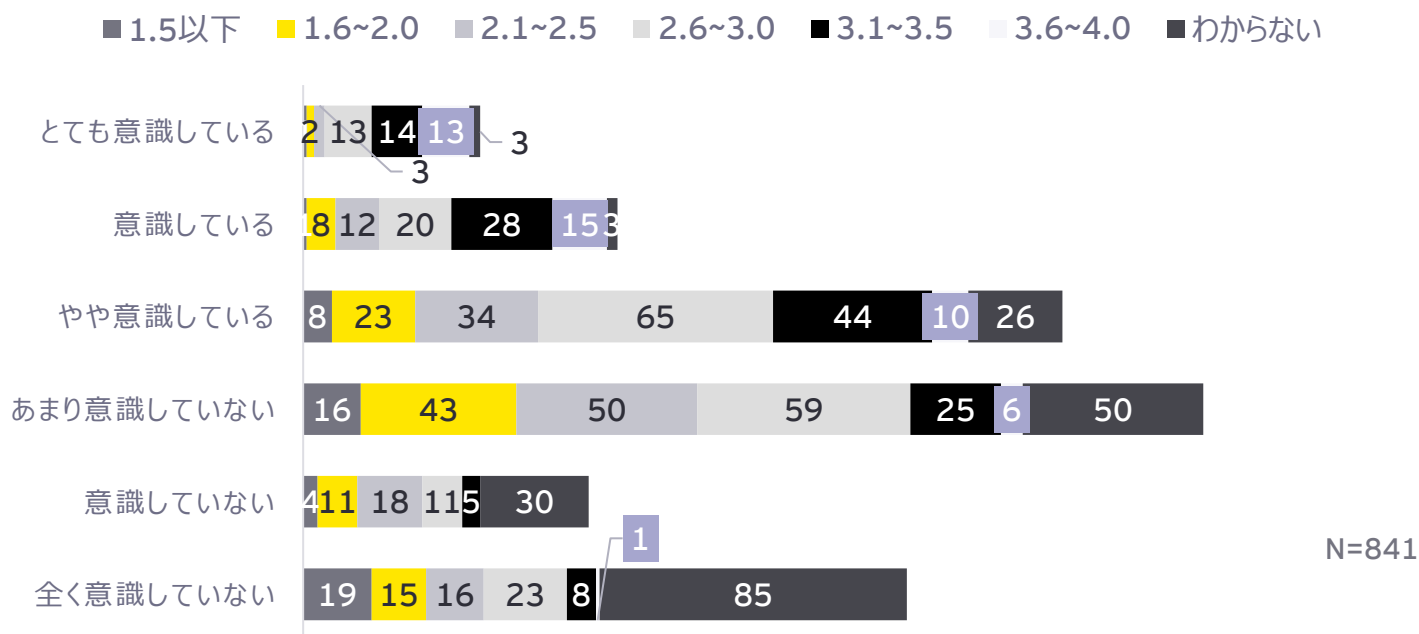


◆ GPAの意識（全体とスポーツ推薦の比較）

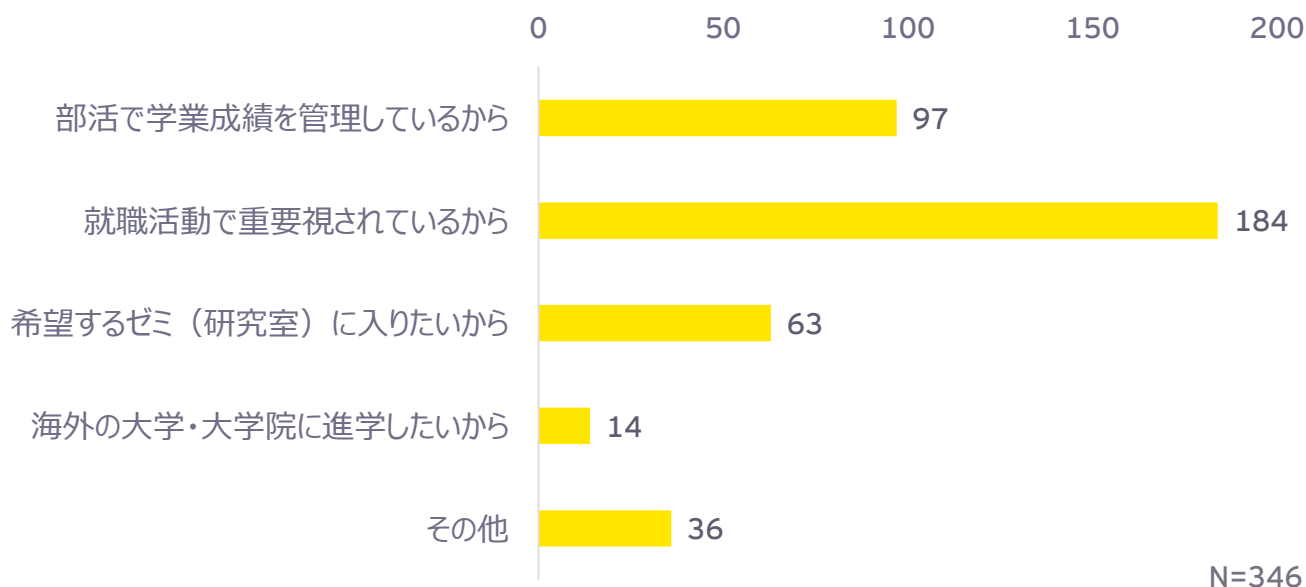


学生アスリートの調査結果⑩

◆ GPAの意識（GPAと成績）



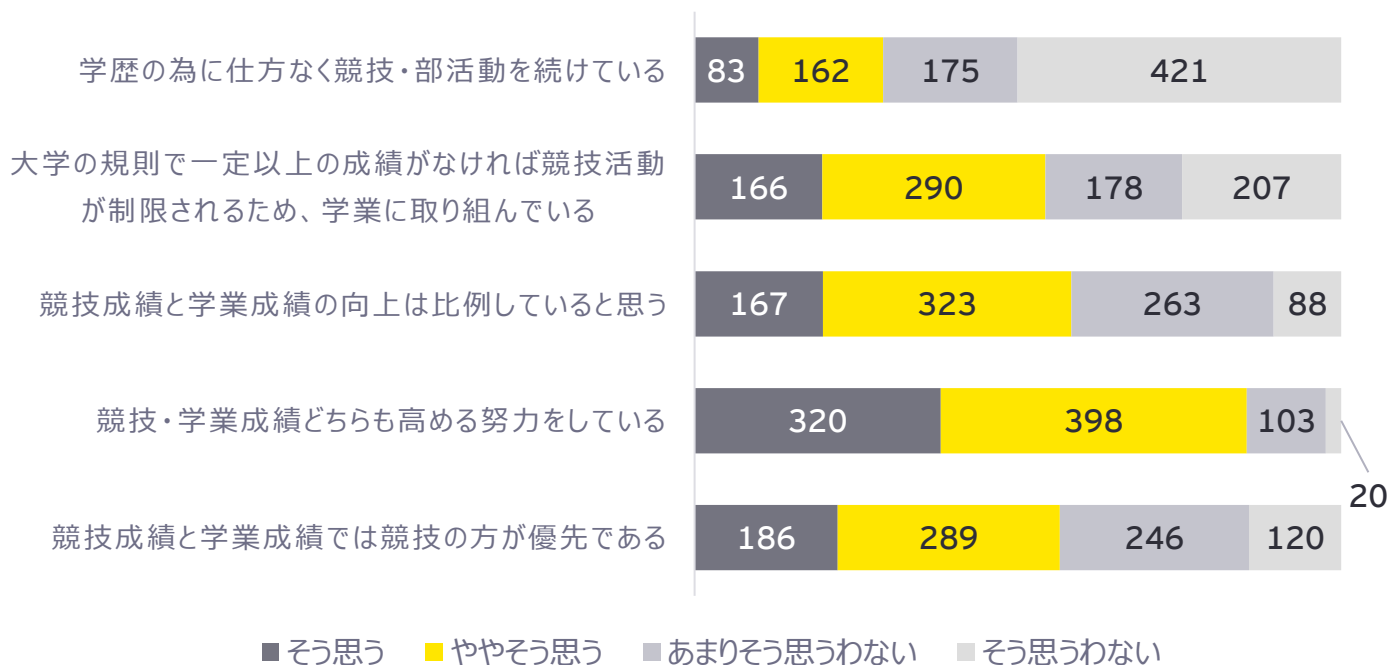
◆ GPAを意識している理由



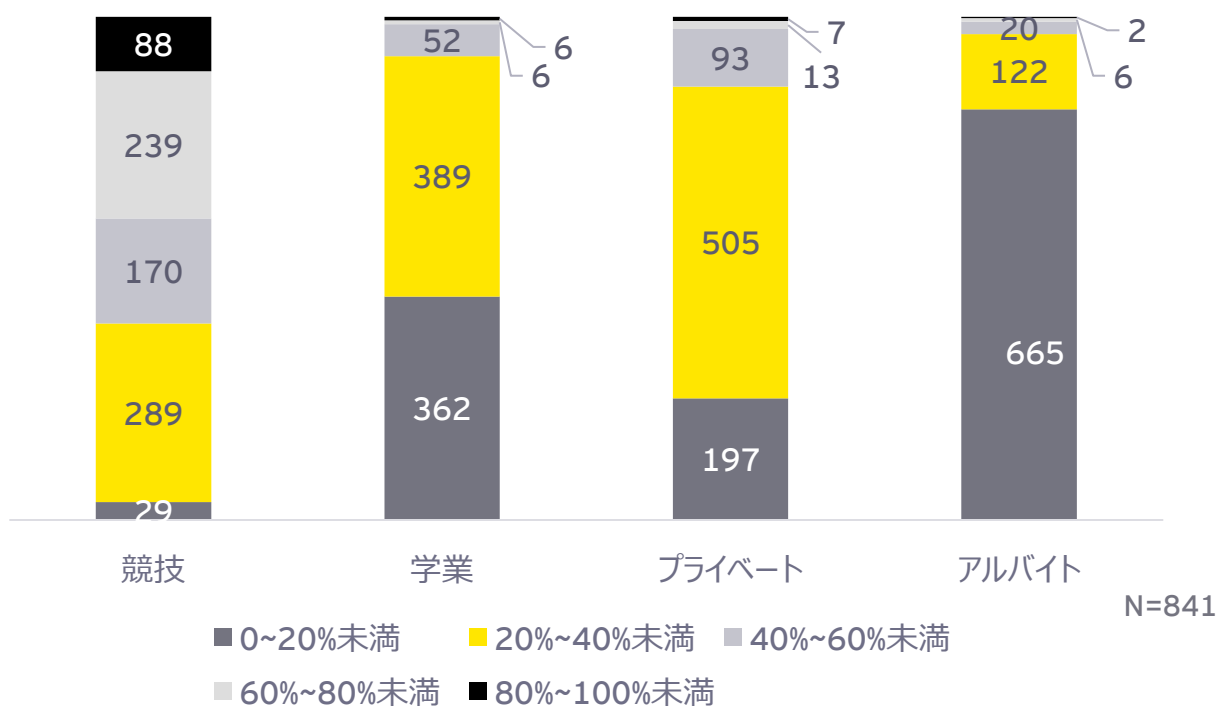
学生アスリートの調査結果⑪

◆ 学業と競技の考え方について

N=841

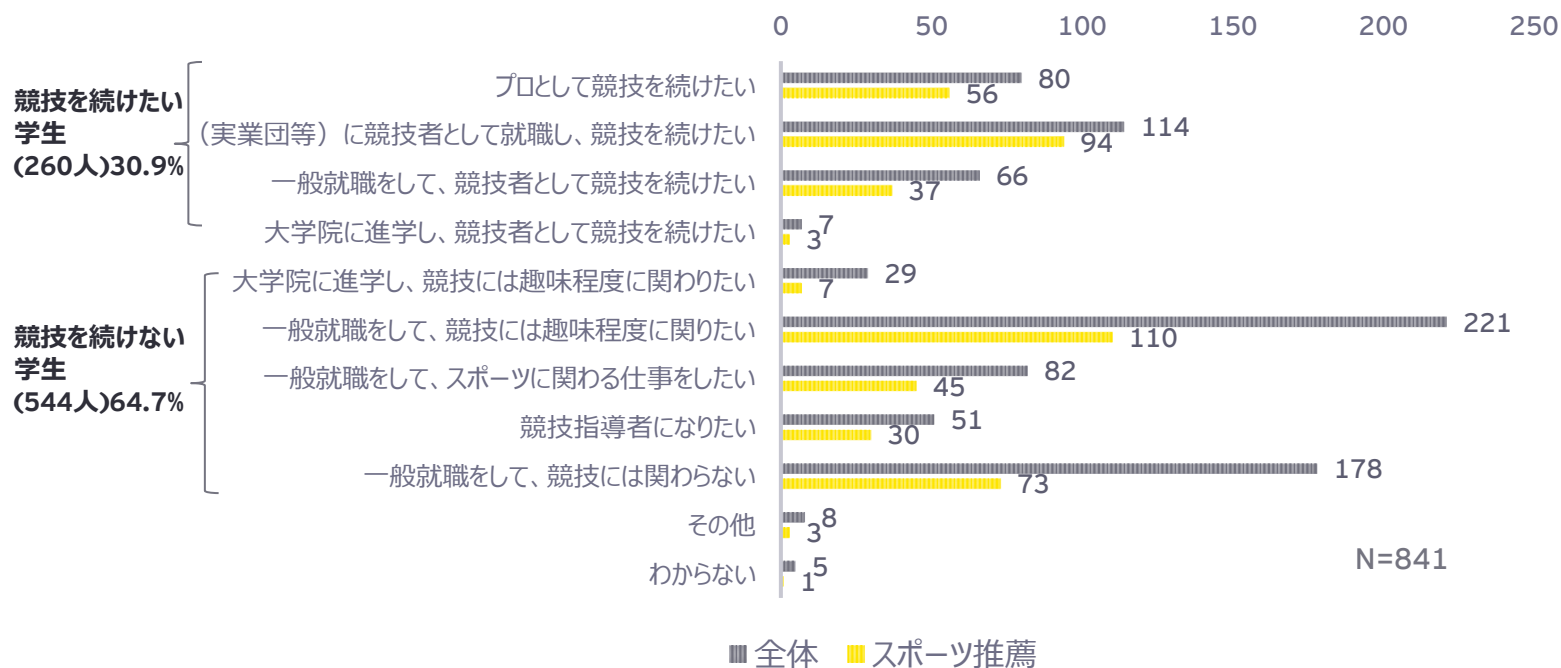


◆ 1週間のうち、競技、勉強、プライベート、アルバイトにかける時間の割合



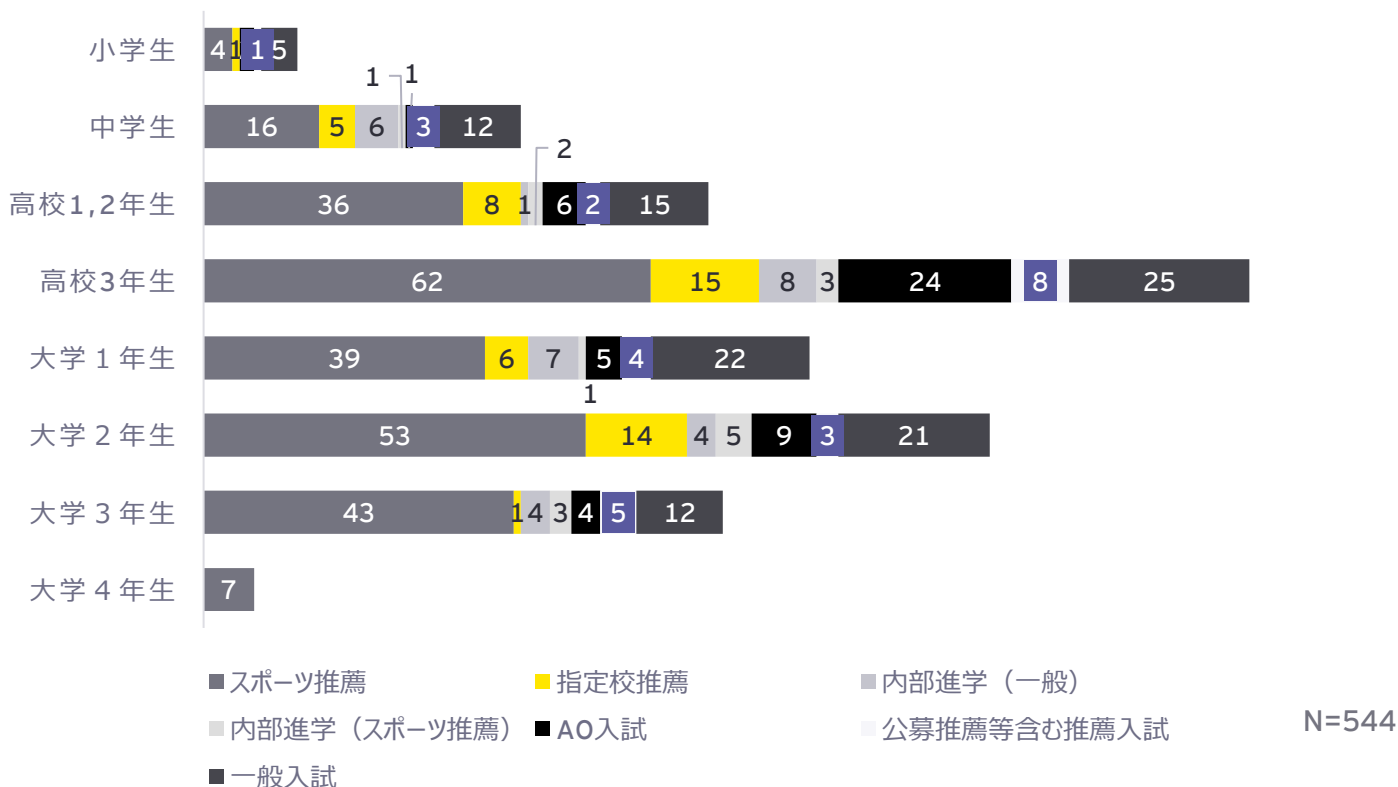
学生アスリートの調査結果⑫

◆現在取り組んでいる競技について、卒業後どのように関わりたいか



◆(大学卒業後の進路として競技者を選択しなかった学生)が大学卒業後の進路を考えた時期

「大学院に進学し、競技には趣味程度に関わりたい」「一般就職をして、競技には趣味程度に関りたい」「一般就職をして、スポーツに関わる仕事をしたい」「競技指導者になりたい」「一般就職をして、競技には関わらない」「その他」「わからない」

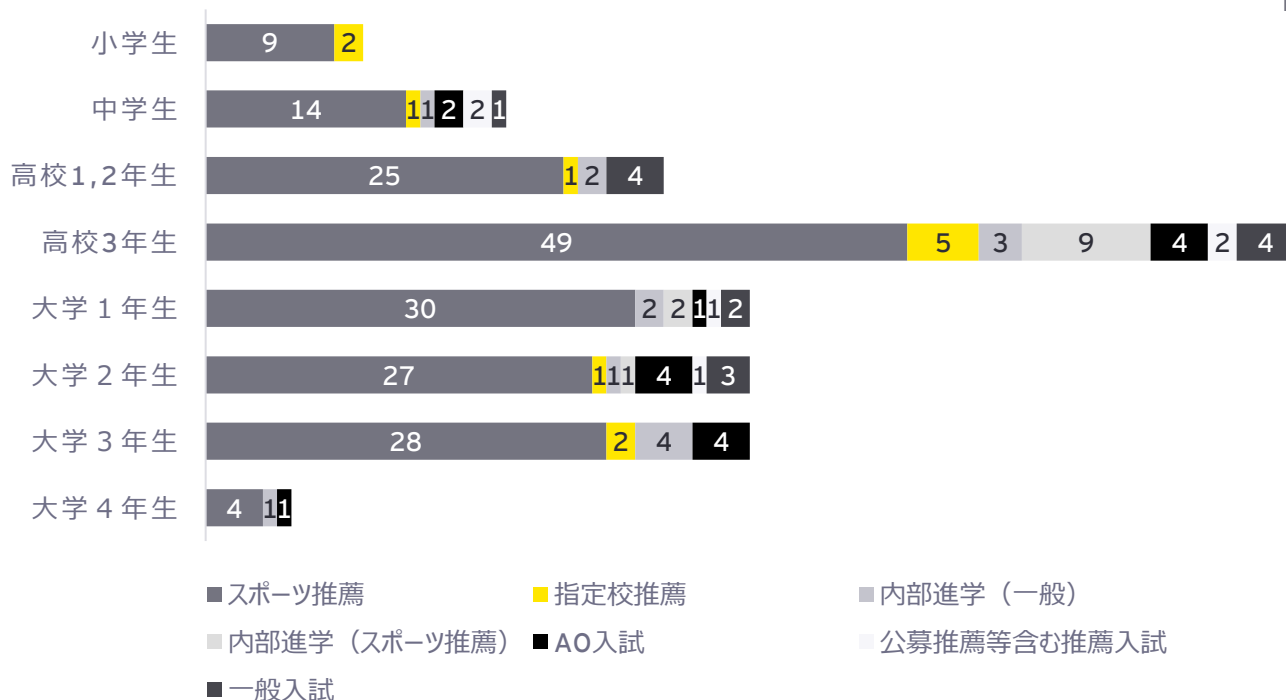


学生アスリートの調査結果⑬

◆（大学卒業後も競技を続けたいと考えている学生）が大学卒業後の進路を考えた時期

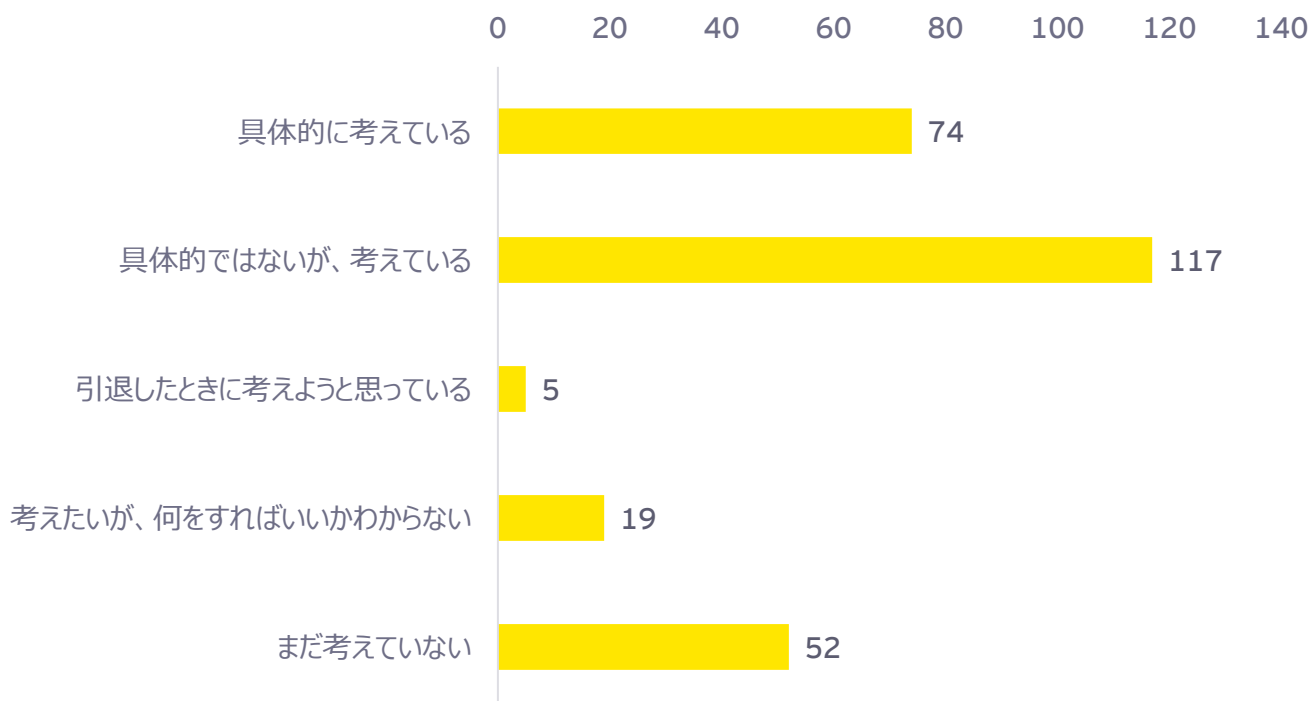
「プロとして競技を続けたい」「（実業団等）に競技者として就職し、競技を続けたい」「一般就職をして、競技者として競技を続けたい」「大学院に進学し、競技者として競技を続けたい」と回答した学生

N=260



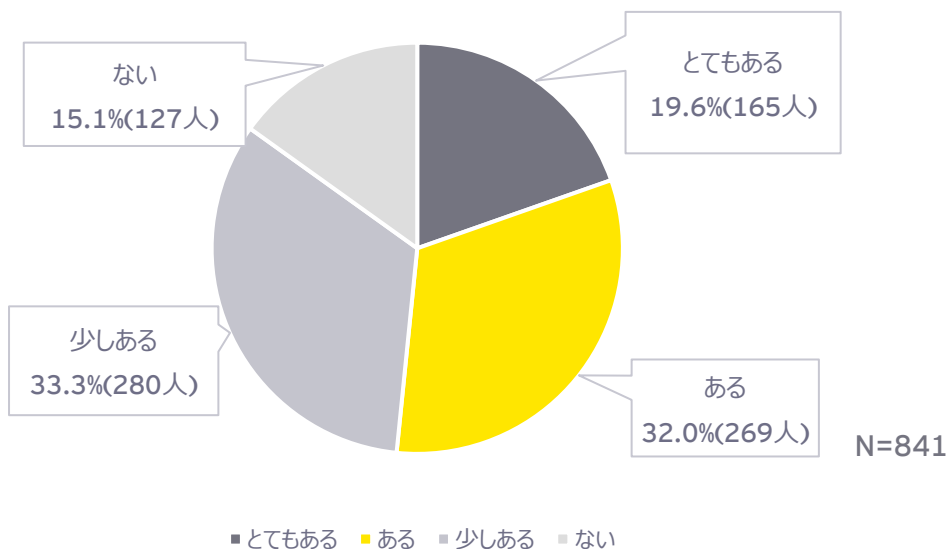
◆競技生活引退後のキャリアや将来について、現状の認識として一番適しているもの

回答学生数

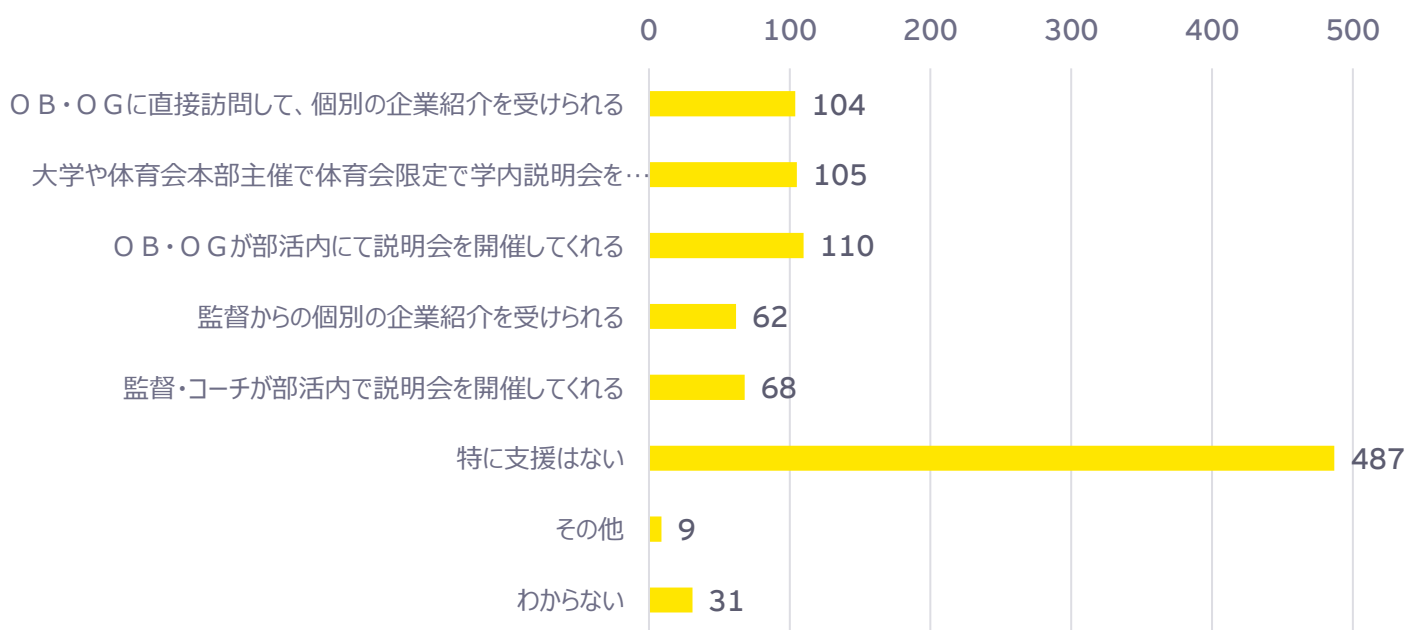


学生アスリートの調査結果⑭

◆ 部活のOB/OGとの接点の有無



◆ 部活関係者からの就職支援

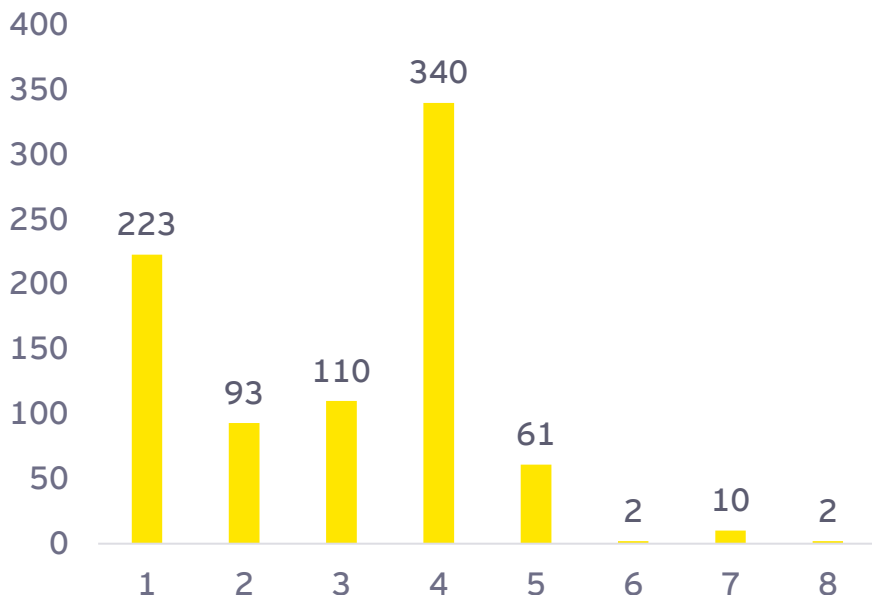


学生アスリートの調査結果⑮

◆ インターンシップへの参加意欲(全体)

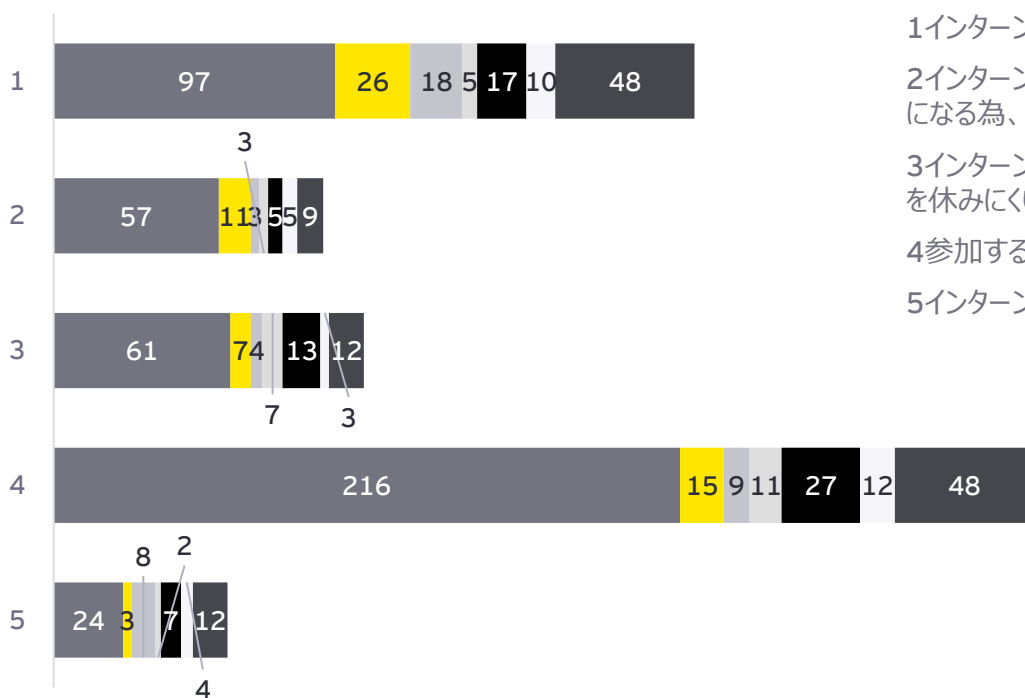
回答学生数

N=841



- 1 インターンシップに参加する予定である
- 2 インターンシップに参加したいが競技活動の支障になる為、参加しない予定である
- 3 インターンシップに参加したいが、部活内で練習を休みにくいため参加しない予定である
- 4 参加する予定はない
- 5 インターンシップに既に参加した、申し込みをした
- 6 その他
- 7 わからない/未定
- 8 参加させてもらえない

◆ インターンシップへの参加意欲(大学入学制度別)

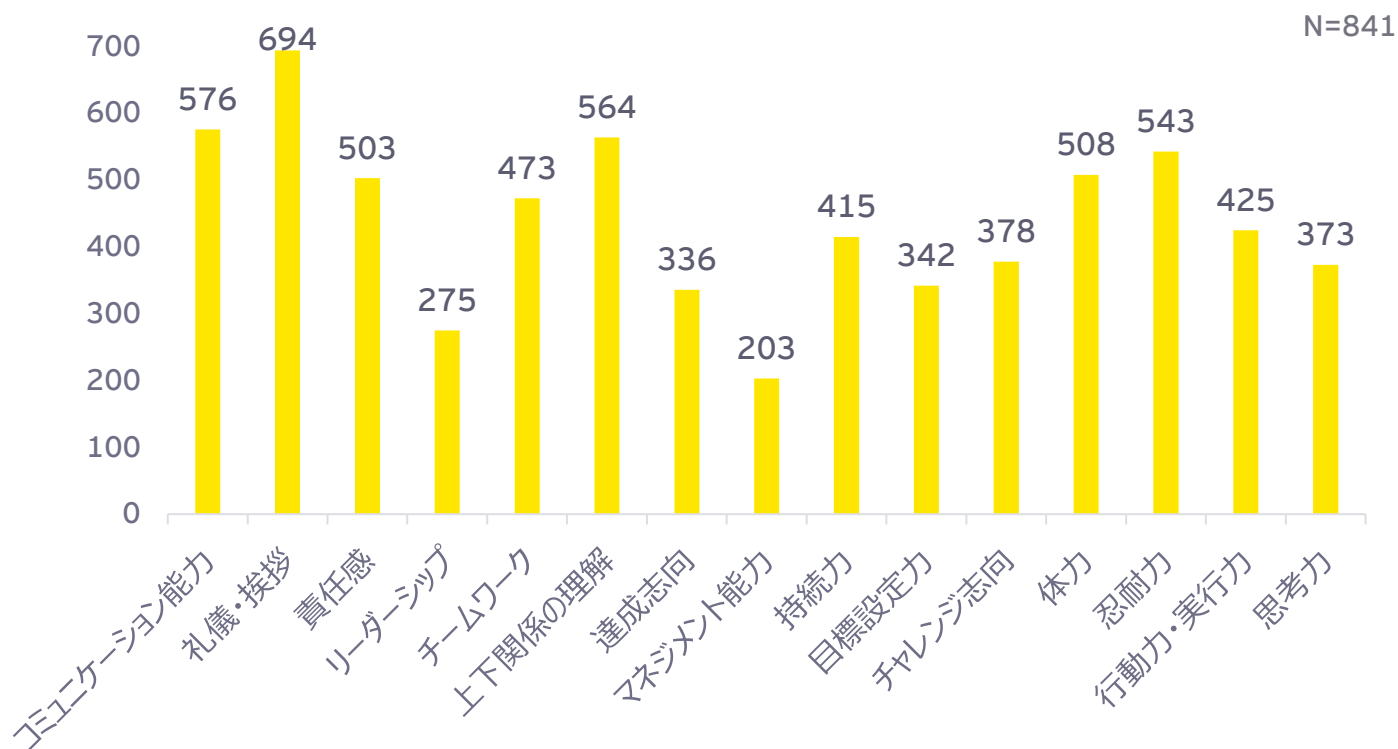


- 1 インターンシップに参加する予定である
- 2 インターンシップに参加したいが競技活動の支障になる為、参加しない予定である
- 3 インターンシップに参加したいが、部活内で練習を休みにくいため参加しない予定である
- 4 参加する予定はない
- 5 インターンシップに既に参加した、申し込みをした

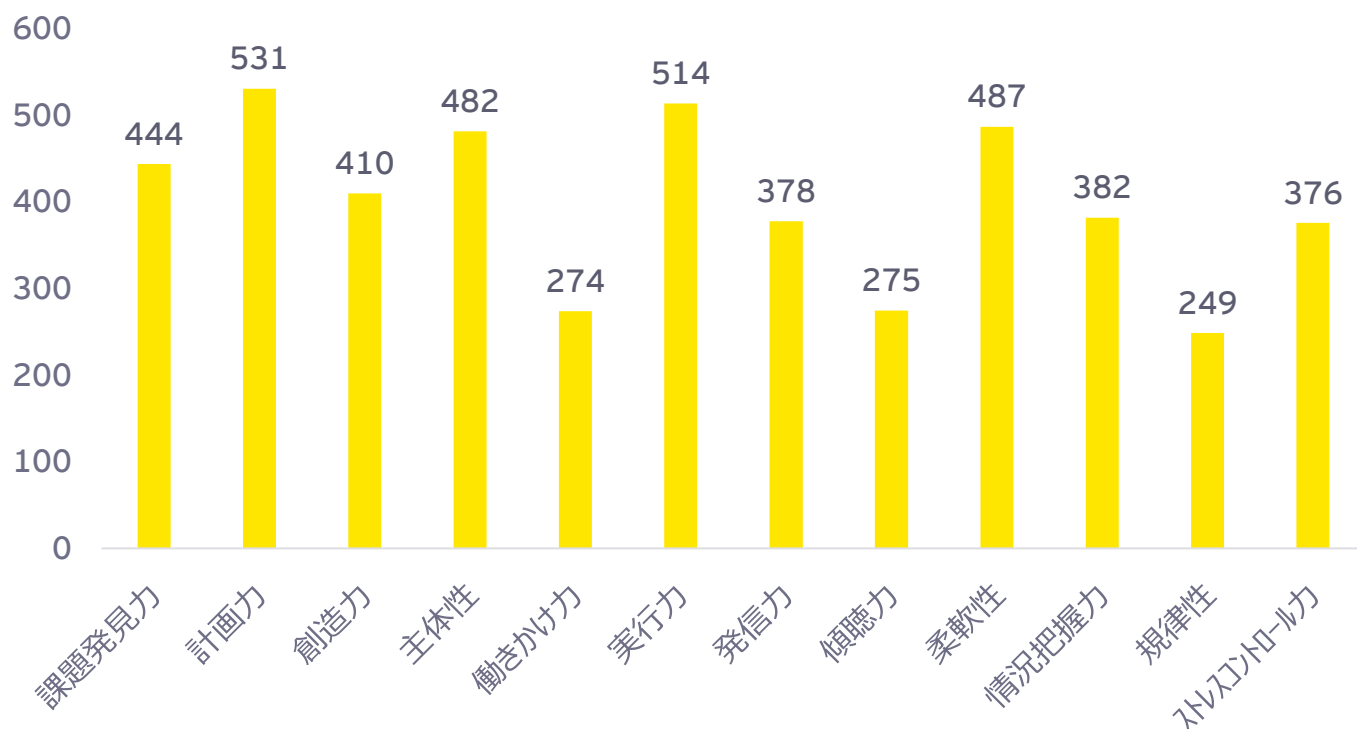
- スポーツ推薦
- 指定校推薦
- 内部進学(一般)
- 内部進学(スポーツ推薦)
- AO入試
- 公募推薦等含む推薦入試
- 一般入試

学生アスリートの調査結果⑬

◆運動部の活動を通じて身に付いたと感じている自身の強みに当てはまるもの（複数回答）

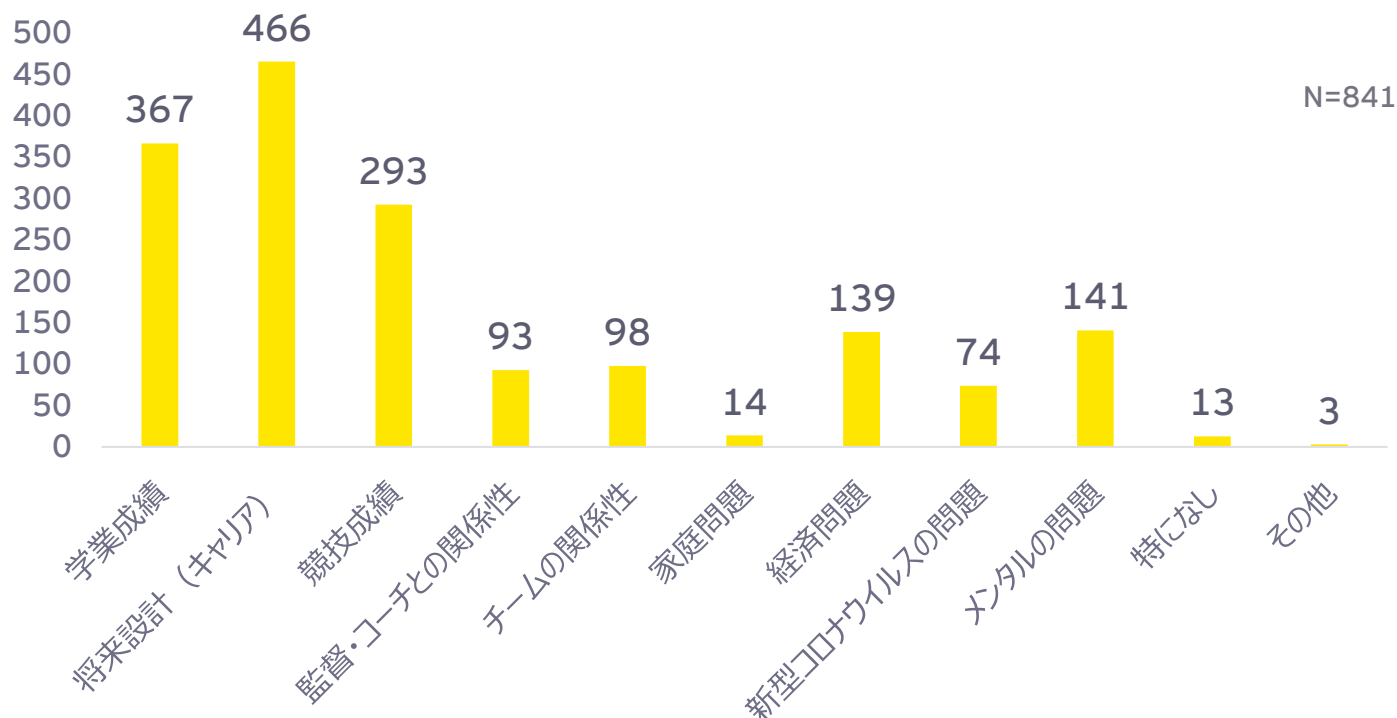


◆卒業後、社会で必要になる能力のうち、身につけたいと思う能力（複数回答）

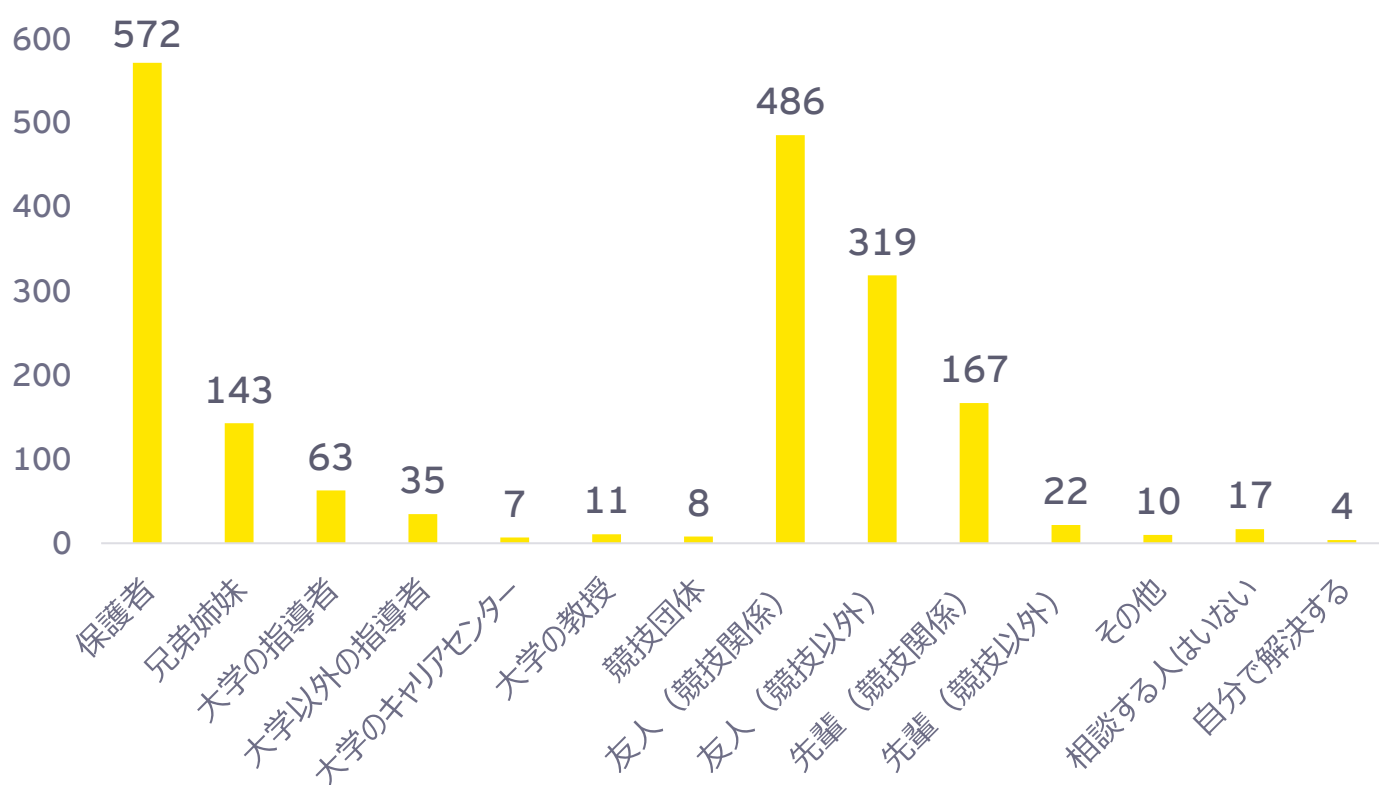


学生アスリートの調査結果⑰

◆現在学生が抱える悩み事、不安に感じること（3つまで選択可）

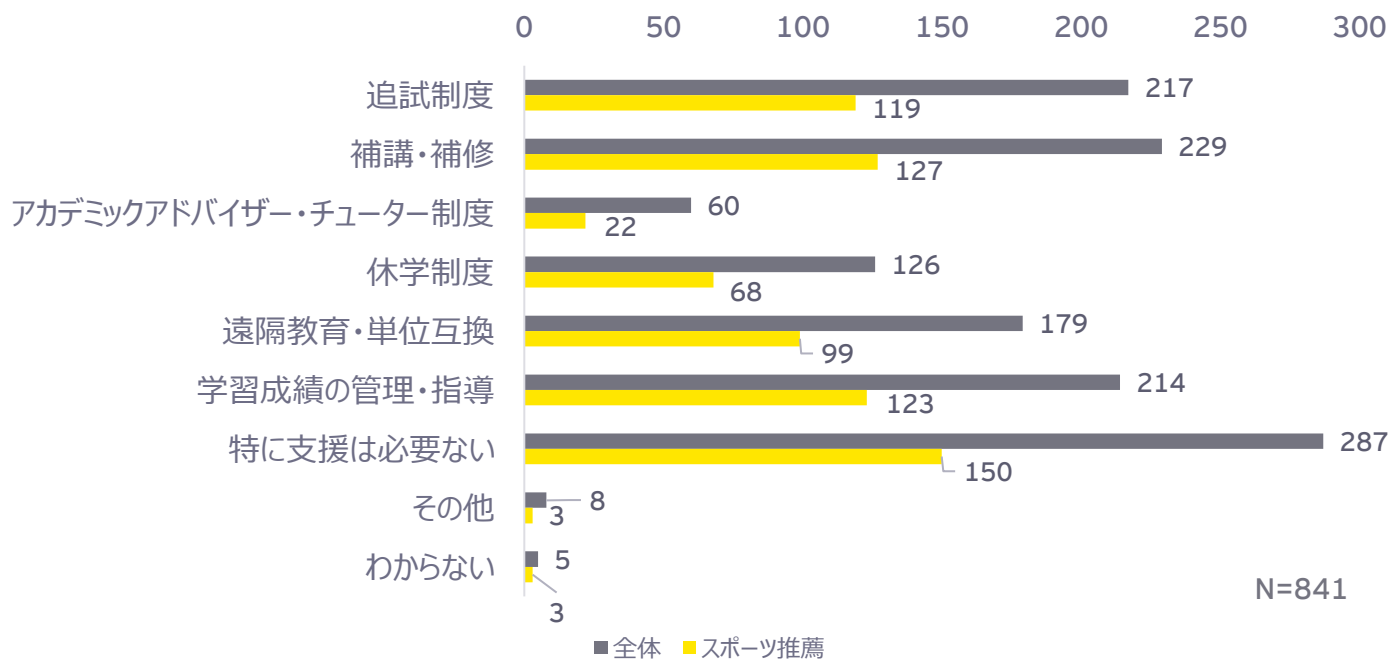


◆悩み事、心配事を誰に相談するか（3つまで選択可）

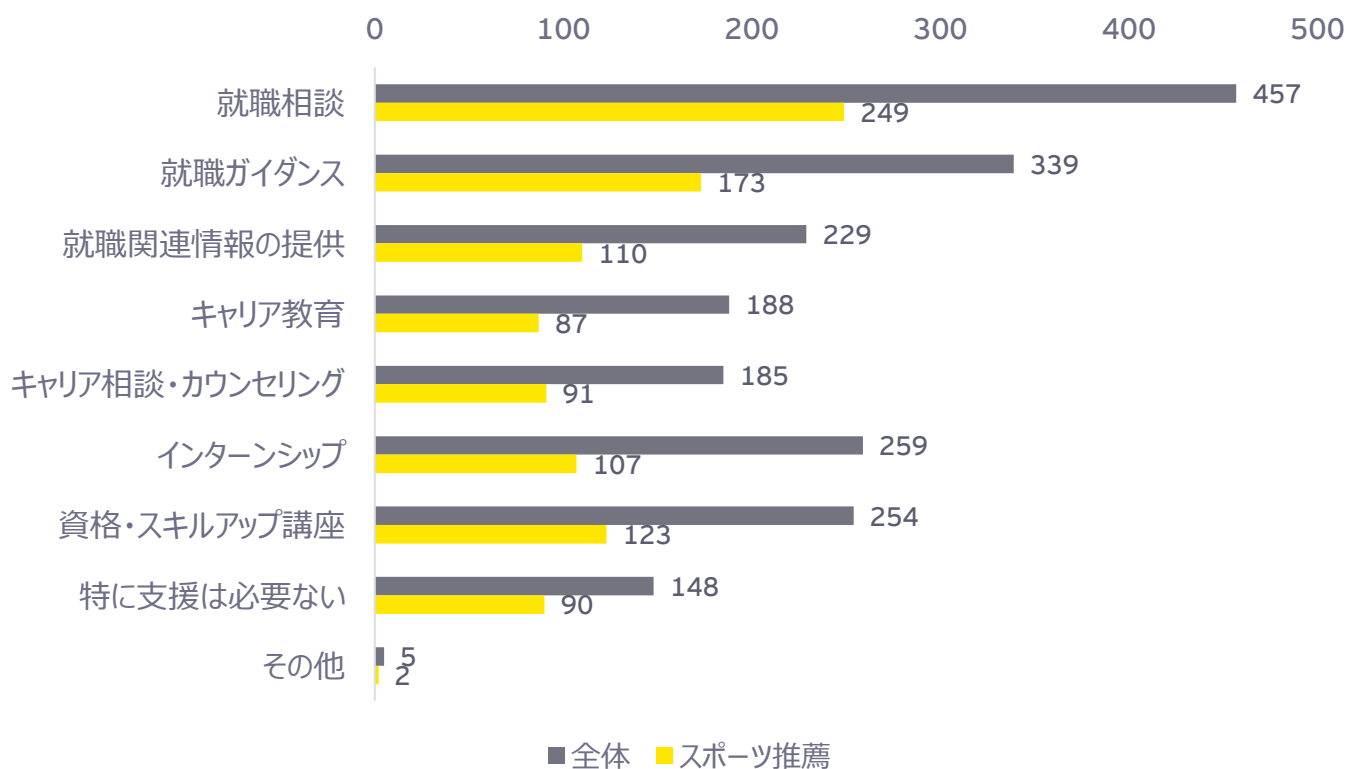


学生アスリートの調査結果⑱

◆どの様な「就学（学業）」の支援が必要だと感じるか（複数回答）

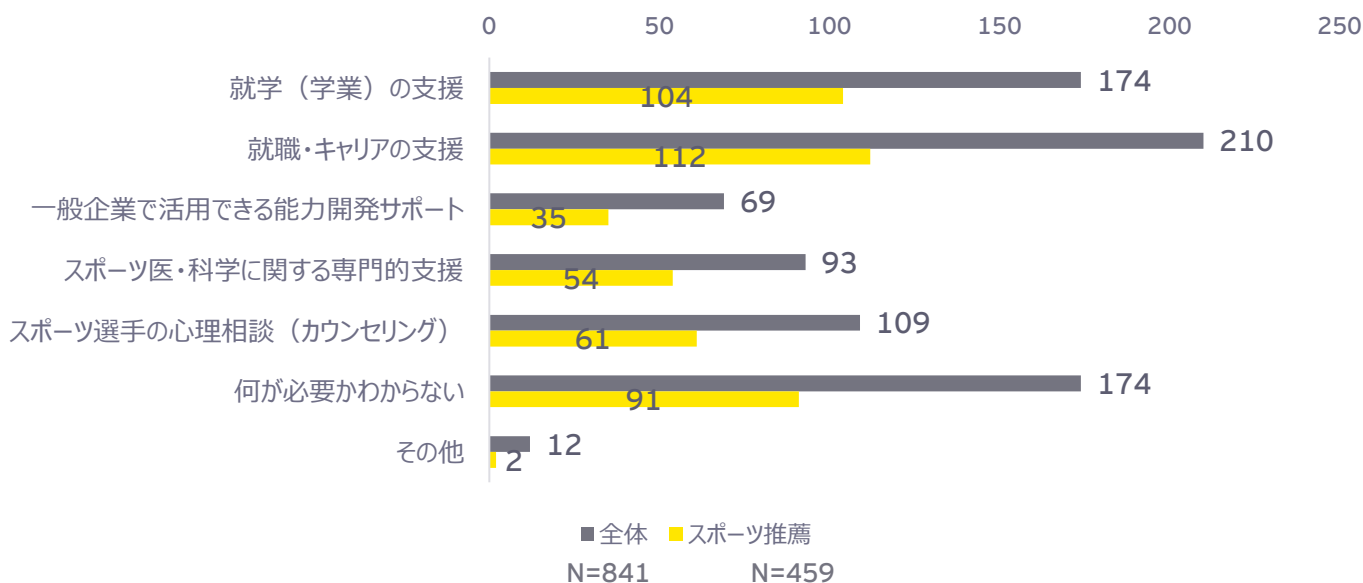


◆どの様な「就職・キャリア」の支援が必要だと感じるか（複数回答）

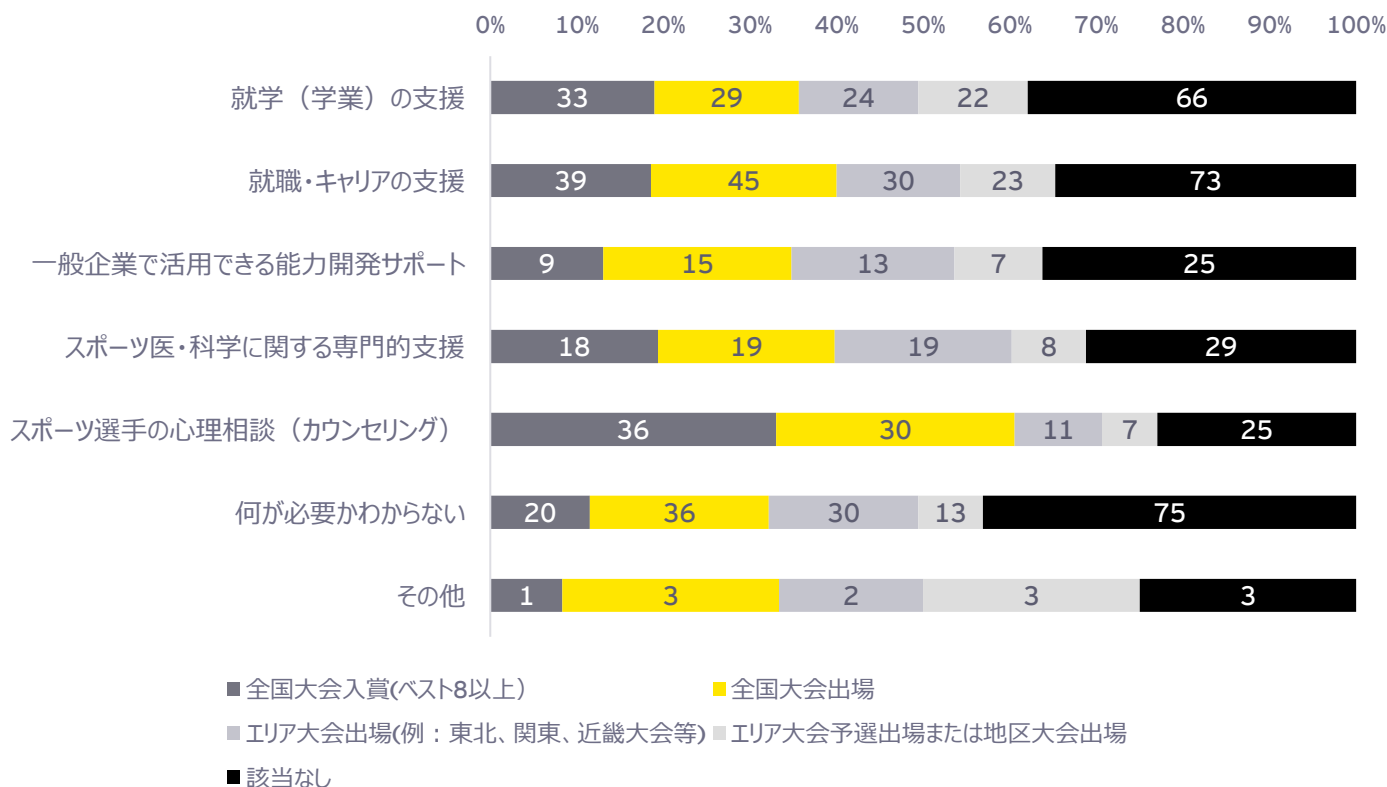


学生アスリートの調査結果⑱

◆どの様な「就学（学業）」の支援が必要だと感じるか（全体とスポーツ推薦の比較）



◆どの様な「就学（学業）」の支援が必要だと感じるか（大学の最高成績別）



学生アスリートの調査結果⑳

◆大学生として運動部活動に所属し、競技活動、学業、就職活動をするうえで、改善されたいと思うこと、問題だと思うこと（自由記述）

構造的

（例：大学の組織・制度、大会のスケジュール、就職活動の時期 等）

運用

（例：自分自身の問題、指導者との関係 等）

◆練習時間・部活動の長さ

- 授業と競技活動を両立する上では、練習時間が早朝だったり夜遅かったりするので、私生活にも影響が出ること
- 大学で競技をやめるのに、就活に時間を割かず、将来のことよりも今だけのために時間を使い、よりよい進路を考えられていない気がする。部活での仕事やミーティングが少なければ就活に取り組みやすくなると思う
- 競技に時間を使いすぎて他のことが疎かになってしまう
- 部活動の時間が長い 部活の活動時間を考えてほしい
- 学業が本分ではあるが部活動の性質上、競技が生活の主となっている
- 部活動の拘束時間
- 時間通りの部活にする
- 活動時間の改善

◆両立できる環境作り

- 学業、就職活動のしやすさを改善すべき
- 部活動と、キャリアや学業の両立がしやすい環境づくり
- 運動部に所属しながらも両立して取り組める環境整備
- 部活動あるからできないことが多い。縛りが厳しい
- 競技とインターンシップの両立は出来ないため、成績の振るわない競技者は早めに引退しなくてはならない点
- 部活動に所属しているためできないことが多い。縛りが厳しい

◆大会の開催期間

- 大学生で平日は授業があるのに、インカレなどの公式戦が平日に数日間に渡って開催されるのはおかしいと思う。公式戦がそのような日程で組まれると学業をおろそかにすることが当たり前という考えが出てきても仕方ないと思う。
- 大会の時期などを考えて欲しい
- 就職活動と試合シーズンが重なり、両立が難しくなること
- シーズン中とオフシーズンをはっきりさせる
- 3月に合宿があり、就活解禁と丸かぶりすること

◆指導者

- 部活を就活で休んだら監督に小言を言われることが納得いかない。大学での競技成績も大事だがプロのない剣道という競技においては就活に重きを置くことへの理解がもっと欲しい
- 部活動が全てだと思ってる指導者。大学で部活動を続けている全員がレギュラーになる為や試合で結果を残す為といった理由で続けているわけではない。それを理解できない指導者
- 就職活動に参加するときの指導者の理解
- 指導者が、就職に対する考えが軽いと思うのでもう少し、就職に対する考えが変わるべきだと思う。
- 具体的な指導ではなくただのパワハラや罵声、性差によるコーチングの差が見られること。
- 監督や外部コーチなどチームの権力者や指導者などがどのように文武両道していくか、選手との関わり方を勉強する勉強会などを開いて昔と今は違うことを教えてあげて欲しい。その競技だけしか知らない世界の人たちが就職や学業を言われても理解されないこともあるため、そのようなサポートをできる人材やサービスをもっと充実させて欲しい
- 指導者が練習を全く見ない

◆キャリア

- どうしても競技中心の生活になるため、先を何となくしか考えられないこと
- 高校の頃から競技に打ち込み、大学でも継続していて、正直勉強をしてきていないところがある。将来の職業選択でも競技しかしてこなかったこともあり、必然的に競技継続を選んでしまっている。昔の自分にもっと勉強もがんばっていたら、もっと他の選択肢が増えていたのではないかなと思う
- もっと強みのアピールの仕方を教えてもらえば良い
- 競技で培った能力をどのように社会で活かせるのか分析するためのヒントが欲しい
- 大学生は、ある程度社会に向けての準備を進めていかないと年齢なので社会人としての基礎を学べるような団体にしていくべきだと感じる。そのために、監督やコーチとの関わり方やマナーを学べるような講義があるといいと思う。
- バイトであったり、練習だけでなくもっといろんなことを試していける場があればいいと思う
- 就職活動や将来への意識を早めの段階でつけて、チーム全体で自分の将来を考えるようにした方がいい
- 部活動生限定の説明会などがあれば非常に嬉しい

学生アスリートの調査結果②

◆大学生として運動部活動に所属し、競技活動、学業、就職活動をするうえで、改善されたいと思うこと、問題だと思うこと（自由記述）

構造的

(例:大学の組織・制度、大会のスケジュール、就職活動の時期 等)

運用

(例：自分自身の問題、指導者との関係 等)

◆メンタル面のサポート

- 体育会の部活動では、体力もちろんですが、同時に精神も削られることが多いので、メンタル面でのサポートを定期的に受けることができると助かると感じます
- メンタル部分のケアがトップ選手だけではなく多くのアスリートに必要であると身をもって感じています。海外の方がメンタルに関するケアや予防などの必要性を重んじているように感じ、日本にもそのような形態が必要であると強く思っています。正しい情報や認識を指導者も含めた多くの人々の間で一般化してほしいと思っています。
- メンタルケア。健康に支障をきたしながらトレーニングしてしまうことの抑制。
- 大学で競技成績が伸び悩む人が多いので精神的な支えが必要で、コーチ、監督ではなく専門的なカウンセラーが必要

◆財政面

- 私の部ではアルバイトが禁止されているため、金銭面で負担が大きいです。学費と部活動費の2つがかかっており、年間でかなりの金額がかかっていると考えられるため、昼ごはんを抜くなど、競技にとって大切な体重が減ってしまっているのが事実です。私も家計が裕福ではないため、部活動費(寮費を含む)を奨学金で支払っており、卒業後、自分で多額のお金を返済しないといけないと思うと給料の高い会社に入らないといけないという思考が強くなり、プレッシャーを感じてばかり。
- アルバイトが禁止されていること
- 部活でアルバイトが禁止されているため大学で競技をおこなっていて、ある程度の実績がある生徒に経済的な支援をして欲しい。
- 私の部活はとてもお金がかかります。なので、多くの部員がアルバイトを掛け持ちしています。プライベートの時間もあまり取れずに、部活のために働くので自由な時間があまり取れないことです。
- 接骨院の医療費の申請を受ければ良いと思う
- 練習器具やテーピングなどの金銭的支援

◆医科学面

- トレーナーの人材不足
- 栄養や身体のことを相談できるトレーナー的な人が欲しい
- アスリート食事の知識をもっと知りたい

◆体育会/スポーツ推薦

- GPAや学業での判断も重要だと思うが、人として、時間も守るし、コミュニケーション能力も長けており、尚且つこんなきつい部活、寮、を経験してきた為、忍耐力もある。一般の方よりもGPAや学力は確かに良くないかもしれないけれど、素晴らしい価値があると思う。学業などで見るのも確かに大切だけど、企業の皆様には是非価値のある人材を獲得出来るようにしてほしいと思う。
- 学業をおろそかにして競技活動に取り組む学生を時に見かけるが、学生として学業は本業であるためそのような生徒に対しては厳しい処罰を与えるべきだと思う。そうでないと、競技活動をしている人 = 学業をおろそかにしているという周囲の視線を感じおろそかにしていない人にとっては迷惑な偏見である。
- スポーツの能力のみで決められるスポーツ推薦制度の廃止
- 大学側の対応。強化指定部以外の部活に対しての対応が非常に悪く、グラウンドの確保や部費の配分など何も考えていない
- 学業や就職活動においてアスリート推薦だからといって偏見を持って見られる事
- スポーツ推薦での入学のため、就職活動をメインで活動することが難しい
- 運動部で結果を残してるからといって、スポーツ推薦で大学に来た人と同じ学歴なのが納得いかない。大学は勉強する場所であり、スポーツはおまけなのだから、スポーツ推薦制度を無くしてほしい
- スポーツ推薦の学生の人間力が低い人が多すぎる。

3. 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析

章	内容
第2章 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析	日本の大学に通う学生アスリートの学業成績、競技活動、就職状況の相関関係を調査し、分析結果を報告します。 1. 大学調査を実施した手法 2. 大学調査における調査結果 3. 各大学で実施されている取組事例 4. 国内学生アスリートの調査結果
第3章 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析	海外にて実施されているキャリア形成に係る支援について、調査し、分析結果を報告します。 1. アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報 2. NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート 3. NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート 4. Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート 5. INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート 6. AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート
第4章 有識者検討会議の開催・決定事項	今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方を有識者検討会議にて討議し方針を決定。その決定内容を報告します。 1. 有識者委員について 2. 有識者検討会議の決定事項
第5章 調査結果のまとめと提言	第2章から第4章までの調査結果をまとめて、今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方に関する取組につき提言します。 1. 調査結果のまとめ 2. 具体例
第6章 競技を引退したアスリートの活動状況について	競技を引退しスポーツ界内外で活躍しているアスリートの取組を紹介しします。 1. 事例集の目的 2. 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添 3. 引退したアスリートによりワークショップ実施内容・結果 4. 考察






3.1

アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選
定した理由及び基本情報

3.1 : アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報

海外調査対象国(アメリカ、UK、フランス、オーストラリア)の大学、ハイパフォーマンスセンターにて実施されている施策も調査

- ▶ 調査する諸外国を選定する上で以下項目に注力し選定した
- ▶ 諸外国にて実施している施策を日本に導入する際に、環境等が日本と近いほうが、仕組みを導入しやすいと想定するため、下記5項目を中心に国を選出
 - ▶ GDPが日本から10位圏内であること
 - ▶ 直近10年以内にオリンピック(夏季)を開催/開催予定
 - ▶ 東京オリンピック2020にて金メダル獲得数がTOP10に入っていること
 - ▶ 盛んなプロリーグがあること
 - ▶ 大学にて体育学部が存在すること

#	比較項目	 日本	 アメリカ	 UK	 フランス	 オーストラリア
1	経済力 (2021年)	GDP 世界3位	GDP 世界1位	GDP 世界4位	GDP 世界7位	GDP世界12位
2	オリンピック開催 実施/予定	2020年 開催	2028年 予定	2012年 開催	2024年 開催	2032年 開催
3	東京オリンピック での金メダル数	27個 (3位)	39個 (1位)	22個 (4位)	10個 (7位タイ)	17個 (6位)
4	プロフェッショナル スポーツの有無	○	○	○	○	○
5	大学スポーツの 有無	○	○	○	○	○
6	(参考)人口 (2020年)	世界11位	世界 3位	世界 21位	世界 22位	世界 55位






参照 : IMF, WHO, JOC HP

- ▶ 上記で選定した国にて、学生アスリートに対してキャリア形成支援を実施している機関に対する調査を実施する
- ▶ 大学だけではなく、その国の文化に合わせハイパフォーマンスセンターにも調査を実施
 - ▶ アメリカ : NCAA、NCAAに加盟している大学
 - ▶ UK : Loughborough大学
 - ▶ フランス : INSEP
 - ▶ オーストラリア : AIS

3.1 : アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報

海外調査対象国(アメリカ、UK、フランスオーストラリア)の大学、ハイパフォーマンスセンターにて実施されている施策も調査

- ▶ キャリア支援は、国の教育システム、就職方法などによって影響する
- ▶ 基本情報として、各国の影響しそうな情報を整理

#	比較項目	 日本	 アメリカ	 UK	 フランス	 オーストラリア
1	教育年数	6-3-3-4	5-3-4-4*	6-5-2-3	3-5-4-3-4	6-4-2-4
2	義務教育	9年間	12年間	12年間	12年間 (幼稚園時代含)	10年間
3	高校中退率	1.5%	5.28%	6.4%	10%	17%
4	大学入試	共通入試、 一般入試	ACT, SATスコア、 ボランティア他	IELTS、 アイエルツ	バカロレア	HSC
5	新卒就職方法	4月一斉採用	通年	通年	通年	通年
6	失業率	2.6%	3.5%	3.8%	8.1%	3.4%
7	兵役	×	×	×	×	×
8	平均年収	\$40,000	\$70,000	\$50,000	\$51,000	\$56,000
9	スポーツ推薦の有無	○	○	○	○	○
10	オリンピック開催年度	2020年	2028年	2012年	2024年	2032年
11	大学数	803 (2021)	5916 (2020)	280 (2019)	1817 (2021)	43 (2020)
12	大学生数*2	2.9 (2021)	25 (2020)	2.6 (2019)	2.1 (2018)	1.5 (2020)

* : 州によって異なる

*2 : 単位は100万人。(例 : 2.9=290万人)

山稜:文部科学省『学校基本調査』、教育省“Education and training statistics for the UK”、国民教育・青年省“Repères et références statistiques 2022”、U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics, Integrated Postsecondary Education Data System (IPEDS)、教育省“Higher Education Statistics”

3.2

NCAA(アメリカ)にて実施されている
キャリアサポート

NCAAに関する基本情報①

NCAA	<ul style="list-style-type: none">• NCAAは、National Collegiate Athletic Association (日本語訳: 全米大学体育協会)の略である• 本部はアメリカ・インディアナポリス(インディアナ州)に設置されている• 設置の目的は、学生アスリートがより良い学生生活を送ることである• 現在NCAAに加盟している大学は約1,200校。24スポーツにわたり、約50万人の学生アスリートが参加している。
財務関連情報	<ul style="list-style-type: none">• 売上は、約\$1,155M (約1,520億円、レート: \$1=131円) 売上の約80%はテレビ放映権による。テレビ放映権の多くは、American Football 及び Basketballから来ている• 売上の多くは、Division 1の大学に配賦、大会の優勝賞金として利用される。 一部配賦金は、生徒に対する費用などに充てられる
奨学金	<ul style="list-style-type: none">• Divisionによって、奨学金を出せる総数は、決定している。 例) Division 1のアメフト部ならば、85名に対して奨学金を提供することは可能• 奨学金を受け取るにあたり、高校での成績、テストの成績ルールが定義されている
ガバナンス	<ul style="list-style-type: none">• 基本的にDivision内のルールは、各Divisionでルール化• Student-Athleteの全体に関わる場合は、NCAA Board of Governanceにて決定• 競技ルールの変更は、IFやNFの指示によって変更を検討し、NCAA内の組織である Playing Rules Oversight Panelにて話し合い、決定

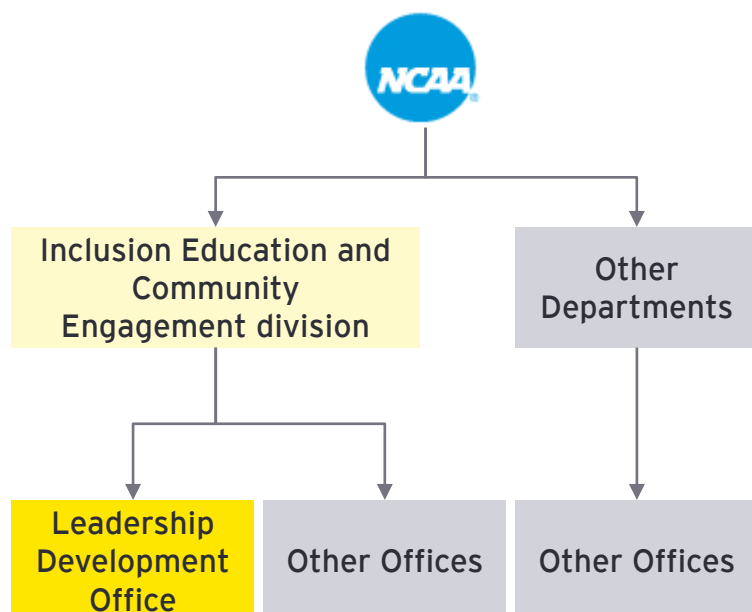


NCAAに関する基本情報②

NCAA
における
施策

- NCAAにあるLeadership Development Officeが施策を担当
- インターンも含め10名の部門
- Inclusion Education and Community Engagement divisionの傘下であり、加盟大学からのメンバーシップ費によって、多くのプログラムを運営している
- 主に下記3つのプログラムを、学生アスリートに提供している
 - ① Student Athlete Leadership Forum
 - ② Career in Sports Forum
 - ③ NCAA Postgraduate Internship Program
 - ⇒プログラムは、全てNCAAのスタッフにて設計、構築、実施。
 - ⇒学生アスリートだけではなく、コーチ、大学AD職員にも提供している
- プログラムを更新する際は、加盟大学等を含む、関係者から意見を集約、または、世界のトレンドを入れ込む。プログラム実施前後で、アンケートをとり、課題の抽出を実施している
 - a) STEM活動(女性やマイノリティに対する)
 - b) 鬱や社会活動(Well being)
- プログラム参加者は、大学のADにて勤務したり、NCAAのオフィスで勤務、業界問わずマネジメント職を得るなど、一定の成果は上げている。(部門としての成功も、プログラム参加者の成果と紐付けている。ただし詳細情報は、公表されていないため、不明)
- After the Gameという、卒業生からの情報を集約しているページがNCAAのHP上にあるが、Leadership Development Officeではない別部門が運営している。こちらは、OB/OGを現役学生アスリートの繋ぐコミュニケーションツールとしてコロナ前によく活用されていた。

Leadership Development Officeの建付



リーダーシッププログラム



所属する大学の大きさに関わらず、所属する地区や大学から推薦された選手が参加(キャリアに関する、悩み、立ち位置を再確認)

3.3

NCAA加盟大学(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート

Boise State大学と南カルフォルニア大(USC)にて実施している支援①

Boise State 大学、 USC 選定理由	<ul style="list-style-type: none"> 調査先選定にあたり、事前にNCAAに詳しい日本人有識者との打合せを実施し、調査先に関するアドバイスを伺った その際に、下記アドバイスを得た。 <div style="background-color: #fff9c4; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>NCAA加盟のパワー5カンファレンスは、プロに行く可能性が高い学生アスリートを多く抱えているため、日本のスケールには合わない可能性がある。日本の大学生などの支援を検討するのであれば、Division 1の中堅またはDivision 2が良いと思う。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> そのため、EY担当者がコネクションを持っていたBoise State大学を選定 Division 1のパワー5カンファレンスに所属する大学にて行っている施策についても調査し、NCAA加盟大学間での違いを把握することが重要と判断し、EY担当者がコネクションを持つUniversity of Southern Californiaも調査対象に追加
パワー5カンファレンスとは	<ul style="list-style-type: none"> 強豪アメリカフットボール部や男子バスケットボール部などテレビに放映されるチームを多く抱えるSEC, PAC12, BIG 10, Big 12, ACCの5カンファレンス Division 1におけるルール変更(特にメディアの露出関連)等を実施する際に、大きな影響力を持つ



NCAA有識者

<Boise State大学、USCにて実施している支援比較>

#	項目	Boise State University	University of Southern California (USC)
1	基本情報	<ul style="list-style-type: none"> 学業はあまり知られていないが、アイダホ州の州立大学 毎年ではないが定期的にプロ選手を輩出 新しい取り組みに前向きに取り組んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 学業も優秀なTop School アメリカンフットボール、バスケットボール、野球等、毎年多くのプロを輩出する Athletic Departmentの予算規模もかなり大きなものと知られている
2	両校共通	<ul style="list-style-type: none"> 基本的に大学1年生、2年生は、コアクラスと呼ばれる全学部共通の支援を実施。3,4年生は、学部の授業を選択。3,4年生の学部のStudent Advisorとの連携が重要 学部に関して、制限を設けていないが、医療等に行く学生アスリートは稀。 NCAAのルールにより、シーズン中とシーズンオフにチームとして活動できる時間が厳しく制限されている <ul style="list-style-type: none"> ✓ 20時間/週 + 1日休息(シーズン中) vs 8時間/週 + 2日休息 (シーズンオフ) ✓ アプリによるスケジュール管理 	



Boise State大学と南カルフォルニア大(USC)にて実施している支援②

#	項目	Boise State University	University of Southern California (USC)
3	学業支援	<ul style="list-style-type: none"> 約380名の学生アスリートが所属 (全学部生：約22,000人(2021年)) 高校生が入学する前から、学生アスリートとしての学校生活に関する情報を共有している NCAAが定めたGPAに引っかかる生徒は少ない <ul style="list-style-type: none"> ✓ Student Advisorのチーム分け ✓ アプリによるスケジュール管理 ✓ 毎週大学1年生に対する30分の個別面談 ✓ コーチ契約に学業支援を盛り込む 競技にGPAの違いはある。女子体操は、成績がよい GPAは、Student Advisorによって定期的に監視されている。必要に応じて、オフィスに呼び出し、Tutorや、クラスを落とすことなどの指示 	<ul style="list-style-type: none"> 約580名の学生アスリートが所属 (全学部生：約21,000人(2021年)) 収益の高いスポーツ(アメリカンフットボール、バスケットボール)以外のスポーツの学生アスリートは、スポーツ推薦ではない学生に近い入学基準となっている <ul style="list-style-type: none"> ✓ アメリカンフットボール部に関しては、かなり手厚いサポートを実施している ✓ Learning Specialist GPAよりAPP(Academic Performance Program=卒業までの進捗度合)を重要視 メジャーの選択についても、大学側のキャンパスアドバイザーと調整。 収益の高いスポーツと低いスポーツの生徒のモチベーションの差が顕著化している プロに行った選手にも、大学を卒業するように働きかけている
4	就職支援	<ul style="list-style-type: none"> 基本的なサポートを実施している <ul style="list-style-type: none"> ✓ 履歴書の作成 ✓ キャリアフェア(女性特化型も含む) ✓ 食事会 ✓ 卒業生とのネットワーキング ボランティア⇒コミュニティサービス⇒就職 不動産、金融、エンジニア等多岐に渡って就職。営業職が多い。卒業後の最初の職は、最後の職ではないので、とらえず、経験を積むことを奨励 学生アスリートのメンタルケアの一環として、OB/OGとの情報共有の場を設定 企業は、学生アスリートの競争心、努力すること、自信をもっていることを評価 仕事の紹介は皆無。 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的なサポートを実施している <ul style="list-style-type: none"> ✓ 履歴書の作成 ✓ キャリアフェア ✓ 食事会 ✓ 卒業生とのネットワーキング 不動産、スポーツ界に進む学生アスリートが多い。収入の高い職業、他人と競うスポーツに行く傾向。 企業は、学生アスリートの問題発見力/解決力、Competitiveなところを評価 学生アスリートのインターンの割合を増やしていくことが今後の課題

Boise State大学と南カルフォルニア大(USC)にて実施している支援③



学生アスリート勉強ルーム
(USC)



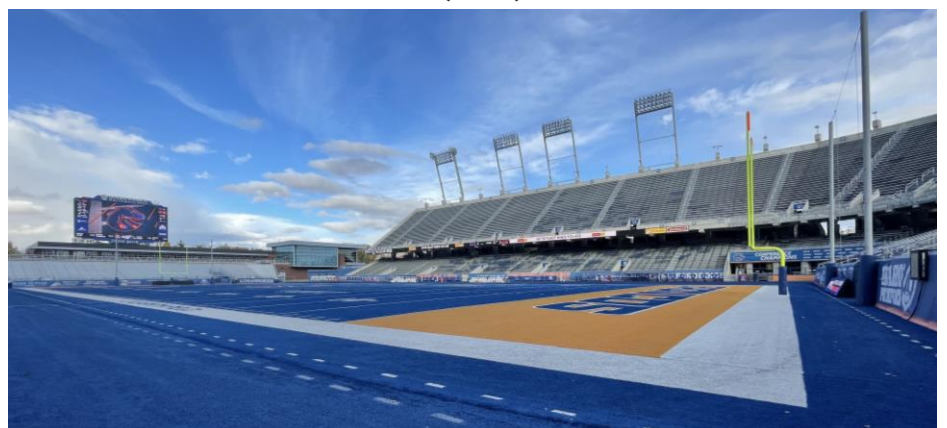
Athletic Department オフィス
(USC)



アメリカンフットボールスタジアム
(USC)



アリーナ
(Boise State)



アメリカンフットボールスタジアム
(Boise State)

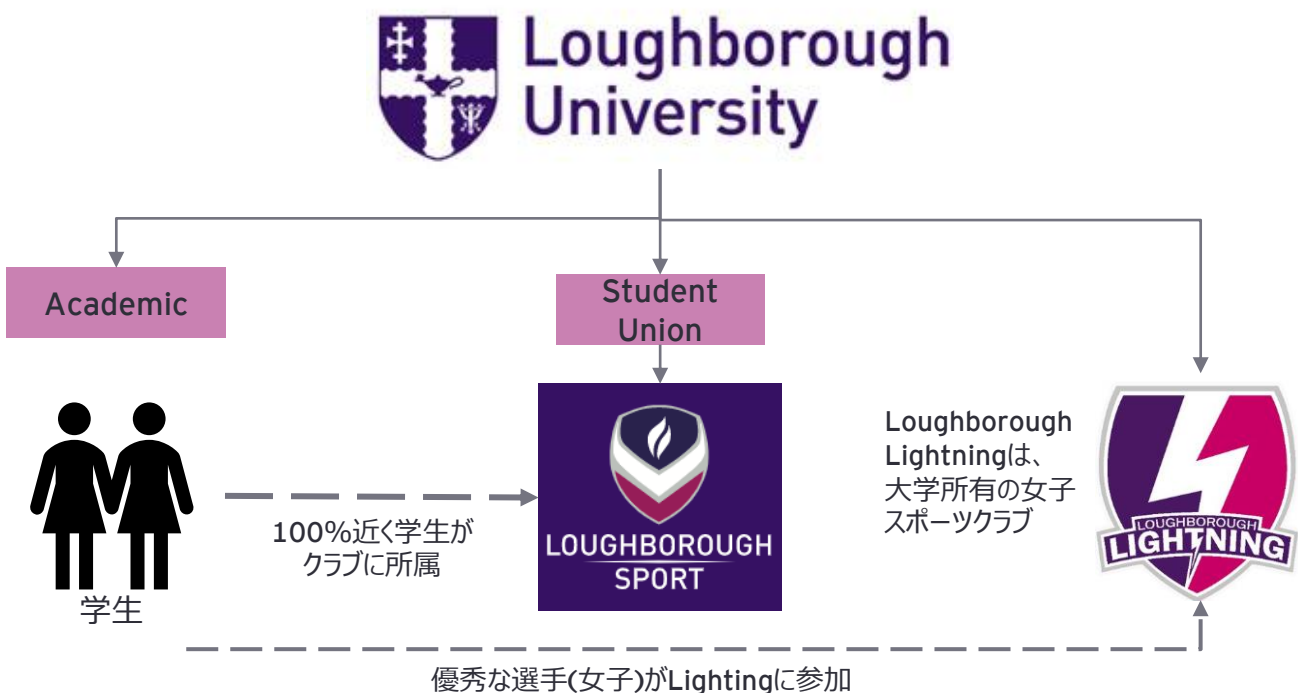
3.4

Loughborough大学(UK)にて
実施されているキャリアサポート

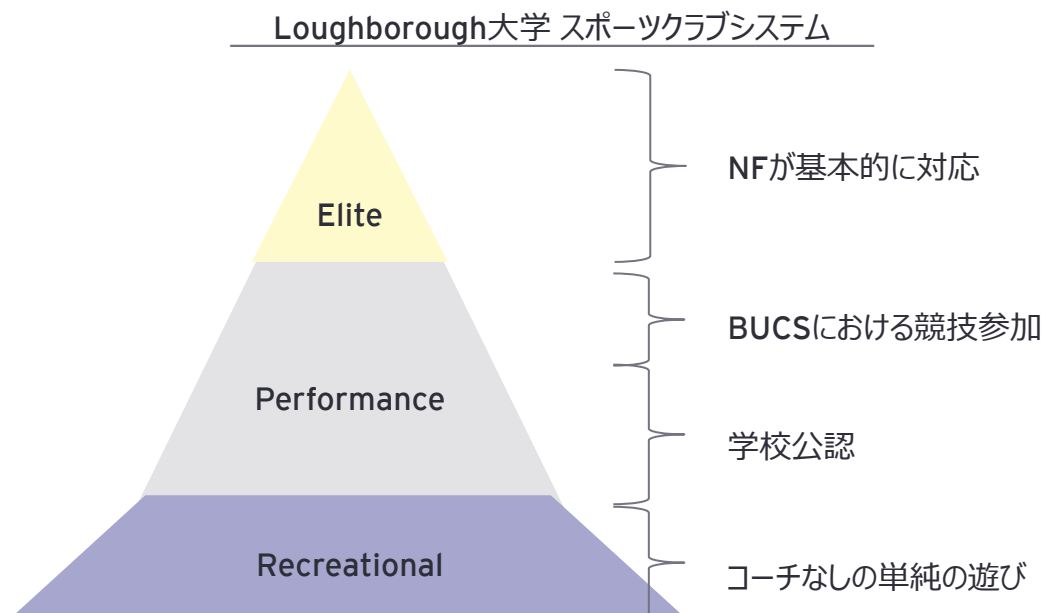
Loughborough大学における調査①

基本情報	<ul style="list-style-type: none">・学生は、5,000人近く在籍。 その中でもエリート(オリンピック選出に選出される可能性がある)選手は約800名在籍。 (パラアスリートも多く在籍)・60スポーツをサポート・UK全土で、毎週水曜日は、College Club Dayとなっており、学生がクラブ活動に取り組めるサポート・Loughborough Lightning(女性専用)というスポーツクラブも所有
競技情報	<ul style="list-style-type: none">・クラブは、3種類に分類<ol style="list-style-type: none">a. Recreationalb. Performancec. Elite・人気スポーツ(サッカー、ラグビー)については、Performanceだけで、8軍まで所在 ⇒基本的には、全チームLoughborough大学のチームとして認識。 2軍以下をAAUとして、分類されることがある ⇒1軍及び2軍がBUCSに参加 (2チーム以上の参加は、可能。競技によっては、1軍対2軍の決勝になることもある)・Eliteになると、基本的に大学にて管理される割合は少なく、NFの管理下になる ⇒クリケット、水泳等の13スポーツはラフバラ大学内に拠点を設けている ⇒基本的に、家賃、施設利用料の支払のみ。 大学側からは、施設及びEliteのみが利用できる時間枠が付与される・学校のチームに所属しながら、地域クラブにも所属し、競技を続けることも可能

Loughborough大学組織図



Loughborough大学における調査②



学業支援

- スポーツ推薦の制度は存在している
 - ⇒各スポーツのLead Coachが判断
 - ⇒奨学金は、Scholarship Committeeによって決定
 - ⇒通常の学生と同じAcademic Levelを要求される
 - もし数値が足りない場合は、Athleteとしての成績を多少考慮
- 学業との両立は難しいため、通常3年で卒業となるが、競技を優先させるために、学業の期間を延長することも可能
 - ⇒日本と異なり学費を、単位で支払うため、大学が許可している範囲で大学に残るパターンは多い
 - ⇒学生ローン会社も、金額が変わらないため、延長に関しては容認 (UK SportsやNFが学費を支払う場合もある)
- 学部が定まっていない学生アスリートに対しては、「Sports Elite Foundation」と呼ばれるコースを提供している
 - ⇒Loughborough大学にて単位取得可能なメジャーの授業を受講可能 (建築、医療関連等一部取得不可)
 - ⇒1年後に自分の取得した中から選択可能
- Assessment Flexibilityを提供。
 - ⇒全学部共通で、遠征などでテストや提出物を提出できない場合、期限延長が可能
 - ⇒コロナの影響により、オンラインにてテスト等を実施することが可能
- 学生アスリートの成績は常に監視している
 - ⇒2:1(Two-one, 上位から2つ目の成績、60%~69%)の取得が基準
 - ⇒出席率もモニターの候補になったが、成績重視

Loughborough大学における調査③

就職支援

- Performance Life Supportという部署があり、Elite学生(BUCSに参加)に対して、キャリアサポートを実施している
 - そこに属さない学生は、学校の通常のキャリア支援を受ける
- 部門の構成
 - a. 責任者 (1名)
 - b. 担当 (15名、元アスリートが多い)
 - c. 事務局員(2名)
- <主な業務>
 - キャリアサポート (Victor社と協業)
 - ⇒ Victor社が、アスリートの価値を把握し、上手く活用している企業を探し、マッチングさせている
 - ケガや脳震盪で競技を継続できなくなった選手へのサポート
- Eliteアスリートに関しては、状況が選手毎に異なり、一括に対応が出来ないため、個々の問題に適したサポートを実施している。
 - ⇒ 可能な限りに今後の方向性を確認したいので、大学に到着した初日に確認
 - ⇒ 1 on 1 meetingを年間3~4回実施し、過去からの違いなどを把握し、適切に対応している
- 約25%のEliteアスリートは、Sports Scienceをメジャー。基本的に学業との両立可能(建築、医学部等中ではNGなものもあり)
- インターンの実施は強要していない
- 取得する学位と仕事の繋がりは強い。ただ、Sports Scienceのように仕事自体が少ないものもある。その場合は、金融にいたり、不動産業に進むことが多い



3.5

INSEP(フランス)にて実施されている
キャリアサポート

INSEPにおける調査①

基本情報

- INSEPは、Institut national du sport, de l'expertise et de la performance(日本語訳:国立スポーツ体育研究所)の略である
- 学生は、13歳～18歳まで800人のエリートが滞在している。
基本的には、全寮制になっている。寮費、食費等は全てNFが支払う
- サッカーの様なお金があり、自分たちで独自のトレーニングセンターを構築できる場合は、INSEPではカバーしていない。(テニスは、元々カバーしていたが、現在はカバーしていない)
- 19スポーツを現在サポートしている(パリのオリンピック種目とし登録されるブレイクダンスもサポートに含まれている)
- 高校を卒業した後も、INSEPでトレーニングをすることは可能
⇒寮はないので、大学の寮に入り通うか、大学に行かない場合は、就職しその企業から資金的援助を受けながら続けるパターンが多い
⇒フランス大手企業でもトップアスリートに入社してもらうことはポジティブに考えている。基本的には、マーケティングツールとしているケースが多い
- アフガニスタンの選手や、自国で満足なトレーニングを実施できない選手の受入を行っている。選手によっては、フランス語のレッスンなども行い、フランス社会に適用するためのサポートを提供している
- 2024年に向けて、INSEPとして、多くのイベント等を開催し、国際的プレゼンスを高めようとしている



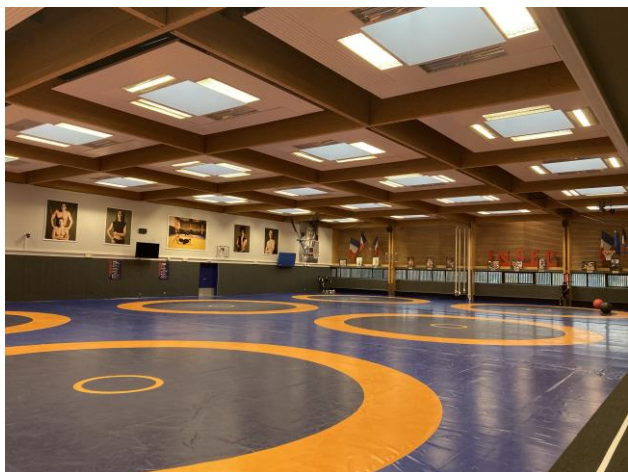
INSEPにおける調査②

学業支援

- ・スポーツ推薦のみで入学することが可能
⇒各NFが選出した選手のみが入学を許可
- <学生の基本的なスケジュール>
 - 午前 : 勉強
 - 昼食 (INSEP内カフェテリア)
 - ～15時 : トレーニング
 - ～18時 : 宿題
 - 夕飯 (INSEP内カフェテリア)
 - ～21時 : トレーニング
- ・トレーニングと学業の両立を効率的に実施するため、周辺にある高校とパートナーシップを締結し、INSEPにて授業を実施
- ・フランスにて大学入試試験を受けるための資格である、バカロレアは全INSEP卒業生は取得している
⇒高校中退率も高いフランスだが、INSEPでは、中退者を出していない
- ・INSEPでは遠征に参加してしまう学生アスリートに対して、下記取り組みを実施
 - a. オンラインクラス
 - b. テストのフレキシビリティ
 - c. バカロレアテスト⇒全国で同一のテスト日であるが、国際大会がある場合は、別日に受験することが法律にて保障されている
- ・成績が落ちてきている学生に対しては、Tutorを手配し、サポート。
ただ、成績低下の原因が、メンタルの可能性があるため、メンタルの部分も含めてサポート

就職支援

- ・INSEPでは、履歴書の記載方法など、サポートを提供している。多くの学生は、大学に行き、トレーニングを続けることを選択するが多いため、あまり多くの就職支援は実施していない
- ・卒業生の進路としては、メジャーな箇所は下記が多い
 - a. NF、スポーツエージェントなどのスポーツ関連
 - b. コーチ
 - c. テレビコメンテーター等のメディア関連
 - d. ファッションデザイナー



3.6

AIS(オーストラリア)にて実施されている
キャリアサポート

AISにおける調査①

<p>基本情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> • AISは、Australia Institute of Sportsの略。 • シドニーオリンピックの準備のために、建設された • 水泳、ジム、バスケットボール、ビーチバレーボールなどオーストラリアとしてメダルの取れる可能性が高いスポーツを10種目選択し、サポートしている • 150人のエリート学生アスリート(15歳～18歳)がAISに宿泊し、トレーニング(約4,000人のアスリートがトレーニングしている) 早朝にトレーニングし、その後学校にて授業。(AISの周辺大学や高校に参加) • スポーツ団体が、合宿を実施している
<p>学生アスリート</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 学生アスリートを5カテゴリーに分類。上位3分類をエリートとカテゴライズし、スポーツ団体と協力しながらサポート • 下位2分類のアスリートは、スポーツ団体と州が協力してサポート。(直接AISとして動くことは少ない。ただ、コミュニケーションルートはあり、情報共有等を実施) • 学業支援は特に実施していない(学費のみ)

アスリート分類分けについて

<p>Podium</p>	<p>オリンピック/パラリンピックやそれ同等の大会で、24か月以内にメダル取得したことがある選手。また、次大会でメダルを取れる可能性がある選手。</p>
<p>Podium Ready</p>	<p>オリンピック/パラリンピックやそれ同等の大会で、24か月以内に入賞したことがある選手。また、Podiumレベルに進んでいける選手。</p>
<p>Podium Potential</p>	<p>オリンピック/パラリンピックやそれ同等の大会で、入賞する可能性がある。</p>
<p>Developing</p>	<p>オーストラリア代表の候補生</p>
<p>Emerging</p>	<p>オーストラリア州代表の候補生</p>

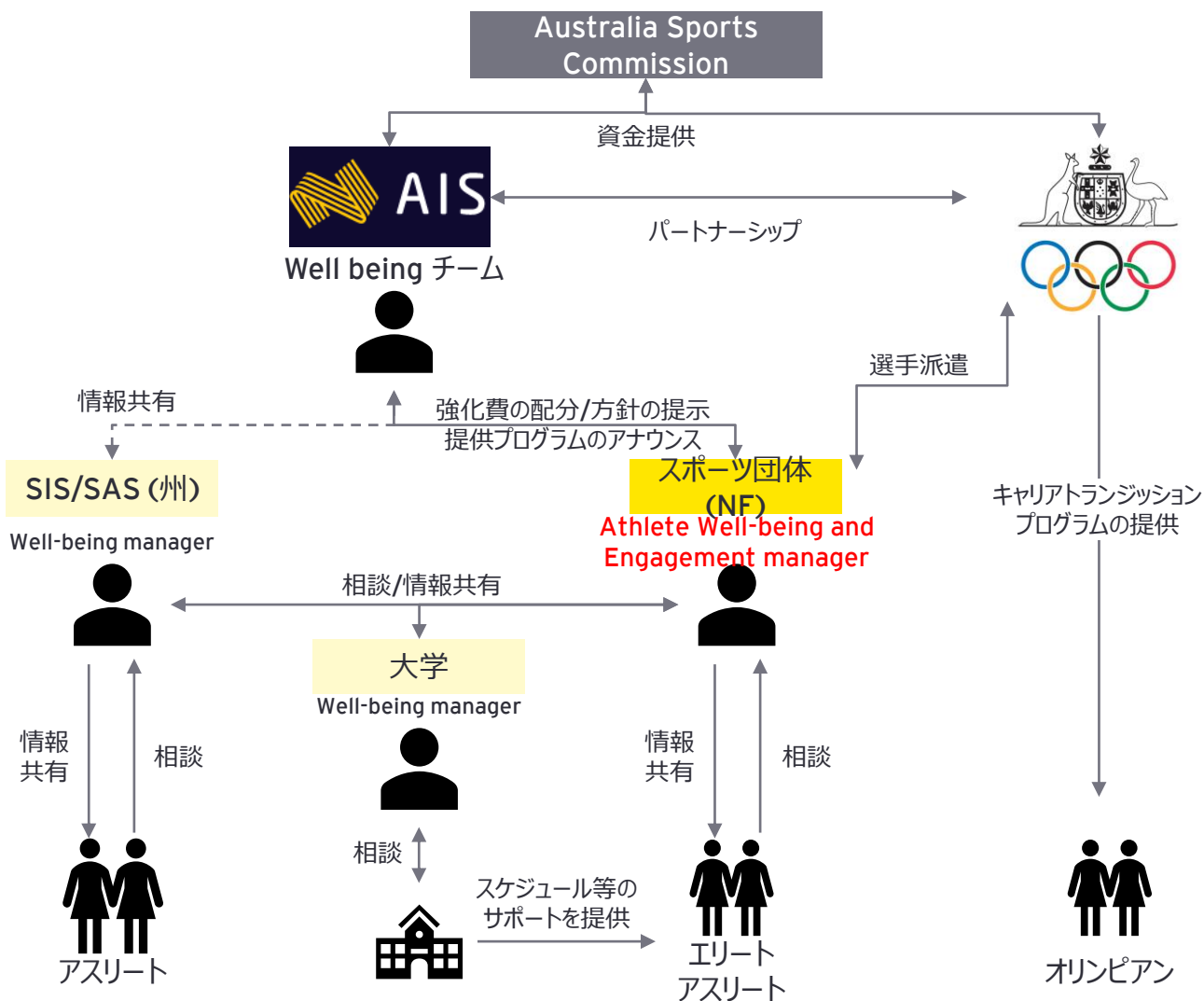


AISにおける調査②

Well-being

- 予算は、AUD6M～AUD10M(約5.2億円～ 約8.8億円、レート: AUD1=約88円)の幅になっている。15名のスタッフが在籍
- AISとして、各スポーツ団体に対して、Athlete Well-being and Engagement managerを採用するように指示
- 当初は、強化費の一部をWell-beingに向けて利用する用に使用制限。現在は、その制限は撤廃
- 因果関係は不明だが、リオオリンピックと東京オリンピックとメダル数を比較すると、強化費の総額に変更はないが、個数は増加。Well being が関係しているのではと推測している

オーストラリア アスリートサポート概略図



AISにおける調査③

AIS Well-beingチーム構成

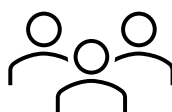


Well being チーム

目的: 2032年ブリスベンに向けてAISとして掲げた“Winning Well”の達成



Well-being Network



Mental Health



Community Engagement and Professional Development

役割	Athlete Well-being and Engagement Mangerとの連携	アスリート、コーチ、ハイパフォーマンススタッフに対するメンタルヘルスサポート	<ul style="list-style-type: none"> アスリートとコミュニティを繋ぐ機会の創出 キャリア支援
主な実施事項	<ul style="list-style-type: none"> Athlete Well-being and Engagement Mangerとの連携 	<ul style="list-style-type: none"> アスリート、コーチ、ハイパフォーマンススタッフからのリクエストに応じて、心理学者とのアポ取り 	<ul style="list-style-type: none"> Career Practitioner Referral Networkの運用 アスリートへのコミュニティイベントの周知 等 学費の提供

Wellbeing Networkに関する詳細情報

Athlete Well-being and Engagement manager	<ul style="list-style-type: none"> Athlete Well-being and Engagement managerは、カウンセラー、元選手、一般からの転職などバラエティーに富んでいる Well-being Managerには、下記4点を実施することを期待されている <ol style="list-style-type: none"> エリートアスリートからの要求や必要性の高い事象に対するサポート 調整事項が発生した際に対応できるように、関係機関との関係構築 ネットワークに所属する他マネージャーへの支援と知識の共有、重要な情報の共有 自分自身をケアし、ロールモデルであり続けること AISとして、NFがマネージャーを採用するプロセスに積極的に関与している マネージャーとの打合せを週1回設けており、良い事例の共有や、各NFが抱える相談を可能にしている Well-beingに向けた取り組みを中心に実施するキーパーソン。 エリートアスリートとのやり取りをメインにしているのはマネージャーなので、新プログラム設計、実施に際し、意見をもらう
Pinnacle Event	<ul style="list-style-type: none"> 2032年開催されるオリンピックに向けて、エリートアスリートに対するWell-beingとしてのサポート集をマネージャーと協力し、取り纏めている ⇒東京オリンピック時に、Well-beingのサポートを実施出来ていなかったことに、課題を感じ、マネージャーから自発的にイベントを実施することを決定

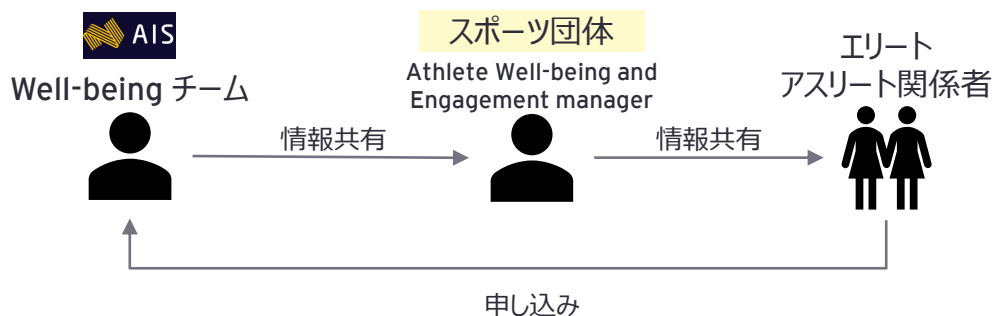
AISにおける調査④

Mental Healthの主な業務

Mental Health Referral Network

- **Mental Health Referral Network**は、エリートアスリート、コーチ、ハイパフォーマンススタッフ、家族、友人に提供されるプログラム。
(元々選手だけのプログラムだったが、コーチなどからの要望があり、対象範囲を広げた)
- AISと協力関係にある心理学者とアスリートを繋ぐ。オーストラリアでは通常、心理学者とのアポ取りに3か月ほど要するが、このプログラムを利用すると2週間以内に予約可能
- アスリートは最大年間18回のセッションを受けることが可能。何年でも治療を受けることが可能
- AISが構築したシステムに情報を入力し、進捗確認を実施(回数管理目的)。
- 予算は、AUD1M(8千万円、レート: AUD1=約88円)
- 2022年時点で、約850名の利用があった(コロナ発生後に利用が拡大)
- Athlete Well-being and Engagement managerを通じて、関係者に情報共有

< Mental Health Referral Network 情報共有フロー >



Community Engagement and Professional Developmentの主な業務

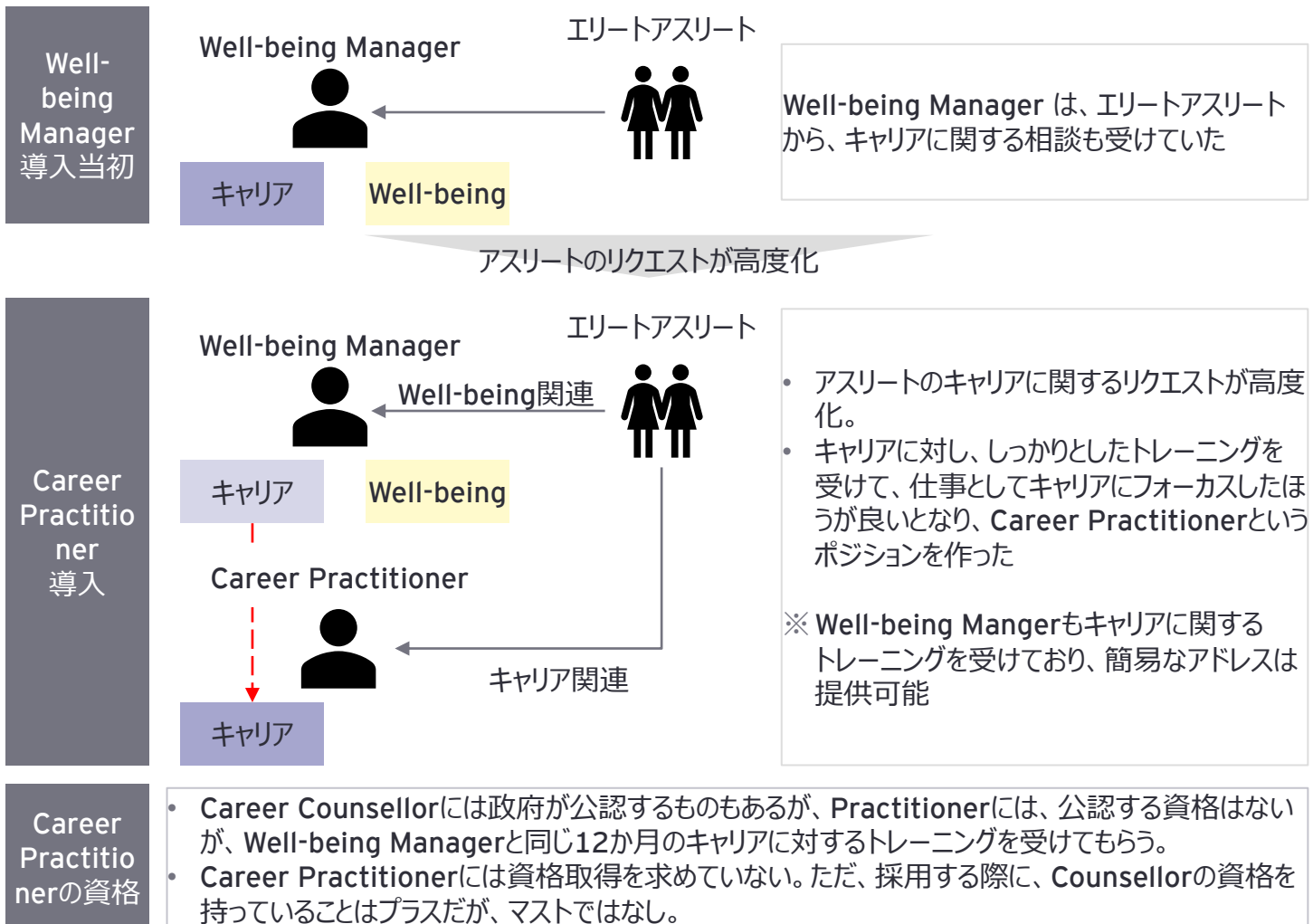
Career Practitioner Referral Network

- **Career Practitioner Referral Network**は、エリートアスリートに提供されているプログラム
- キャリアアドバイスを提供。履歴書の書き方から、引退後に必要となるスキルの特定など幅広くカバーしている
- **Career Practitioner**をAISが採用(現在8~10名)
- 採用時に、基本的なキャリア支援のスキルに加えて、スポーツへの理解があるかを重要視している。
- 年間250名ほどのエリートアスリートが活用。引退後の選手より現役中のアスリートが多く活用している
- マネージャーを通じてCPRMをエリートアスリートに共有するが、AISのHP、SNSを活用して多くのアスリートにリーチ出来るようにしている

AISにおける調査⑤

<p>コミュニティ イベント</p>	<ul style="list-style-type: none"> • NFと協力し、アスリートが参加できるコミュニティイベントの連携 • エリートアスリートからの要望は日に日に大きくなってきている。(参加回数などのKPIは設けていない) • コーチ、選手からは、重要性の理解を得られなかったが、時間が経つにつれて、理解が進み、積極的にコミュニティイベントに参加するようになった
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> • アスリートのWell-beingを確保するために、10個のプログラムを運営している <人気のプログラム> <ul style="list-style-type: none"> • Digital教育 • アスリートブランディング • Communication 教育 • Financial

Well-being Manager と Career Practitioner の違い



4. 有識者検討会議の 開催・ 決定事項

章	内容
第2章 国内におけるアスリートの 活動状況等に関する調査・ 分析	日本の大学に通う学生アスリートの学業成績、競技活動、就職状況の相関関係を調査し、分析結果を報告します。 1. 大学調査を実施した手法 2. 大学調査における調査結果 3. 各大学で実施されている取組事例 4. 国内学生アスリートの調査結果
第3章 諸外国におけるアスリートの キャリア形成の取組に関する 調査・分析	海外にて実施されているキャリア形成に係る支援について、調査し、分析結果を報告します。 1. アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報 2. NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート 3. NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート 4. Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート 5. INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート 6. AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート
第4章 有識者検討会議の開催・ 決定事項	今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方を有識者検討会議にて討議し方針を決定。その決定内容を報告します。 1. 有識者委員について 2. 有識者検討会議の決定事項
第5章 調査結果のまとめと提言	第2章から第4章までの調査結果をまとめて、今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方に関する取組につき提言します。 1. 調査結果のまとめ 2. 具体例
第6章 競技を引退したアスリートの 活動状況について	競技を引退しスポーツ界内外で活躍しているアスリートの取組を紹介します。 1. 事例集の目的 2. 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添 3. 引退したアスリートによりワークショップ実施内容・結果 4. 考察



4-1

有識者検討会議の委員について

有識者検討会議の役割及び委員

有識者検討会議の役割

今までのスポーツキャリアサポート支援事業の流れを活かしつつ、多角的な目線での調査実施、検証、新たなセカンドキャリアにおけるあり方の検討を推進するために、専門的な知見から、助言を提供する

日本におけるアスリートのキャリア形成について、学術的視点、アスリートの視点、ビジネス的視点から討議出来るよう、下記委員を選出

#	ジャンル	検討会委員	専門領域
1		高橋 義雄 氏 ★ 筑波大学 人間総合科学学術院 准教授	スポーツプロモーション、スポーツイベント領域を中心とした教育、研究に従事
2	大学教授	礒 繁雄 氏 早稲田大学スポーツ科学 学術院教授	コーチング科学・障がい者スポーツ指導員育成を専門。「WAP(早稲田アスリートプログラム)」を開始
3		東原 文郎 氏 京都先端科学大学 健康医療学部 准教授	学生アスリートの就職・キャリア形成、スポーツ産業学、スポーツ社会学、スポーツ文化論が専門
4	元オリンピック / プロアスリート	田中ウルヴェ京 氏 元シンクロ日本代表(五輪メダリスト) スポーツ心理学者	IOC国際オリンピック委員会マーケティング委員に就任。スポーツ庁スポーツ審議会委員。メンタルトレーナーとして指導を行っている
5		木村 雅人 氏 株式会社マイナビ アスリート キャリア事業室 室長	ビジネス界およびスポーツ界の人事(採用情報)に精通
6	ビジネス	岡田 真理 氏 NPO法人ベースボール・レジェンド・ファウンデーション 代表	スポーツと社会貢献の関係性や米国MLBなどの取組について精通

★ : 座長 ※ : オブザーバーとして、JOC, JSC, JICA, JFA, Bリーグ, UNIVAS, TL機構(計10名)が参加



高橋 義雄 座長



礒 繁雄 委員



岡田 真理 委員




木村 雅人 委員



田中 ウルヴェ京 委員



東原 文郎 委員



4-2

有識者検討会議の決定事項

第1回有識者検討会議

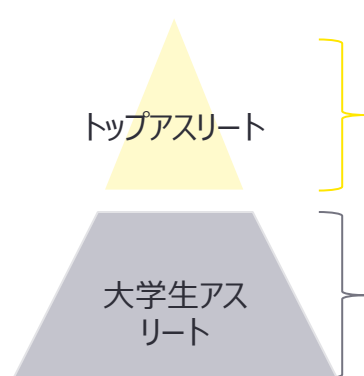
第1回有識者検討会議

開催日時	令和4年8月5日（金） 14:00～16:00
開催場所	Zoom会議、東京ミッドタウン日比谷
参加者	<p><有識者委員(6名)> ※敬称略、50音順 磯繁雄、岡田真理、木村雅人、高橋義雄、田中ウルヴェ 京、東原文郎</p> <p><オブザーバー(8名)> ※敬称略、50音順 荒瀬尚樹 (JSC)、池田敦司 (UNIVAS)、今村諒(JICA)、鈴木和馬(JOC)、 田口禎則(TL機構)、中村裕樹(JOC)、伴泰子 (UNIVAS)、松木知恵子 (JSC)</p>
議題	今年度の調査範囲について
決定事項	<p><海外></p> <ul style="list-style-type: none"> 調査対象については合意 <p><国内></p> <ul style="list-style-type: none"> 調査の方向性について
宿題事項	<p><海外></p> <ul style="list-style-type: none"> 北欧(特にスウェーデン)にて実施しているキャリア支援について調査 (詳細次ページ)

海外調査

国内調査

調査国：アメリカ、UK、オーストラリア、フランスの
4カ国に決定
(選定詳細:海外調査ページ)



トップアスリートに
対する支援

代表例：INSEP, AIS

加盟団体(大学)に
対する支援

代表例：アメリカ
(NCAA)、UK

<調査大学>
A大学、B大学、C大学、D大学、E大学、F大学、
H大学、I大学、J大学、K大学、

<調査対象>

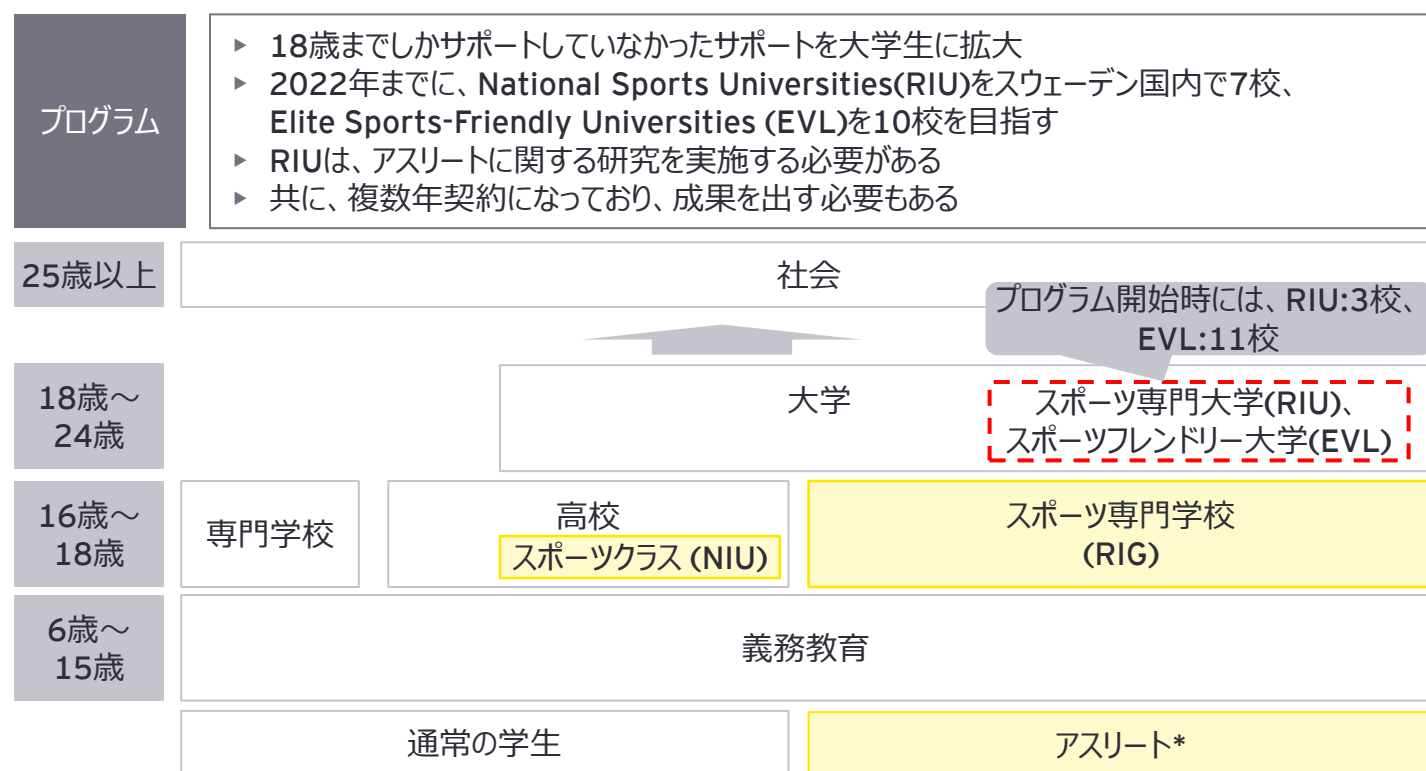
個人競技：陸上、水泳、バドミントン、テニス、柔道
 団体競技：野球、サッカー、バスケットボール、
 バレーボール、ラクロス

第1回有識者検討会議の宿題事項 (スウェーデンのアスリートキャリア支援に関するリサーチ)

Swedish Dual Career Model (1965年～)



Swedish Dual Career Model(2015年～)



* : NFが指定する今後国際レベルの大会で競争する可能性があるアスリート/既に競争し、引き続き競争する可能性のあるアスリート。スポーツ専門学校/大学に行くのは、本人の意思による。必ず入学する必要はない
 参照 : Swdish Sports Confederation (Swedish National Guidelines for elite athletes's dual Career)

第2回有識者検討会議前

Lavelle教授との事前ヒアリング

ヨーロッパ調査国内の調査対象を特定するために、アスリートのキャリア研究の第一人者である、Lavelle教授と第2回有識者検討会議前にヒアリングを実施。

ヒアリング確認項目

1. UKでの調査機関について
2. 日本にとって参考となりうる国について
 1. UKでの調査機関について



Lavelle教授

・UK オリンピック委員会による学生アスリートに対するキャリアに関する支援は限定的である。しかし、Delivery siteである大学では多くのキャリア支援を実施している。
 ・特にLoughborough大学は、キャリア支援の中心となっているので、必ず訪問するべきである。
 ・BUCSなどでNCAAの様な学業成績による基準を設けられていたが、うまく機能せず、現在は基準は撤廃されている

2. 日本にとって参考となりうる国について

- ・スコットランドの施策は参考になると思う
- ・日本の大学数とスコットランドの大学数が異なるが、エリートアスリートを受け入れるためには、賛同が必要等という形をとることによって、合意を取ることが可能と推測する。



Lavelle教授

導入背景

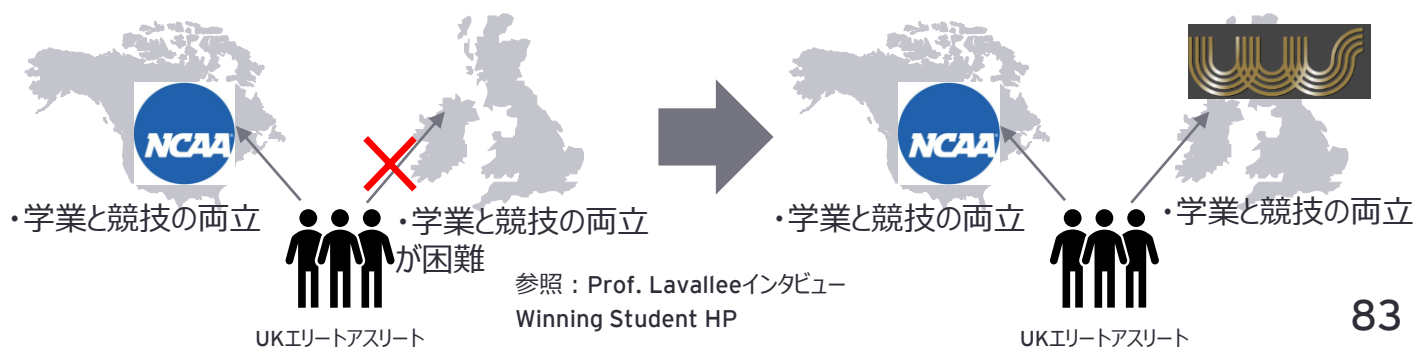
- ▶ スコットランドを始めとするヨーロッパの大学生が、アメリカにわたり、学業と競技の両立を実施しており、ヨーロッパに残って活躍するトップアスリートが、減少していた
- ▶ スコットランドでは、2014年にグラスゴーにて、Commonwealth大会の主催をすることが決定
- ▶ その大会でのチームパフォーマンスをよくする為に、優秀なアスリートにスコットランドに残ってもらう必要があった
- ▶ Prof. Davis Lavelle氏を始めとする有識者の方は、学生アスリートが学業を継続する上で、“Flexibility”が必要と認識
- ▶ Flexibilityをスコットランドにある大学に導入し、優秀なアスリートを残すために、Winning Studentを開始

Winning Student

- ▶ 世界大会などにより、課題の提出や、授業参加等学校として決まっている日程に対応できないエリートアスリートに対するプログラム。
- ▶ エリートアスリートの競技都合に併せるFlexibilityさを持つことがプログラムの特徴
- ▶ スコットランドにある約20近い全大学が合意の基、2009年に導入された奨学金制度。元々4年間の限定プログラムであったが、結果が良かったため、2018年までプログラムを延長
- ▶ £ 6,000/年の奨学金をエリートアスリートに供給。8年間で、約1,000人のエリートアスリートに奨学金を供給
- ▶ 費用は、スコットランド政府から拠出される
- ▶ 1年毎に更新するため、課題提出等の学業パフォーマンスと競技パフォーマンスの両立が求められる

Winning Student プログラム導入前

Winning Student プログラム導入後



第2回有識者検討会議

第2回有識者検討会議

開催日時	令和4年10月12日（水） 16:30～19:00
開催場所	Zoom会議、文部科学省16階第三会議室
参加者	<p><有識者委員(6名)> ※敬称略、50音順 磯繁雄、岡田真理、木村雅人、高橋義雄、田中ウルヴェ 京、束原文郎</p> <p><オブザーバー(8名)> ※敬称略、50音順 荒瀬尚樹 (JSC)、岡田優介(アルティリー千葉)、今村諒(JICA)、鈴木和馬(JOC)、 田口禎則(TL機構)、中村裕樹(JOC)、松木知恵子 (JSC)、宮本恒靖(JFA)</p>
議題	<p><海外></p> <ul style="list-style-type: none"> 出張先について <p><国内></p> <ul style="list-style-type: none"> 事例集の方向性について 現状調査の中間報告について
決定事項	<p><海外></p> <ul style="list-style-type: none"> 提案された海外調査を実施することに合意 (スウェーデンについては、日本と協議環境等のバックグラウンドに違いが多いため対象外とする) <p><国内></p> <ul style="list-style-type: none"> 事例集の方向性

海外調査

国内調査

#	深堀調査 実施国名	訪問先	事例集 作成の目的	事例集 対象者
1	アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> Boise State大学 University of Southern California 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 現役アスリートが自身の競技引退後 を考えた際に、目指すモデルが少ない、 わからないという課題がある。 ◆ レベルを問わず、多くのアスリートに向 けて、自身のキャリアの選択肢を広げ られるための事例集を作成する。 	<p>対象：プロ選手、オリンピック等の国際 大会に出場経験がある、かつ自身のス ポーツでの経験や養った能力を今の仕事 に生かしている人</p> <p>事例集掲載人数:約10人</p> <p>事例集比率：引退後スポーツ界、引退 後スポーツ界外：4:6</p> <p>対象年代：20代～40代</p>
2	UK	Loughborough大学/ Coventry大学		
3	フランス	・INSEP		
4	オーストラリア	<ul style="list-style-type: none"> ASC AIS Uni sport 		

第3回有識者検討会議

第3回有識者検討会議

開催日時	令和5年2月7日（火） 15:00～17:00
開催場所	Zoom会議、文部科学省16階第三会議室
参加者	<有識者委員(6名)> ※敬称略、50音順 磯繁雄、岡田真理、木村雅人、高橋義雄、田中ウルヴェ 京、東原文郎 <オブザーバー(7名)> ※敬称略、50音順 池田敦司 (UNIVAS)、岡田優介(アルティリー千葉)、今村諒(JICA)、鈴木和馬(JOC)、 中村裕樹(JOC)、伴泰子 (UNIVAS) 、松木知恵子 (JSC)
議題	<海外> ・ 海外出張における発見事項 <国内> ・ 大学調査の報告 ・ 学生アスリート調査の報告 ・ 事例集ヒアリング結果についての報告
決定事項	・ 事務局が作成した政策(案)に対するコメントを委員が共有する ・ 共有されたコメントを事務局が政策(案)に反映し、報告書に記載する

5. 調査結果のまとめとアクション

章	内容
第2章 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析	日本の大学に通う学生アスリートの学業成績、競技活動、就職状況の相関関係を調査し、分析結果を報告します。 1. 大学調査を実施した手法 2. 大学調査における調査結果 3. 各大学で実施されている取組事例 4. 国内学生アスリートの調査結果
第3章 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析	海外にて実施されているキャリア形成に係る支援について、調査し、分析結果を報告します。 1. アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報 2. NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート 3. NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート 4. Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート 5. INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート 6. AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート
第4章 有識者検討会議の開催・決定事項	今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方を有識者検討会議にて討議し方針を決定。その決定内容を報告します。 1. 有識者委員について 2. 有識者検討会議の決定事項
第5章 調査結果のまとめと提言	第2章から第4章までの調査結果をまとめて、今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方に関する取組につき提言します。 1. 調査結果のまとめ 2. 具体例
第6章 競技を引退したアスリートの活動状況について	競技を引退しスポーツ界内外で活躍しているアスリートの取組を紹介します。 1. 事例集の目的 2. 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添 3. 引退したアスリートによりワークショップ実施内容・結果 4. 考察



5.1 調査結果のまとめ

調査結果に対する総論

当事業は、アスリートが競技外のキャリアにおいてスポーツで培った能力を社会に発揮し、活躍するためにどのような施策を検討すべきか、また、元アスリートがスポーツの価値を高め、スポーツ参画人口の拡大、ひいては競技力の向上にも寄与していくには、どのようなことから始めていくべきかを検討してきた。

1つ目に、トップアスリートが引退に至る経緯、引退後の悩みをヒアリングし、アスリートが引退後に陥る課題やそれら課題をどのように乗り越えて解決してきたか、どのようなきっかけがあったのかを10名の方からインタビューを実施し、事例集として取りまとめた。**多くのトップアスリートは、引退後のキャリアについて、想像する機会が無かったり、他競技の選手との情報交換も少ない**という。当事例集は、引退後において、多くのトップアスリートが抱える悩みをどのように乗り越え、どのような視点で次のステージに向かっていくべきかのヒントとなる。また、インタビューをした元トップアスリートが語る共通点としては、**スポーツをトップレベルまで実施したスキルや経験が、今の仕事ややりたいこと、活躍に大きく意味があった**としている。例えば、**目標設定後のプロセスを意識した行動力ややり抜く力、タイムマネジメント能力の高さ、自分のできることや良いところを理解して言語化する認識力や修正能力といった点は、非常に高い**という。これらの能力は、特にVUCA（Volatility：変動性、不安定さ、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）の時代である今こそ、求められる能力であると言えるのではないかと。

2つ目に、トップアスリートを輩出する大学組織がどのような認識で学生アスリートに接しているか、また、学生アスリート自身は、どのような考えを持っているかを把握するためにインタビューおよびアンケートを実施した。有識者会議の委員である東原委員の言葉を借りれば、「体育会系神話の揺らぎ」と言われるように、労働市場で有利であった学生アスリートの時代は終わりつつあるにも関わらず、学生アスリートが、私立大学を中心に多くなってきている現状があるという。これらは**入学難易度が低い私立大学において、スポーツ推薦入学の割合が多くなっている**というデータがあることや、学生側の視点から見た場合、就職活動において一般学生との差別化戦略として、体育会系であることは、同じ大学であれば、有利になるものと考えている傾向が高い。当事業における学生アスリートの841名からの回答では、5割以上がスポーツ推薦入学と回答があることから、スポーツ推薦入学後の学生アスリートの現状を把握することができる。総じて、現在の学生アスリートは、3つの点について課題があることが見えてきた。1. 練習時間・部活動時間の長さによる学業との両立の難しさ、2. 競技引退後の認識不足、3. メンタル的なサポートの必要性 である。

学生アスリートにおける課題の1つ目は、練習時間・部活動の長さである。1日の練習時間が2時間～4時間未満が全体の2/3程度となっているが、特質すべき点として、4時間～5時間以上の割合が20%以上との回答となっている。この結果だけを見ても、日々の練習時間が多いことが明確となるが、インタビュー時において、部活の練習だけではなく、練習の準備や跡片付けなどの拘束時間を考慮すると、更に練習時間の1割程度は時間がかかっているという話があった。このことから、**練習後に勉強する時間や社会的コミュニティを形成する時間を意識的に取るということは、難しいことが想像できる**。2つ目は、競技引退後の認識不足とは、**スポーツ推薦入学した学生アスリートの傾向として、一般入試で入った学生アスリートに比べGPAに対する意識の低さおよび卒業後の競技の継続希望から垣間見える**。「GPAを意識している」と回答した一般入試の学生は47%に対し、スポーツ推薦入学者は35%であった。

調査結果に対する総論


また、卒業後の競技に対する考え方として、「プロや実業団として競技を続けたい」と考える割合を比較すると、一般入試の学生は12%に対し、スポーツ推薦入学者は33%と3倍近くあり、プロや実業団で継続できると言われる多くても3%未満（2020年にJリーグ選手となった人数が114名。JFA 1種大学連盟の人数が19,042名のうち、4年生はその2割と仮定）と比較しても大きな乖離があることから、**スポーツ推薦入学者に対する卒業後に向けた準備が不足している可能性が高い**と言える。3つ目としては、メンタル的なサポートの必要性については、**大学で競技成績が伸び悩む人が多いことや上記のように練習時間が多いことから精神的な支えが必要との声があり、コーチ、監督ではなく専門的なカウンセラーが必要**ではないかと考えられる。なお、大学側については、大会や競技を継続的に実施するうえでの学業成績要件を設けているところや、メンタルケア専門の人（一般学生も利用可能）が在籍しているなど、卒業後の学生キャリアを見越した支援の充実を図っている大学も出てきている。これは、GPAを就職時に確認する会社が増えてきていることも一因であると同時に、今までの就職支援だけではなく、学生期間中の学業支援や競技以外でのコミュニティ支援等を大学のアピールポイントとして充実させている大学も出てきている。**一部の大学では、GPAの平均値が一般学生より学生アスリートの方が高いと答えているところもあるなど、スポーツを続けていることが将来のキャリアに良い影響を与えるものとして、スポーツを続けることを推奨している場合もある**。好事例としては、立命館大学が一例となるだろう。立命館大学は、「立命館スポーツ宣言」において、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもった人間の育成」を掲げ、地域社会のコミュニティづくりに貢献することなど、スポーツの持つ価値を重要視している。運動部活動に所属する学生アスリートに対し、学業成績要件を設けており、大会出場等の一部制限を課していると同時に、学業ガイドラインに基づく学習支援や面談、スポーツ推薦者に対する入学前からの教育支援など、フォローアップの充実を進めている。また、メンタルケア専門家が在籍していることや、2023年からは「指導者評価制度」の運用を予定しているなど、学生アスリートが安心してスポーツおよび学業ができる環境を整えている。これらの例を踏まえ、**スポーツ推薦入学者が、自らのキャリアを考える機会を作れる場や考えさせる指導者が重要視されるべきであり、トップアスリートを目指して鍛錬してきた学生が社会で活かすためのきっかけ作りや認識向上施策は必須**と考えられる。

最後に、海外のキャリア支援について考察する。我々が今回調査したNCAAおよびNCAAに加盟している大学（アメリカ）、Loughborough大学（UK）、INSEP（フランス：国立スポーツ体育研究所）、AIS（オーストラリア：国立スポーツ研究所）のキャリア支援について共通的に言えることとしては、日本より支援が優れていると言えるのではないかと。学生アスリートの学業成績が落ちてきているかどうかを管理することは当然で、落ち始めるとチューターと言われるサポート要員が学業に対する支援やメンタル的な部分をサポートするなどを実施している。これらは、**学生アスリートを複数のカテゴリーに分類し、上位のみサポートする方法（国によってサポートの方法が違う）がとられている。支援範囲を限定したうえで、それぞれの機関でできる最適な方法を検討し、実行しているもの**と考えられる。日本では、部活動そのものは誰でも入れることが多く、その後の明確な区分け（競技力やカテゴリーによる違い）等はあまりなく、そのまま学生アスリートを継続していることが多く、学生アスリートの支援対象範囲を考えると人数含め広くなってしまい、結果、議論が進んでいないように思われる。海外では、特定のエリート層に対する手厚い支援を行うために人数制限や部活内の区分けを明確にしているなど、すべてを比較できるわけではないが、多くの点で工夫している点は参考にできるものと考えられる。

次ページ以降は、上記を踏まえ、今後の提言案をまとめたものである。

R4年度調査結果より、抽出された特筆すべきキャリアトランジションの課題

	課題	本年度の調査事業	調査から抽出された問題点 (解決すべき点)
1	大学の学生アスリートは競技大会も多く、競技に専念する傾向にあり、スポーツ以外との繋がりを持てていない	大学生アンケート調査	練習時間が多く、競技とそれ以外(学業、就職活動等)との両立が難しい
		事例集	競技に関わるコミュニティ以外での関係が薄く、自らの引退後またはそれ以降の人生について考える機会がない
		有識者会議	社会が認めている元学生アスリートがスポーツを通じて得た能力と学生アスリートが考えるスポーツを通じて得たと思っている能力に乖離がある
2	指導者から、「競技が第一であり、競技に集中することが良い競技結果に繋がる」という教育を受けたと認識しているアスリートが多い	大学調査	大学と指導者が直接契約をしていることが稀で、大学から指導方法等に指示を出せる関係でない
		大学生アンケート調査	指導者が学業や就職活動に対し、理解がないという回答が散見
		有識者会議	指導方法によって、選手が学ぶ能力に差が出ている可能性あり
3	日本では現役アスリートに競技だけに集中するハード環境を整えていることが多く、就職に対するプレッシャーや、競技に対するプレッシャーなどの精神面を支えるソフト環境が整っていない	有識者会議	競技に対するプレッシャーから、年間数名の学生アスリートが精神的病気にかかってしまう
		大学生アンケート	
		海外調査/国内調査	各国において競技力向上のためにも、メンタルサポートの必要性を重要視し、環境を整えているが、日本では整えられていない



5.2 具体例

課題&対応可能なAction①

課題	大学の学生アスリートは競技大会も多く、競技に専念する傾向にあり、スポーツ以外との繋がりを持てていない
----	--

調査から抽出された問題点

1

競技に拘束される時間が長く、学業やキャリアに向き合う時間が取れていない
 学生アスリートへ1日の練習時間及び勉強時間の平均時間を調査。3時間以上の練習と回答した学生が5割以上、4時間以上が2割である。一方で1日の勉強時間については、1時間未満の学生が7割である。
 その他にも、「競技に時間を使いすぎて他のことが疎かになってしまう」「大学で競技をやめるのに、将来のことよりも今だけのために時間を使い、よりよい進路を考えられていない」等、学生のアンケート結果から、競技で養った能力をどうやって社会へ活かせるのかを考え切れていない傾向がある。

2

競技以外のコミュニティとの関係が薄く、引退後またはそれ以降の人生についての情報が不足している
 引退したアスリートへのインタビューにおいて、過去にしておけばよかったことの質問に対し、「競技以外のコミュニティとのネットワーク構築」「税金などの社会に関連する勉強しておけばよかった」「他競技の引退後のキャリアなどに興味・関心を持っておけばよかった」等の意見が多くあった。
 また、有識者会議では、「社会が認めている元学生アスリートがスポーツを通じて得た能力と学生アスリートが考えるスポーツを通じて得たと思っている能力に乖離がある」と委員から発表があった通り、学生アスリートが、自分たちの強みを比較対象が少ないため把握しておらず、一般的に言われているコミュニケーション能力などによせている。

目指す姿

運動部活動に所属している学生が、社会に出たときの理想像(ありたい姿)を描けるようなプログラムの整備

ACTION

学生が自ら積極的に参加できる“人材育成プログラム”を大学内の運動部活動を管理している部門に導入する

人材育成プログラム

プログラム参加への時間創出

練習時間管理プログラムの作成

NCAAに加入している大学では、練習時間や授業のスケジュールを管理するアプリケーションを導入し、競技と学業やキャリアに向かう時間を両立させている。現状日本では、向き合う時間を取れている学生が少ないため、練習時間、授業スケジュールを管理する仕組みを導入し、学業やキャリアに向き合う時間を創出する

<日本における実施(案)>

- 練習時間に上制限限
- 大学の授業のスケジュールおよび練習時間の管理が出来るアプリケーションの導入(=空き時間を事前に把握できるようにする)

社会との繋がり増加

ボランティア・地域貢献プログラムの導入

アメリカやUKでは、大学と指導者が直接雇用契約を締結しているため、学生アスリートのキャリア、就職活動の時間を学校が指導者に指示し生み出すことが可能である。しかし日本では、直接契約を締結していないパターンが多く、学生アスリートのキャリアなどの時間を創出しにくい。

地域住民やスポーツを支えるスポンサー等と学校主催の交流プログラムを創出することにより、競技以外の交流が増え、学生アスリートにスポーツ以外のコネクションを創出し、視野を広げることが期待される

<日本における実施事項>

- 地域の子供たちへの運動教室の開催

課題&対応可能なAction②

課題	指導者から、「競技が第一であり、競技に集中することが良い結果に繋がる」という教育を受けたと認識しているアスリートが多い
-----------	---

調査から抽出された問題点

1

大学と指導者が直接契約をしていることが稀で、大学から指導方法等に指示を出せる関係でない

大学の調査において、運動部活動の指導者と雇用契約を締結している大学は11校中1校であり、各運動部活動が独自で雇用している指導者の情報について全て把握している大学は11校中5校であったことや有識者会議から学校と指導者が雇用契約を結んでいるケースは稀である。

2

指導者が学業や就職活動に対し、理解のないという回答が散見/指導方法によって、選手が学ぶ能力に差が出ている可能性あり

大学職員以外の外部指導者(監督、コーチ等)に対する定期的な「指導者研修」を実施している学校は11校中9校という結果であったが、全ての大学で任意参加とされており、指導者の指導に対する意識や知識にばらつきがあると推測される。

目指す姿

- ・指導者との雇用契約を締結し、指導者へ直接指示が出せる環境にする
- ・指導者が最新の指導法(学業やキャリアに対する指導含む)を学ぶ環境構築

ACTION

部活動の指導者が、最新の指導法、他部好事例、大学からの連絡事項を得る機会を創出する

人材育成プログラム

指導者の理解拡大

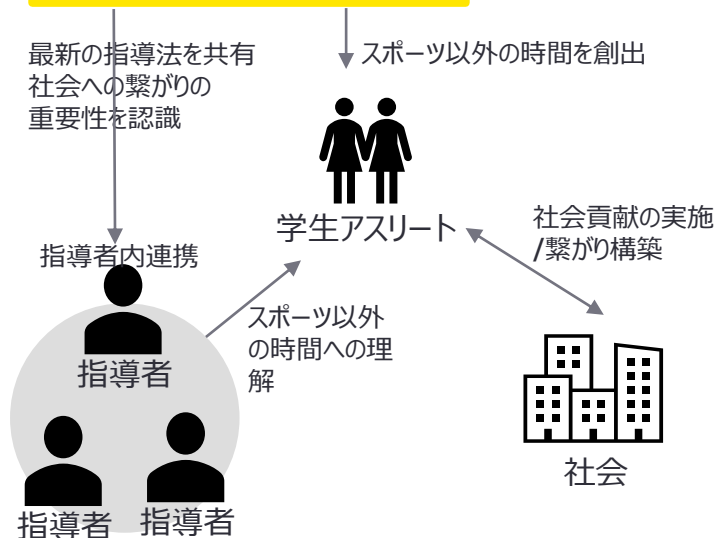
指導者研修の充実

国内の大学において、指導者研修が実施されているものの、任意の参加であることが多い。また、実施回数も大学により様々であるため、指導者の情報や知識に差が出てしまっている。一方海外では、

- ・ 参加必須の指導者研修の実施
- ・ 指導者に、選手のキャリアの重要性を認識してもらう為、JSPOやNFにて実施している指導者研修のプログラムの中に、キャリア支援に関する内容を追加

人材育成プログラム

- ・ 最新の指導法を共有
- ・ 社会への繋がり的重要性を認識



課題&対応可能なAction③

課題	日本では現役アスリートに競技だけに集中するハード環境を整えていることが多く、就職に対するプレッシャーや、競技に対するプレッシャーなどの精神面を支えるソフト環境が整っていない。 (引退した選手もアイデンティティの喪失などに陥り、精神面で支える環境がない)
----	---

調査から抽出された問題点

1

競技に対するプレッシャーから、年間数名の学生アスリートが精神的病気にかかってしまう
「限られた時間の中で競技・学業・就職活動をする為、精神的な負担が大きい」と回答する学生もいた。インタビューした指導者から、年間数名の学生は、精神的な病気にかかり、休学すると指摘があった。また、有識者会議にて、スポーツ心理学や精神学の専門知識に関する研究が諸外国と比較して遅れているという指摘あり。

2

各国において競技力向上のために、メンタルサポートの必要性を重要視し、環境を整えている
日本は、調査した他4カ国と比較すると、アスリートに対する精神面のサポートが少ない。

目指す姿

アスリートが競技に集中するために、メンタル等のソフト面のサポートをするWell-being Managerを大学生アスリートがアクセスできる環境を整備する



ACTION

Well-being Managerの導入(案) :

UNIVASには、約220校近い大学(短大含む)が加盟している。その組織に、Well-being Managerを導入する。精神的不安、職業に関する不安など、アスリートがWell-beingでいられるようにサポートをする
(キャリアについては、組織内に担当者がおり、それぞれの担当者と綿密にやり取りする)

費用:UNIVASが主催となる大会を創設し、そこで得た資金を活用する。

- 今後、コーチやスタッフ等へ展開を実施していくと想定し、大学にWell-being Managerを設置するよりも、UNIVASの方がより効果的と判断

※ 大学内に同様のポジションを設置することを検討したが、学生アスリートとして学校に弱みを見せることを躊躇すると想定し、上位団体であるUNIVASに導入する

6. 競技を引退したアスリートの活動状況について

章	内容
第2章 国内におけるアスリートの活動状況等に関する調査・分析	日本の大学に通う学生アスリートの学業成績、競技活動、就職状況の相関関係を調査し、分析結果を報告します。 1. 大学調査を実施した手法 2. 大学調査における調査結果 3. 各大学で実施されている取組事例 4. 国内学生アスリートの調査結果
第3章 諸外国におけるアスリートのキャリア形成の取組に関する調査・分析	海外にて実施されているキャリア形成に係る支援について、調査し、分析結果を報告します。 1. アメリカ、UK、フランス、オーストラリアを選定した理由及び基本情報 2. NCAA(アメリカ)にて実施されているキャリアサポート 3. NCAA加盟大学にて実施されているキャリアサポート 4. Loughborough大学(UK)にて実施されているキャリアサポート 5. INSEP(フランス)にて実施されているキャリアサポート 6. AIS(オーストラリア)にて実施されているキャリアサポート
第4章 有識者検討会議の開催・決定事項	今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方を有識者検討会議にて討議し方針を決定。その決定内容を報告します。 1. 有識者委員について 2. 有識者検討会議の決定事項
第5章 調査結果のまとめと提言	第2章から第4章までの調査結果をまとめて、今後のアスリートの効果的なキャリア形成支援のあり方に関する取組につき提言します。 1. 調査結果のまとめ 2. 具体例
第6章 競技を引退したアスリートの活動状況について	競技を引退しスポーツ界内外で活躍しているアスリートの取組を紹介します。 1. 事例集の目的 2. 主な質問項目及びインタビュー者一覧※内容は別添 3. 引退したアスリートによるワークショップ実施内容・結果 4. 考察



6.1 事例集の目的

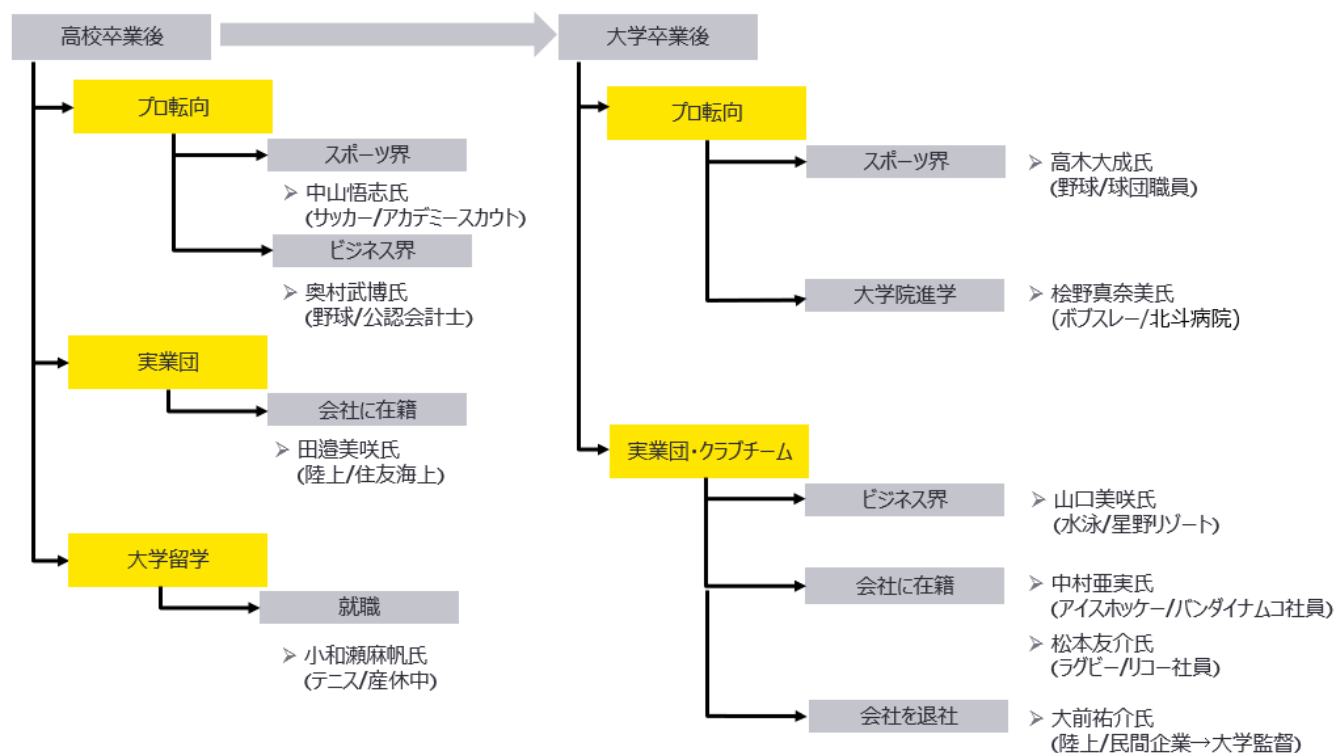
様々な引退後のキャリアを掲載することで、現役アスリートやジュニア世代のアスリートに対しロールモデルを提示するだけでなく、選択肢の幅を増やす

◆目的

- 東京2020大会を終え、多くのアスリートがキャリア移行期を迎える中で、アスリートのキャリア形成支援のより一層の充実を図ることが必要とされている。
- 競技を引退後、スポーツ界内外でどのようなキャリアを歩んでいるか、どのようなキャリアトランジションの困難があったかの情報がまとまっていて示されているものが少ない。JOCや一部民間企業でインタビュー等の情報を提供しているサイトがあるものの、NCAAのようにOB・OGからの情報が豊富に集まっているものが必要。
- 引退後のアスリートのキャリアトランジションの課題のひとつとして、「スポーツしかできない」「スポーツ以外のことをしてきていない」と思い、社会に出ることに対して怖れを感じる選手が多いことが挙げられる。
- 本調査では、引退後のキャリア形成に関する様々な事例等を調査し、「スポーツで培った能力がどう社会で活かしているのか」について発信することで、現役アスリートやジュニア世代のアスリートに対しロールモデルを提示するだけでなく、選択肢の幅を増やす事例集とすることを目的としている。

◆検討手法

- 高校卒業後、大学卒業時にどのようなキャリアの選択をしたのか、「スポーツで培った能力」を引退後のキャリアに活かすことができている、と感じているアスリート計10名にヒアリング調査を実施。



6.2

主な質問項目及びインタビュー者一覧

※内容は別紙参照

引退したアスリートへの主な質問項目

◆主な質問項目

#	項目	質問事項
1	競技について	競技を始めたきっかけ
2	進路	進学した高校または大学を選択した理由
3	進路	その後の進路については、いつ頃から考え始めていたか（きっかけ）
4	キャリア	自身が選択したキャリア以外の選択肢はあったか
5	現役時代 ※現役中も仕事をしていた人のみ	現役時代の仕事、練習、大会時のスケジュールについて
6	現役時代 ※現役中も仕事をしていた人のみ	仕事と競技を両立させることは大変だったか。また何が一番大変だったか
7	引退	引退を考えたきっかけ、時期を教えてください
8	引退	引退後のことについていつから考えていたか。準備はしていたか
9	現職について	現在の仕事について
10	現職について	引退後、仕事に就いて苦労したこと
11	スポーツを通じて培った能力	スポーツを通じて培った能力は何だと思うか
12	スポーツを通じて培った能力	その能力は、現在の仕事に活かされていると感じるか
13	失敗談	やっておけばよかったと思うこと、後悔していること
14	将来	将来の目標、夢について
15	キャリアトランジション	アスリートにおけるキャリアトランジションの課題は何だと思うか
16	アドバイス	今後キャリアを考える人たちへのアドバイス

インタビュー者一覧

◆インタビュー者一覧

#	名前	競技	現職
1	大前 祐介 おおまえ ゆうすけ	陸上選手（短距離） (株)富士通所属	(株)ニューバランスジャパン 早稲田大学競走部監督
2	奥村 武博 おくむら たけひろ	プロ野球選手 阪神タイガース	公認会計士 (一社)アスリートデュアルキャリア推進機構 代表理事 (株)スポカチ 代表取締役
3	小和瀬 麻帆 こわせ まほ	テニス選手 ジョージア大学（奨学生）	EY Sweden
4	高木 大成 たかぎ たいせい	プロ野球選手 西武ライオンズ	(株)西武ライオンズ
5	田邊 美咲 たなべ みさき	陸上選手（長距離） 三井住友海上火災保険(株)	三井住友海上火災保険(株)
6	中村 亜実 なかむら あみ	アイスホッケー選手	(株)バンダイナムコエンターテインメント
7	中山 悟志 なかやま さとし	プロサッカー選手	(株)ガンバ大阪
8	桧野 真奈美 ひの まなみ	ボブスレー選手	社会医療法人北斗病院所属
9	松本 友介 まつもと ゆうすけ	ラグビー選手	(株)リコー
10	山口 美咲 やまぐち みさき	水泳選手	星野リゾート

▶ ※五十音順にて記載

6.3

引退したアスリートによるワークショップ 実施内容・結果

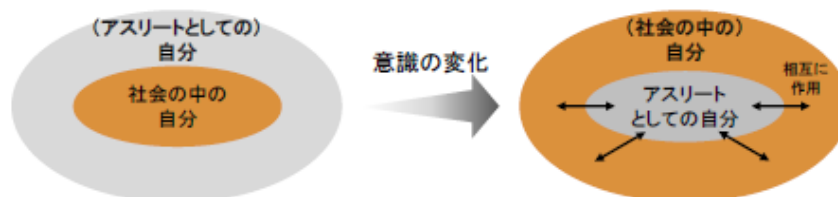
ワークショップ概要

◆ワークショップの目的

- 元トップアスリートや直近の引退選手に対してヒアリングした結果、男性・女性でのキャリアトランジションに対する意識の違いはあるものの、共通して、引退を検討する前からのキャリア教育を要望している。しかしながら、中央競技団体や選手を雇用しているチーム等が積極的にキャリア教育に取り組めていないのが現状である。
- 弊社の独自調査によれば、女性アスリートはビジネス界のリーダーとしても高く評価される傾向がある。優れた女性アスリートの多くは、潜在的に高いビジネスリーダーシップ能力があり、本来、世界中のあらゆる組織で成果を挙げ、影響力のある指導者になる可能性を持っていると考えられている。
- 上記のように女性アスリートの中から優れた人材を発掘し、ビジネス界での活躍やリーダーシップの発揮を後押しするために、EYは、女性アスリートが競技引退後に、起業を含むビジネス分野への挑戦やキャリア転換のサポートを行うプログラム「Women Athletes Business Network (WABN)」を創設し、支援を行っている。
- 今後、国や中央競技団体及び各競技団体等が進められる施策の実証案として、「EY Japan WABNアカデミー」の第1期生が、自身の引退後のキャリアトランジションの悩み、選手時代に考えていたことを、次にキャリアトランジションを考える人たちに伝える場所として、ワークショップを開催する。

◆実施方法

- 元アスリートが競技引退後の自身のキャリアや、アスリートの価値、どの様にネットワークを構築したか等、現役アスリートに伝える場を作り、ワークショップの実施前後での心境変化について調査をする場として計2回のワークショップを実施
<ビジョン>
- アスリートには時代を切り開く能力がある。その力を最大限に引き出し自分らしく輝き続けられる世界を共に創りたい。その第一弾として、「動機付け」にフォーカスを当てこのワークショップを実施。
<ワークショップの目指すところ>
- アスリートが、アスリートである前に社会の中で生きる「ひとりの社会人」であることを自覚することで、引退前後で変わらない自分の価値を知るという大事なことに気付いてもらうことを目的とする。



◆事務局メンバー

- <代表> 山田 明季 (Yamada Aki) / ホッケー 東京2020大会出場 21年引退後、現コカ・コーラ社
- 神谷 晴江 (Kamiya Harue) / 水上スキー 現役 2018年世界シニア選手権大会金メダル 社長
- 銭場 望美 (Senba Nozomi) / パラ陸上競技 走り幅跳び 現役 パラアスリート 現NTTドコモ
- 高田 朋枝 (Takada Tomoe) / ゴールボール 北京パラ日本代表 日本パラリンピアンズ協会理事
- 中村 亜実 (Nakamura Ami) / アイスホッケー 平昌2018大会出場 日本アイスホッケー連盟理事
- 西村 樹里 (Nishimura Kisato) / チアダンス (ダンス、パフォーマンスチア) 元NFLチアリーダー
- 武知 実波 (Takechi Minami) / サーフィン プロサーファー 日本プロサーフィン連盟女子選手会長

ワークショップ実施概要

◆概要

- ・自身の経験や価値観を理解し、アスリートから社会人へスムーズなキャリア転換へのサポートを行うため、計2回のワークショップを実施

【内容】

- ①(ワークショップ1回目) 先輩アスリートによるパネルディスカッション
 - ・事務局の元アスリートによる、引退後のリアルな体験談と現在を共有
 - ・2日目のワークショップの説明を実施
- ②(ワークショップ2回目)
 - ・人生のモチベーション曲線をひとりひとり作成。自身の経験を振り返り、他のメンバーと共有
 - ・アスリートの価値について考える(社会とアスリートはどのように繋がっているのか)

【日時】

- ①2022年11月9日(水) 20時~21時30分 (オンライン実施)
- ②2022年11月23日(水・祝) 11時~14時30分 (EY Japan 東京オフィスにて対面実施)

【参加者】

女性アスリート名4名参加

【参加者メディア】

共同通信、毎日新聞社、デーリー東北新聞社、MY HOCKEY

根深い女性アスリートの悩み ~引退後の社会とのギャップ

1/11(水) 7:03 配信   



Making an ERA 公式Instagramより

アスリートだった自分の存在価値って? セカンドキャリアや自身のアイデンティティーに悩む女性アスリートたちの存在は、世間的にはあまり知られていない。現役中にいくら活躍しても、引退するとその後の長い社会生活へ不安感を覚える例は少なくない。はた目では華やかな競技人生に見えても当事者の意識は異なる。そんな中、元アスリートが現役選手たちに手を差し伸べるという画期的なプロジェクトが始動した。アスリートである前に一社会人として自らを捉えることをサポートするのが主眼。女性の活躍や充実した生き方は今後の日本にとっても最重要課題の一つ。スポーツの分野から国を変えうる動きとして注目が集まる。

■競技人生を否定しかねない状況

本ワークショップを取り上げて頂き、WEBの記事に掲載



ワークショップの実施風景

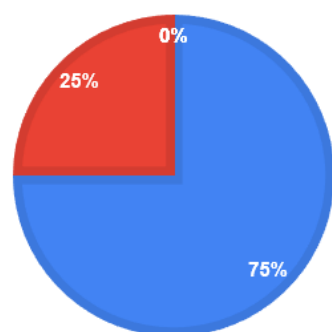
ワークショップ実施結果

◆参加者のアンケート結果

- ・2回のワークショップの内容について、参加者よりアンケートを回収

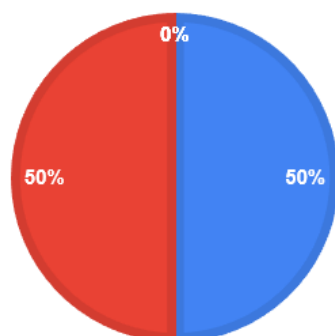
ワークショップ1回目（先輩アスリートによるパネルディスカッション）

・全体満足度（5段階）



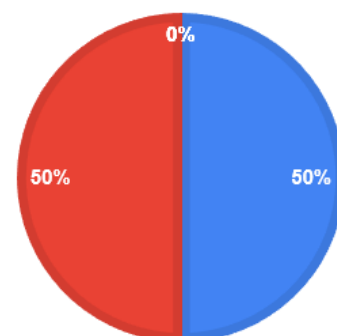
■とても満足	3名
■満足	1名
■どちらとも言えない	0名
■不満	0名
■とても不満	0名

・パネルディスカッション



■とても満足	2名
■満足	2名
■どちらとも言えない	0名
■不満	0名
■とても不満	0名

・グループディスカッション



■とても満足	2名
■満足	2名
■どちらとも言えない	0名
■不満	0名
■とても不満	0名

参加者の感想：

- ・ 違うスポーツの方のキャリア形成への考え方を聞く機会が普段ないので、どのように考えながらキャリア形成に向かっていたのかを聞くことが出来てよかった。
- ・ 事務局、登壇者の想いが伝わる内容だった。また自分の悩みにフィットする内容であった。
- ・ リアルな赤裸々な話、特に中村さんの社会での基礎の部分が自分は知らなかったことについて凄く共感する部分だったので、それでも学び続ければ大丈夫なんだと凄く心強く思いました。
- ・ 近い境遇の方の話を聞いて共感できた

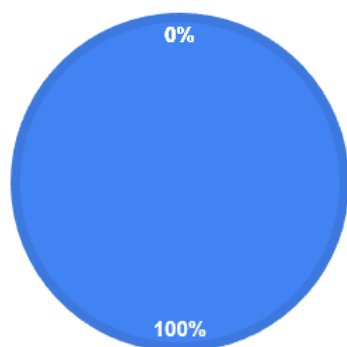
ワークショップ実施結果

◆参加者のアンケート結果

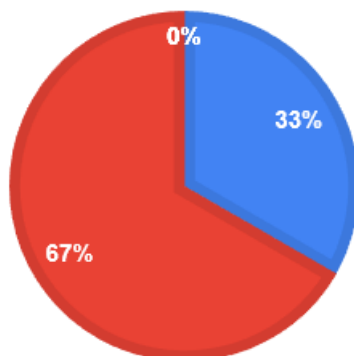
- ・2回のワークショップの内容について、参加者よりアンケートを回収

ワークショップ2回目（ワークショップ）

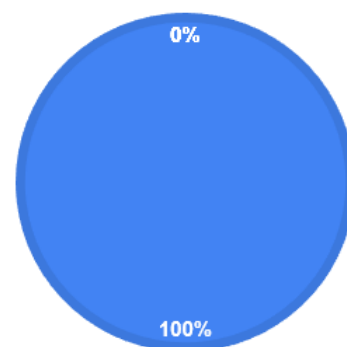
- ・全体満足度（5段階）
- ・少し先の未来を考えるきっかけになったか
- ・今回の学びが今後を活かせると思うか



■とても満足	3名
■満足	0名
■どちらとも言えない	0名
■不満	0名
■とても不満	0名



■とても満足	1名
■満足	2名
■どちらとも言えない	0名
■ならなかった	0名
■全くならなかった	0名



■とても感じる	3名
■感じる	0名
■どちらとも言えない	0名
■感じない	0名
■全く感じない	0名

参加者の感想：

- ・自分の否定してきた自分の過去が今に活きていると気づけたので、自分を認めてあげるいい機会になった。
- ・参加前は自分の価値がわからずただ仕事に忙殺される毎日だったが、これからは目標を明確にし、達成していく事で自然と周りにいい影響を与えられるということが分かったので、実践していきたいと思う。
- ・自分が周りに与えられている影響に関しては考えたことがなかったが、意外と役に立っていることがあったり、もっと自分の経験価値に自信を持っていいのかもしれないと思えた。

1回・2回のワークショップの考察

- ・アンケート結果から満足度の高いワークショップであり、自身の経験や価値観を理解し、社会とのつながりを感じ、参加者全員が“少し先の未来を考えるきっかけ”となった。
- ・同じ境遇であるアスリート同士のネットワークの場が必要という意見も頂いた。

アスリートの、アスリートによる、 アスリートのためのワークショップ

～少し先の未来を考えよう～

Making an ERAとは、“すべてのアスリートが経験や特性、強みを活かし、社会で活躍できる人材育成”をテーマに、WABNアカデミー（※）の卒業生により設立された任意団体です。

今回EY Japan のサポートにより、ワークショップを開催いたしますのでご案内申し上げます。

初回のテーマは「アスリート×キャリア」です。先輩アスリートによる経験談や参加者同士のディスカッションを通じ、少し先の未来を考えるきっかけを提供します。ご参加お待ちしております。

※WABNアカデミー：EY Japan主催の女性アスリートを対象にしたビジネススキル向上のためのプログラム

第1回ワークショップ募集要項

開催日時	2日間実施 DAY1: 2022年11月9日(水) 20:00～21:30 DAY2: 2022年11月23日(水・祝) 10:00～15:00
対象者	女性アスリート10名 ※現役・引退は問いません ◆応募条件: 以下の条件を2点とも満たしていること (i) オリンピック・パラリンピック・国際大会・日本選手権レベルの大会のいずれかに出場経験がある方 (ii) 2日間必ず参加可能な方
参加費用	無料
開催方法	DAY1: オンライン(zoom)で実施 DAY2: EY Japan 東京オフィスにて対面で実施 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1丁目1-2 東京ミッドタウン日比谷 ※新型コロナウイルス対策を十分に行ったうえで実施いたします。
アジェンダ	◆DAY1: 団体紹介、自己紹介、アスリートによるパネルディスカッション ◆DAY2: 個人ワーク、グループワーク ※詳細は2枚目をご確認ください。
申込方法	お申込フォームに必要事項を記入の上、お申込みください。 フォームはこちら→ 
審査方法	事務局にて申込フォームにご記入いただいた情報をもとに審査を行います。 審査結果は10月中にメールにてご連絡いたします。
申込期間	2022年10月1日(土)～10月31日(日)17:00
注意事項	当日はメディアによる取材が入る場合がございます。
問い合わせ	任意団体 Making an ERA 事務局 担当：西村 Email: making.an.era@gmail.com

プログラム

◆DAY1

※プログラムは一部変更となる場合がございます。

20:00～	オープニング(団体紹介、参加者自己紹介・顔合わせ)
20:35～	先輩アスリート3名によるパネルディスカッション (アスリートのセカンドキャリア～リアルな体験談と現在～)・質疑応答
21:15～	グループディスカッション・振り返り
21:30	諸連絡・終了

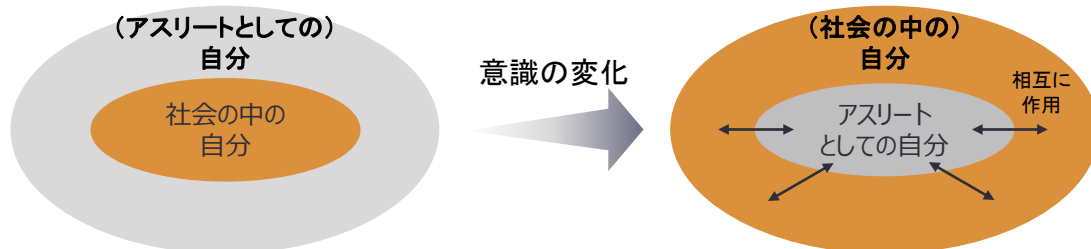
◆DAY2

10:30～	受付開始
11:00～	オープニング
11:10～	ワークショップ (自分の価値観に気づき、なりたい自分像・未来と自分をリンクさせる)
13:30	終了
～14:15	交流会(自由参加)

Making an ERAのコンセプト

『アスリートが「ひとりの社会人」として自分を捉えられるようになるサポートをしたい。』

Making an ERAは、現役を引退し社会に出たときに学んだことや出会いによって「現役時代に知っておきたかった・・・」とアスリートのキャリア構築環境を改善したいアスリート7名によって設立した団体です。私たちの学びから後輩アスリートたちには、現役時代から将来を見据えて引退後のキャリアを考える機会に触れてもらうことが重要だと考えています。アスリートが、アスリートである前に社会の中で生きる「ひとりの社会人」であることを自覚することで、引退前後で変わらない自分の価値を知るという大事なことに気付いてもらうことを目的としています。



『ひとりの社会人』として、新しい時代を作るために一緒に考えてみませんか？

私たちの強みは、アスリートとしての経験を新たな分野で活かすために試行錯誤をしてきた張本人だからこそ、現役アスリートに届けられる気づきや価値を持ち合わせていることです。



Making an ERA
代表 山田 明季

元フィールドホッケー日本代表の山田です。

2021年の引退前、アスリートとしての経験をどのように違う分野で活かすことができるのか。自問自答する日々を過ごしていた中、共感し背中を押してくれる存在を持つ事が非常に重要だと実感しました。同じように人生を掛けてスポーツに打ち込んできた多くの素晴らしいアスリートが、何年経っても自分らしく輝き続けられる世界を創りたい。そんな思いを持った仲間とこのような活動をしています。

※最新情報と運営メンバーの紹介は各種SNSにアップしています。ぜひチェック&フォローしてください。



